ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　＜これが私のお兄様＞

シグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　＜これが私のお兄様＞

【Ｎコード】
Ｎ５６２０Ｔ

【作者名】
シグマ

【あらすじ】
さて、画面の向こう側の諸君。いかがお過ごしだろうか？　私の名前はマクシミリアン・オルコット。オルコット家の長男だ。とりあえずはよろしく頼む。※ということで、多分他には誰もやっていないセシリアの兄がオリキャラのおはなしです。まあ、軽い気持ちで見てください。

プロローグ

さて、画面の向こう側の諸君は「輪廻転生」というものをご存知だろうか？　仏教だかなんだかの宗教観だったはず。簡単にいえば、死んだらまた何らかの形で生命を受けるということ。その中でも、まれに死ぬ前の記憶、いわゆる「前世の記憶」を持ったまま転生する事があるらしい。まあ、どこかの漫画で言われていたことだ「あり得ないことこそあり得ない」と。それに、探せば半魚人もネッシーも宇宙人もいるだろう。ここまで来ると悪魔の証明になるけども。まあ、とにかく何が言いたいかというと。私はその「前世の記憶を持ったまま転生した」ということだ。しかも複数。安心しろ、私も混乱している。

「マックス。何をしているのです？　早く次の問題を解きなさい」

「分かりました母上」

マクシミリアン・オルコット。愛称はマックス。それが今の私の名前らしい。そして、私はイギリスの貴族「オルコット家」の跡取りとして目下英才教育を受けているところだ。

さて、まずは何から話すか。私の前世はある意味波乱に満ちていたようだ。前世の記憶と言っても、映画を観るような感じなので記憶というより記録だろう。とにかく、私の前世は軍人だったようだ。ただ、マクロスだのＯＲＣＡだのよく解らん単語があるのだが。フォールドだのコジマ粒子だの。知らんよ。

まあ、そんな感じで生まれた直後から物心はあった。無論、前世の記憶を詳細に見ることができるようになるには時間はかかったぞ？

おっと、話がそれたな。とにかく、前世の記憶があるということは幼児の頃から言葉を理解したり、勉強ができた。さて、ここまで言えば分かるな？　そう。生まれて三年で神童扱いだ。それからは、幼児にやるのかというほどの勉強漬けだ。前世の『私たち』はどなたも博識だったようだからそこは幸いだった。

「しかし、期待してくれるのは嬉しいが……される方としては重石なのだが」

「仕方ありません。奥方もマクシミリアン様にこの家を継いでもらいたいからこそなのです」

「確かに父上が弱気なのは認めるがね」

私専属の執事であるレイスはそういうが、こちらとしてはたまったものではない。そもそも私は今、１０歳だ。これが１０歳の言葉か？　まったく、前世の記憶持ちというのも困ったものだ。おかげで学校でも浮いた存在だ。

「そういえば、妹は何時生まれる？」

「医師の話ではひと月以内かと。奥方もすでに病院のほうに」

「そうか。せめて妹には好きなように生きてもらいたいものだ」

オルコット家は私が継ぐだろう。だから妹には自分の夢を叶えて欲しい。そのためのバックアップは惜しまん。

「さて、レイス。行くぞ」

「御意」

妹の事も気になるが、今は帝王学を学ばなければな。せめて、妹と遊ぶ時間が取れればいいのだが。

ちなみに、前世の記憶は全て有効活用しているよ？　せっかく知っているんだから使わなければ損だろう？

第1話　兄、動く

さて、画面の向こう側の諸君。いかがお過ごしだろうか？　そろそろそちら側では梅雨入りした頃ではないかな？　イギリスは……まぁ今のところは過ごしやすいよ？　時に諸君。君たちは犬は好きかな？　私は好きだよ？　あのこちらを見上げてくるクリクリとした目。そして、同時にパタパタと振られるしっぽ。実に愛くるしい。私は、動物は基本的に好きだ。その中でも特にといった感じだがね。さて、私が何を言いたいかというと――――。

「おにいさま～」

「セシリアか。よく来たね」

我が最愛の妹であるセシリア・オルコットが実に犬っぽいのだ。何だね？　シスコンと言いたければ言えばいいさ。

さて、三年前。私が１０歳か１１歳の頃に妹が生まれた。つまり、今私は１３，４歳。妹は三歳だ。

「えへへ～おにいさまはあったかいです」

「そうか。だが、セシリアも暖かいぞ？」

「そうですか～？」

現在、私は段々とオルコットを継ぐ者として覚醒しつつある。まあ、大層な言い方はしたけど、要するにオルコット家の経営に参加し始めているということだ。といっても、やれることは精精が屋敷で雇っている侍従たちの査定などだがね。まだ見習いなのだよ。

「おかあさまたちは今日も喧嘩していました……」

「まあ、確かに最近になって回数が増えてきたな」

あれは喧嘩でもないだろう。父上が一方的に詰られているだけ。ただ、あれも母上の愛情表現だろう。父上にもっとしっかりとして欲しいから。自分が初めてあったときのように輝いて欲しいからだろう。

ここで、私の両親について軽く説明しよう。父上は入婿だが、実際は母上の方から結婚を申し込んでいる。父上はかつては国内でも有名な弁護士だった。その頃は、自信に満ち溢れていた。母上と出会ったのもオルコット家が経営する「オルコット・インダストリー」が父上に依頼したからしい。その件で母上が一目惚れしたらしい。しかし、結婚後にある事件が起こった。詳しくは知らないが、何でも依頼人が首を括ったらしくそれからは今のように卑屈というか、他人の顔色を伺うようになってしまった。

母上が「私のせい」と言っていた。理由は知らないし詮索するつもりもないが、何かしら関係があるのだろう。

「セシリア。父上は確かに弱気な方だ。でも、母上はそんな父上を愛しているんだ。だから、早く仲良くなるように私たちは祈っておこう」

「はい！」

全く子供に心配させないで欲しいものだ。あの二人が仲直りするにはそれこそ『世界が変わる』しかないな。

そう思っていた昔の自分を殴り飛ばしたい気分だよ。

「レイス。これは映画の撮影でもないんだな？」

「はい。全て現実ですね」

あれからまた時が過ぎ、私も１８になった。セシリアは母上の気質を受け継いだのか、私やレイス、彼女の専属メイドであるチェルシー以外の人間には高飛車な態度を取るようになってしまったが、それでも友人が多いのはいいことだろう。

そして、私は今ある中継を観ている。レイスに調べさせたら数分前に世界中のメディアをジャックして流されている中継。

「インフィニット・ストラトス、か」

私と同い年という日本人の女性が作り上げた宇宙開発用のパワードスーツ。オルコット・インダストリーにも情報は流れてきた。『マクロス』や『ネクスト』といった機動兵器の記録を知っている私からすれば純粋に素晴らしいと思えたのだが、やはりこの世界ではアニメや漫画の妄想とされたらしく、どこも取り合わなかったらしい。

「その結果がこれ、か。で？　このＩＳだったか？　これを操縦している女性のデータは？」

「日本国籍の織斑千冬。年齢はマクシミリアン様と同じです」

「全く、こんなのと同い年とは……彼女たちは化け物か？」

といっても、私にも似たような技術などがあるため人の事は言えないだろう。ちなみに、私が「バルキリー」や「ノーマル」「ネクスト」の技術を表に出さなかったのは、ただ単にそれをするだけの力がなかったからだ。まぁ、オルコット家を継いだら経営の片手間にするかもしれんな。さて、そんな事より――。

「レイス。すぐにインフィニット・ストラトスについての情報を集めろ。母上にも伝えろ。この性能…確実に軍事バランスが崩れる」

「御意」

ＩＳがどうやって作られたかは分からない。だが、結果としてここに存在している。もう妄想などとは言えない。

「母上には悪いが……これは頑張ってもらわなければな」

私はどうやってもこれに関わることはできない。ならば、母上に頑張ってもらうしか無い。父上もここで男を見せれば夫婦円満になれると思うのだが。

しかし、どうやら神は私の願いを聞き入れてくれなかったようだ。

「マクシミリアン様。奥方と旦那様がお亡くなりになりました」

「……そう、か」

数週間後、私が聞いたのはＩＳの情報を集めるために世界中を飛び回っていた両親が死んだという報告だった。

第1話　兄、動く（後書き）

さて、ということで続いてしまいました。

主人公は、マクシミリアンとセシリアの二人。セシリアは別人気味になる可能性が高いです。でも、いいよね……大丈夫、だよなぁ……いけるよ、ね？

第2話　兄、掌握する

さて、画面の向こう側の諸君。いかがお過ごしだろうか？　様々な前世の記憶を持っている私でも両親の死というのはなかなかに応える。だが、落ち込んでいることもできないのだよ。突然の事故死とは言え、両親が死んだのは事実。そして、オルコット・インダストリーだけではなくオルコット家も混乱しきっている。なにより、両親の事故死によりこれ幸いと利権を貪ろうとする連中が出てき始めている。それらの駆除もしなければならない。

「チェルシー。君はセシリアについてやってくれ。あの娘にはまだ母上たちの死は受け入れられないだろうから」

「はい」

「レイス。行くぞ。まずは、ハゲタカたちを潰す」

「御意」

さて、どうやってハゲタカたちを潰してやろうか。どうすればいいと思う？　マクシミリアン・テルミドール。

結果からいおう。速攻で片がついた。記憶にあるマクシミリアン・テルミドールの口調などは実に役に立った。まあ、レイスがサポートしてくれたおかげだろうがな。詳しい事は省かせてもらうが、オルコット・インダストリーなどの利権もある程度手放すことで決着がついた。まぁ、軍需面は全て抑えさせてもらったから問題はない。私の予想ではＩＳのシェアを得るためには必要だからな。だが――。

「……まさか、ＩＳが欠陥兵器とはな」

「欠陥兵器ですか？」

おっと、呟きが漏れていたか。

「実際そうだろう？　女性しか使えないなんて兵器としては欠陥品だろう？　そもそも、宇宙開発用のパワードスーツにしても、だ。

女性しか使えないなら意味が無いだろう？」

というか、完全に兵器としての運用を前提に作られていたんじゃないか？　開示された情報は軍事バランスを崩壊させるものだが、コアを限られた数しか作らないと言った時点で欠陥品だろう。それに、能力ではなく性別で搭乗者が決まるようでは……。

「だが、それでも世界は変わるのだろうな」

これも私が望んだからか？　いや、それは自意識過剰か？

「……」

「ふぅ。今日は疲れた。先に休む」

「おやすみなさいませ」

全く、内心を悟って何も言わないとは……できた従者だよ。

ＳＩＤＥレイス

画面の向こう側の皆様。お初にお目にかかります。マクシミリアン様の専属執事のレイスと申します。さて、今しがた我が主であるマクシミリアン様はお休みになられました。ここからは私が進めさせていただきます。

私がマクシミリアン様と出会ったのはマクシミリアン様が『神童』と呼ばれてまもない頃でしたね。ん？　そこら辺の話はいい。さっさと話を進めろ？　承りました。

「先輩。マクシミリアン様は」

「おや、チェルシーですか。マクシミリアン様ならお休みになられました。何か伝言がありましたか？」

よかったですね？　話をすすめるに丁度いい人間が出てきましたよ？　彼女はチェルシー・ブランケット。マクシミリアン様の妹君であられるセシリア様の専属のメイドです。といっても、彼女の場合は気心の知れた幼馴染といった意味合いが強いですね。ちなみに、

私の後輩ですね。

「いえ。お嬢様がマクシミリアン様の事を寝言で呟いておられたので、時間があればせめて、と思いまして」

「なるほど。ですが、専属執事としては却下させていただきます。マクシミリアン様は先ほどまでハゲタカたちを相手取っていましたので。それに、ここ最近まともに睡眠を取られていないようなので」

マクシミリアン様の精神は成熟しきっています。それこそ『一度死んだ人間がもう一度やり直している』ように。まあ、私にとってはそんな事はどうでもいいんですけどね。しかし、やはりご両親の死は堪えたようです。今は、セシリア様という庇護すべき存在がいるためギリギリのところで持ちこたえているようなものです。しかし、危険な状態には変わらないわけで。息抜きをしていただきますか。

「チェルシー。明日から、数日の間で構いません。マクシミリアン様とセシリア様を連れて別荘に行ってください。食材やらなんやらは私の方で手配しておきます」

「……しかし、その間ここは？」

全く、察して欲しいですねぇ。まぁ、それも彼女が有能だからでしょうけど。

「私がやっておきます。とにかく、マクシミリアン様にもセシリア様にもここは休んでいただきましょう」

「わかりました」

さて、そうなると色々と手回しをしなければなりませんね。え？　私にマクシミリアン様の代わりが務まるのか？　愚問ですね。私はあの方に仕えてきた執事ですよ？　代わりくらいは務まります。それに、私の名前をご存知ですか？

幽霊（レイス）ですよ？　よく言うじゃないですか。幽霊は人に化けるのが巧いと。

第2話　兄、掌握する（後書き）

短いかも知れないですが、まあ段々増やしていきたいと思います。
それと、ちょっと聞きたいことが…。

1. 今回は一人称で書いていますがこんな感じで大丈夫でしょうか？　マクシミリアンの喋り方が気に入らないとかあれば三人称で書いていきたいと思いますが。

2. マクシミリアンにヒロインを付けるとすれば誰？

ちょっと回答の方をよろしくお願いします。それと、感想の制限を外しました。

第3話　兄、休暇をとる

さて、画面の向こう側の諸君。今気づいたのだが、『向こう側』というのは私から見てという形なのだが……そちら側と言ったほうがいいかな？　まあ、どうでもいい話か。さて、私は現在ウェールズにあるオルコット家の別荘にいる。レイスに休むように言われてね。セシリアとチェルシー。それと、レイスが用意したというガードマンたち（どこかに隠れているようだ）と来ているのだが……まぁ、快適だよ。ただ、いきなり仕事をしなくなったからどこか物足りないがね。

「お兄様？」

「いや、なんでもない。どうした？」

「はい。その……お散歩にでも行きませんか？　色々お話ししたいこともありますので」

「ああ」

そういえば、最近はセシリアに構ってやることもできなかったな。よし、休暇の間は構い倒してやる。ん？　シスコン？　自覚しているよ。

ＳＩＤＥ　レイス

さて、画面の向こう側の……おや、私の語りは要らない？　まあ、一々そう言うのはマクシミリアン様だけで充分でしょうね。残念です。

まあ、私が何をしているかというと簡単なはなしです。オルコット・インダストリーで陣頭指揮をとっています。まあ、元々各セクションのリーダーが優秀なので余程の問題がなければ大丈夫なんですがね。

「しかし、予想以上に女尊男卑の風潮が速く広がりましたね」

ＩＳが女性しか扱えないことが分かった瞬間からこうなることは分かっていました。ですが、ここまで速く広がるとは思いませんでしたよ。まあ、女尊男卑とはいえ各国政府の上層部などは代わりませんし…精精が軍の下の方が変わるくらいでしょうか？　ただ、それに便乗するバカ女がでないとも限りません。

「面白く無いですねぇ。人は人種、性別で差別されてはいけない。能力で差別されなければ」

マクシミリアン様は実力主義です。すでに、その旨をオルコット・インダストリーの全社員に通達しています。要するに、能力があれば昇進できる。でも、能力がなければ無理。そんな感じなので社員たちは頑張っていますよ？　勿論、努力はすればするだけ評価します。簡単にいえば「働かざるもの食うべからず」という奴ですよ。

まあ、そんな感じなのでオルコット・インダストリーの中に関しては、女尊男卑は無いと考えていいです。ただ、周りの会社がうるさいんですよねぇ。元々、マクシミリアン様が若いからと侮る馬鹿が多かったのですが、それに輪をかけてドコゾの女性運動家などが女性を男性の下に付けているのは何事かと言ってくるのです。まったく、これだから目先の事しか考えられない人は嫌いですよ。

「我が社は実力主義です。実力があればどんどん昇進できます。現に経営陣には女性もいます。この意味がおわかりでしょうか？」

ついついそう言ってしまいましたよ。それでもうるさかったのでその方が所属しているグループの不正などが『偶然』世間に知られてしまいました。いやぁ、『偶然』って怖いですねぇ。

「まあ、この世間の風潮も気にせずに進んでいきましょうか。そういえば、ＯＲＣＡの方々はしっかりと仕事をしているんでしょうかねぇ」

マクシミリアン様の護衛を主任務とするオルコット・インダストリーの私兵集団。いや、私もびっくりですよ？　なんであんな化け物集団が集まったのか。ただ、思惑はどうあれ全員が裏切ることはないと誓っているからよしとしましょう。

「さて、そろそろＩＳ方面に手を伸ばしますか」

マクシミリアン様が常々考えておられた様々な武装。それをＩＳ用に改良するのは疲れると思いますが…まあ、そこは私たちがサポートしていけば大丈夫ですね。おや？

「オルコット夫妻の事故についての報告ですか……これはこれは」

奥方たちの死亡事故。どうやら、オルコット家に恨みを持つ者の犯行だったようですね。しかも、これは逆恨みでしょうね。だって『会社の金を横領して解雇され、家族に逃げられたから』とか……何

と言う馬鹿でしょうか。そのために、列車事故を引き起こした、と。

「すぐに身元を割り出しましょう。精精、報いを受けてもらいましょうか」

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

私だ。さて、今は湖の畔に腰掛けてセシリアとのんびりしているよ。しかし、この子にも色気というのが出てきたな。ん？　小学生くらいだろう。まだ早くないか、だと？　この時期の女性の成長は早いぞ？　まあ、そこら辺はプライベートなので私は関与していないが。

「お兄様は辛くはないのですか？」

「ん？」

「お母様たちが死んで、お兄様はオルコット・インダストリーやオルコット家を守るために頑張っておられます。先日も、利権を貪ろうとする輩とやりあったと聞いています。ですのに、私は何も……」

ふむ。普通はそんな事を考えなくてもいいものだが…やはり血筋ということかね？　もしくは…チェルシーの教育の賜物か。

「セシリア。兄は妹を守るものだ。お前は気負わなくてもいい。好きなように生きてくれればいい」

「ですが！　オルコット家の者として、与えられるものを享受するだけではいけないのです！」

なんだろうか。母上を思い出すな。あの方もこんな感じだったな。

「お兄様。私はＩＳに乗ります。オルコットの力を世界に魅せつけてやります。子供だからとお兄様を侮っている奴らを絶句させてみせます」

これは……言い負かすのは簡単だが、チェルシーの報告ではずっと落ち込んでいたらしいからな。まあ、目標ができたならいいことかも知れない。

「ならば、私はお前のためにＩＳを作ってやる。コアは手に入れることができるかは分からん。だが、もし手に入れることができたら、またはお前がコアを手に入れることができたら私のすべてを使ってお前を支援する」

「はい！」

もしかしたら私の知っている技術をいくつか使えるかも知れないな。今のうちにイギリス政府に働きかけておくとしよう。そのためには、他の企業をけ落としておくか。ん？　重度のシスコンだと？　だからどうした？　たった一人の肉親だ。大事にしておいて何が悪い。

「（今のうちに色々武装のデータを作っておくか。むしろ、どうにかして無害なコジマ粒子を――）」

「お兄様！　今は休暇ではなかったのですか？　もっと私とお話しして欲しいです」

「すまん。どうにも……そっちの方を考えてしまい「とにかく、お兄様はもっとゆっくりとするべきです」」

なんだろうか……妹に怒られるのはこう……切ない。

第3話　兄、休暇をとる（後書き）

ということで、お兄さんは今度はイギリスを掌握するために頑張ります。そして、お兄さんの親衛隊としてＯＲＣＡが出てきましたが名前だけでしょうね。それと、文章は基本的にこんな感じで書いていきたいと思います。それと、ヒロインについてはもう少し考えておきたいと思います。それと、以下のようなことを考えています

1．鈴の兄貴を登場させる（シスコン）。

2．マクシミリアンと鈴の兄貴にＩＳコアが与えられる。

2はこの小説の今後に関わるのでご容赦ください。ついでに、鈴の兄貴はそのうち出ます。ヒロインは未定。

それと、例のごとくハヤテと慎吾が出てきます。影は薄いですが、バックグラウンドで活躍してくれるはずです。では、また次回。

第４話　兄、白騎士と天災に出会う

画面の向こう側の諸君。私だ。ＩＳが世に出てから色々と世界は変わったようだが、あえていおう。所詮はただ吠えるだけしかできない連中が力をつけただけ。今まで世界の覇権を握っていたのは男だ。その証拠に、各国上層部などはメンツが変わっていないだろう？そういう事だ。

さて、私が何をしているかというと日本に来ている。イギリスはすでに掌握した。まあ、掌握したと言ってもイギリスの軍事面だがね？　やはり、金の力は偉大だよ。どんなに女性の地位向上を狙おうとしても、ＩＳがもたらす利権をあさろうとしても先立つモノがなければ、なぁ？　まぁ、そのおかげもありイギリス政府にもある程度圧力を掛けることが可能になった。といっても、先見の明がある議員たちの後ろ盾になっただけだよ？

話がそれているな。そこら辺はまたいずれ語るとしよう。私が日本に来ているという話はしたな？　ＩＳ学園との交渉のためだ。

ＩＳ学園とはまあ、簡単にいえば実験場か？　ＩＳ操縦者の育成などを考え日本政府が作った教育施設。いや、正確に言うならば『作らされた』施設だな。アメリカなどの大国が他国を巻き込んで宣言させた。本来なら、私は関知しないのが正しいのだろう。だが、どうも好きになれないのだよ。一方的に作れと言っておいて、利権だけを貪ろうとする連中は。

「ということですので、首相。イギリス政府、というよりは我々オルコット・インダストリーがＩＳ学園のスポンサーになりましょう。その代わりと言ってはなんですが、出来る範囲で構わないので我が社が作っている機材などを使用していただきたい」

オルコット・インダストリーはゆりかごからミサイルまで手広く商売をしている。椅子にしろ機械にしろ実証データが欲しいのだ。それに、継続して資金を融通してくれる人間は欲しいだろうしな。

「そ、それは我が国としてはありがたいのですが……」

「ご心配なく。実は、私の妹がＩＳの国家代表を目指しておりまして。そう遠くないうちにここに来ると思うのです。まあ、過保護と言われればそれまでなのですが、ね」

さて、どう出る？　一応、過保護な兄のようにふるまってみたが……ふむ。顔色が一気に変わったな。御しやすいとでも思ったかな？　甘いねぇ。オルコット家の人間は御することはできんよ。なにより、我が妹はあの年で自分自身の「ノブレス・オブリージュ」を持っている。そちらが擦り寄ろうとしても無駄だよ。

さて、日本政府との交渉も終わったし……せっかくだ、セシリアに土産を買うか。

「ということで、何がいいと思うかな？　白騎士殿」

「……」

私の隣にいるのはＩＳを最初に動かした女性織斑千冬。何故、一緒にいるかというと首相との交渉の帰りに偶然あったので会話をしていたら、といった感じかね。

「白騎士、という名称は気に入らないか？　なら、織斑女史。妹に買っておいたほうがいい土産は分かるかな？」

こんな感じで話しかけているのだが、あちらはニコリともしない。もう少しコミュニケーション能力をつけたほうがいいと思うがね。

「お前は、何故ＩＳ学園のスポンサーになった？」

「妹のためだ。最もそれが全てではないがね」

この発言を聞くとどうも織斑千冬とは同類の匂いがするなぁ。共に妹や弟を持つ存在。彼女もシスコンかな？　いや、確か弟だったからブラコンか？　もしそうなら互いの兄弟のいいところを話しあってみたいな。まあ、そこは置いておこう。

「君が何故篠ノ之女史を手伝って世界を変えたのかは知らないし、聞く気もないよ。ただ、覚悟はあるのかな？　すべてを失う覚悟が」

「どういう事だ？」

おや気づいていないのか？　これは織斑千冬の評価を修正しなければならんか？　まあ、今まで一般人だったから仕方ないか？

「何か行動を起こせば必ず代償が必要になる。歩けば体力を失うように。しかし、私の調べたところ君たち二人は何も失っていない。だから、覚悟しておきたまえ。いずれ世界を変えた代償が、報いが君たちの前に現れる。私のようにな」

「私のように？」

おっと言い過ぎたか。ちなみに、私はあれだな。マクシミリアン・テルミドールだ。彼も似たように代償を払った。私も、いずれは代償を払うだろう。

「まぁ、何事にも例外はある。そう心配するな。それに私はなにもしないよ。だから安心したまえ篠ノ之女史」

「……へぇ～気づいていたんだ」

「束！？」

「これでも気配を探るのは得意なんだよ。仕事柄君たち以上に恨まれているからね」

ＯＲＣＡの連中が護衛をしていると言っても黙っている必要はない。私自身広範囲攻撃がなければ大抵の人間に勝てる自負はある。ＩＳにも陸上でなら勝てないまでも負けることはない。

「ふ～ん。どうでもいいけど、君は『何』？　歪すぎるよ？　器と中身が違う…違いすぎる。君を見ていると『中国の怪物』を思い出すよ。あのシスコンも君と同じような雰囲気を纏っていたよ」

「我思う故に我あり、だ。私は私だよ。例え、歪だろうが何だろうが。私はマクシミリアン・オルコットという一人の男だ。ところで、その『中国の怪物』について聞いてみたい」

それに、篠ノ之束も同じくらい歪だろうに。自覚しているのかしていないのか。分からないが、な。中国の怪物か…本社に戻ったら調べるか。シスコン、か……何故だろうか。良い友人になってくれそうな気がする。

「ふ～ん。なんか面白いね。気に入ったよ『場違いな人間（オーパーツ）』」

オーパーツ、か。まあ、的を射ているというべきか？　だが――。

「場違いならばその場所を変えればいい。貴女も似たようなことをしただろう？」

「そうだね。うん、やっぱり君は面白いね。確かオルコット・インダストリーだったよね？　特別に君にもＩＳコアを作って送ってあげるよ」

「それはそれは。『君にも』という言葉が気になるがそこは置いておこう。では、代わりと言っては何だが君たちのお願いを聞いてあげよう」

意外な拾い物をしたな。織斑千冬は状況が理解出来ていないようだが、天才の思考回路はよく解らんからな。

「じゃあ、束さんのアジトをイギリスに作ってよ。中国の虎も中国にアジトを作ってくれたし」

「いいだろう。最も、もし見つかっても私は関与せんぞ？」

「それでいいよ～」

その後は、妹への土産は何がいいのかという話になり、妹がいる篠ノ之束と白熱した論争を繰り広げた。いやぁ、仲間がいてくれてよかった。ただ、一番可愛いのはセシリアだがな。

ちなみに、イギリスに戻って『中国の怪物』を調べてみた。

「『凰王虎（ファンワンフー）』、か。中国の映画界の若きトップスター。実際に中国拳法の達人で、様々な逸話を持つ男、か」

掌から衝撃波を出した、その衝撃波で空を飛んだ、超弩級のシスコンで妹のために軍と一対一で戦った、か。この男は人間なのか？

いや、私も大概なのだろうが……うぅむ。

「これがＩＳコア、か」

「解析は無理ですね。ブラックボックスですよ」

「仕方ない、な。とりあえず体を作るか」

差出人不明の荷物がオルコット・インダストリーに送られてきた。中身はＩＳコア。おそらくは篠ノ之束からの贈り物だろう。登録されてはいないが、篠ノ之束により作られたコア。

「アンサングを作るか、それともステイシスか。はてまたバルキリーか」

「社長？」

「いや、なんでもない」

個人的にはアンサングがいいな。ただ、人間の体に逆関節をどう付けるか何だがな。そうなるとステイシスか。まぁ、どうでもいいか。ん？　無理して人と同じ大きさにする必要は無いのか？

「そういえばセシリアはどうした？」

「はい。セシリア様なら先ほどお帰りになられまし「お兄様！」ほら」

危なかったな。セシリアを信じていないわけではないが、この子はまだ物事の裏というのを知らない。いずれは教えていきたいが、今は時間がな。さすがに会社が個人的にＩＳコアを所持しているというのはできるだけ秘匿しておきたい。せめて、もう少し世間が落ち着くまではな。

「お帰り。どうした？　随分嬉しそうだな」

「はい！　ＩＳ適正がＡだったんです！」

適正がＡというのは国家代表クラス。我が妹ながらすごいものだ。

「そうか。頑張ったな。よし、今日はささやかながらパーティでもするか。丁度、私も仕事が一段落ついたからな」

コアの解析は急ぐものでもないし、ＩＳの体のほうもゆっくりやっていけばいい。確か、日本のことわざで「急いては事を仕損じる」という言葉があったな。

「では、私も料理をふるまいますわ！」

「それは楽しみだ」

確か、チェルシーに家事を習っていたから問題はないよな？　最初の頃は甘すぎた料理を出していたが……もしや甘党か？　誰だね、ただの味音痴といった奴は。セシリアがそんな失敗をするわけがないだろう？　多分、セシリアは甘党なんだよ。

第４話　兄、白騎士と天災に出会う（後書き）

とりあえず、マクシミリアンの束さんからの評価は「場違いな人間」です。ただ、それを言うと束さんも何ですけどね。

今回、鈴の兄が名前だけでてきました。中国は一人っ子政策があるからどうなの？と思われる方もおられると思いますが、香港やマカオは免除されていたり、少数民族も同様なので絶対ではないんですよね。まあ、そんな感じで。

ちなみに、マクシミリアンはＩＳには乗りません。乗っても、会社の地下で乗るくらいです。だからと言って、アンサングなどを作って乗るのか？と言われればまだ決めてはいないです。ただ、ひとつだけ言えることは『強化人間』は出てきます。

それと、セシリアのＩＳの名前は変わるのでご了承ください。だいじょうぶだよね？

追記：マクシミリアンのカップリングは箒、千冬辺りで考えようと思います。ちなみに、鈴の兄はナターシャかクラリッサ辺りで。あの人らミーハーっぽいから。

第5話　兄、決意する

さて、画面の向こう側の諸君。そちらは段々夏に向かっているらしいがいかがお過ごしだろうか？　こちらは…まぁ、普通かな？　とりあえず、近況を話そうか。セシリアが代表候補生になった。あ、ちなみに時間は結構進んでセシリアは来年、日本のＩＳ学園に入学するぞ？　すまんね。特筆すべき事項もあまりないのだよ。私もＩＳを男で唯一扱えてはいるが、オルコット・インダストリーの地下研究所での武装などのデータ取りのために使っているくらいなのでな。それに、私はテルミドールやジーナスの記憶を持っているとは言え、どちらかというと裏方なのでね。

それと、数年前から凰王虎とメールをし始めた。彼も妹が中国の代表候補生になったらしく、入学式には出られないが４月の内に学園に行くらしい。彼も篠ノ之束に気に入られたらしく、ＩＳコアを持っているらしい。ただ、私と同じくそれを表にはだしていないらしい。彼とは一度あって妹談義をしてみたいな。

「それが、セシリアに与えられたＩＳか」

「はい。名前はまだ決まっていないようですが、この『ブルー・ティアーズ』が最大の特徴だそうです」

「ブルー・ティアーズ」か。おそらくは、「マクシミリアン・ジーナス」の記憶にある『ゴースト』のようなものか。独立操作型兵器と言ったところか。

「ＩＳの名前はどうする？」

「そうですね……『ノブレス・オブリージュ』などどうでしょうか？」

……ん？　何故だ？　何故か企業リンクスの理想型を思い出す……あぁ。機体の名前が同じだったか。

「まあ、お前の機体だ。好きにしなさい。それより、そのブルー・ティアーズの訓練と行こうか」

「はい！」

良い返事だな。

ブルー・ティアーズはアニメでよくある「ビット兵器」だ。だが、それを完全に操作するのは相当な訓練を行わなければならない。例えるなら、右手で○を左手で？を書くようなものだろう。かと言って、予め軌道を設定しておくのはすぐに破られる。ならばどうするか。

「学習用ＡＩを搭載すればいい。セシリア、どうだ？」

『はい。この子…すごく物覚えがいいです』

ふむ。成功、か。『ゴースト』用のＡＩを再現して搭載してみたが…中々好調のようだ。ＩＳコアに外付けする形だ。とにかく、このＡＩは様々な動きを覚えさせ『頭をよく』していかないといけない。

「セシリア。とにかく、そいつを動かせ。そうすれば、いずれ自分で考えてお前が動きやすい様に動いてくれる」

『はい！』

だからといって、セシリアはそれだけでは終わらんぞ？　なんというか…自分で動かすのも忘れていない。ＡＩの軌道と混ぜることで相手を撹乱することもできる。

『お兄様。この子を屋敷の中で展開しておいてもよろしいですか？』

「それもまた訓練だな。いいだろう。ただし『休むこと・屋敷に身内しかいない時以外は使わないことでしょう？』…分かっているなら何よりだ」

最近、セシリアが随分としっかりしてきた気がする。なんか……こう。その成長が嬉しいような寂しいような。それと最近母上に似て可愛くなってきたが……ボーイフレンドとかいるのか？　いや、私としてはセシリアが選んだ男なら文句はない。勿論、一発殴るがな。ただ、まだそう言うのは早い気がするのだ。いや、いずれはセシリアとその夫にオルコット家やオルコット・インダストリーを頼むつもりだが、やはりこの「お兄様？」

「なんだ？」

「いえ。そのなにやら考え込んでいたご様子なので」

「いや、気にしないでくれ。くだらないことを考えていただけだ」

まぁ、セシリアが話してくれるのを待つとするか。やはり、ここは大人の余裕というかそんな感じのものを持っておくべきだろう。うん。

心配するな。混乱しているのは自覚しているよ。ただ、画面の向こう側の諸君の中にも妹などを可愛がっている方はいると思う。ん？　いない？　なら、想像したまえ。そんな可愛がっていた存在が成長したら混乱するだろう？　私は現にしているよ。まあ、ここまでにしておこう。このまま一方的な問いかけは無意味だ。

「それではお兄様。私は先に屋敷に戻ります」

「ああ。大丈夫だとは思うが気をつけてくれ」

「大丈夫ですよ。ＯＲＣＡのみなさんが守ってくださっていますし」

ＯＲＣＡの一部メンバーにはセシリアの護衛を頼んでいる。どうも、レイスの報告では母上や父上が死んだ列車事故が仕組まれている可能性が出てきたのでね。一応、セシリアにもこのことは知らせている。知っていたほうが、色々と都合がいいのでな。

「どこの誰が仕組んだのかは知らん。だが、いずれ見つけ出す。それに、セシリアを狙うようであるならば……私の全てを持って存在を消滅させる」

妹まで奪われるのは耐えられないからな。必ず尻尾を掴む。

この半月後、セシリアは日本へと旅立っていった。私は、そのことにセシリアの成長を喜ぶとともに少しの寂しさを感じたよ。一応、暇が出来れば学園を尋ねる予定ではあるがね。ん？　職権濫用じゃないか？　権力とは使うためにあるのだよ。

ＳＩＤＥ　セシリア

私もお兄様の真似をしようと思います。画面の向こう側の皆様お初にお目にかかります。オルコット家長女のセシリアと申します。私は今、ＩＳ学園に向かっています。

「織斑一夏、ですか」

そして、イギリスを発つ数週間前に世界中に知らされた『ＩＳを世界で唯一扱える男』の事。まあ、お兄様も扱えるのですがお兄様の場合はオルコット・インダストリーの経営などからストレス発散・武装のデータ取りの為に利用しているだけらしいので情報を表に出すことはしないそうです。まぁ、それも当然といえば当然でしょう。そうなれば、お母様たちを殺したという連中が動くかも知れません。そう考えると秘匿するのが当然。

「この殿方はどのような方なのでしょうか」

あの『ブリュンヒルデ』織斑千冬の弟。勝手に期待するのは悪いのかも知れません。ですが、世界はそう見てしまいます。私が『オルコット家の長女』という色眼鏡で見られるように。とにかく、どのような方なのでしょうか。もし、ただ状況を享受するだけの軟弱者でなければいい友人になるかも知れません。そんな事を考えているといつの間にか飛行機は空港についていました。

「さて、行きましょう『ノブレス・オブリージュ』。オルコット家の娘として、そしてマクシミリアン・オルコットの妹として恥ずかしくない振る舞いを」

男だからと軽視はしません。性別・生まれで差別はしない。それが私の持論ですから。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「初めまして、かな？　私がマクシミリアン・オルコットだ」

「では、こちらも初めまして、だ。凰王虎だ」

やあ、私だ。今私は、オルコット・インダストリーの応接間で友人と会っているところだ。

「しかし……噂に聞いていたよりも精悍な顔つきだな」

顔立ちはそうだな……「マクシミリアン・ジーナス」の記憶にあるドッガーに似ている。二枚目ではないが、好感がモテる顔だ。ちなみに、私の顔つきは「マクシミリアン・ジーナス」そのものだ。

「ふむ。ＩＳの武装面の世界シェアの三割を誇る『オルコット・インダストリー』の若き社長にして、圧倒的カリスマや会社内のみとは言え一般階級への堅実な施しなどから『騎士王の再来』とまで言われる男がどう云う者か、と思っていたが……噂に相違無し、か」

「買いかぶってくれるな。君こそ、スタント無しで様々なアクションをこなせる世界的に有名なスターじゃないか。それに、君が軍人１０００人抜きとしたのは噂で聞いているよ」

この男の動きはそれこそ軍人のようなもの。中国に兵役はあったはず。だが、それだけで身につくとは思えない。となると、それ以前から何かしらの武術を学んでいた？　だが、この男の纏う空気は……それこそ「リンクス」たちのような……。

「王虎。無理強いはしないが……我社のイメージキャラクターになってくれないか？」

確か、この男はプロダクションなどには所属していない。たった一人の個人事務所を経営していたはず。ならば契約も容易い。はっきりいおう。私はこいつが欲しいのだ。

「ふ～ん。確かに魅力的だし…お前さんは面白いしな。ＯＫ。その代わり…お前さんが俺を欲しがる理由を話せ」

「気づいていたか。いいだろう。私は宇宙へと向かう。少なくとも二十年以内に宇宙進出をしてみせる。もし、実現したときに一般人への宣伝が必要だ」

私の記憶の中にある「マクロス」。私はあれを創り上げる。そして、私自身が参加できなくとも「人類の宇宙進出」の礎を築く。王虎にはそのための広告塔になってもらう。芸能人の一般人への影響力は無視できないからな。

「着いてこい。私の描く計画を見せてやる」

「……面白い。マクシミリアン……お前のその計画乗った。俺のことは自由に使え。俺は学はあまりない。だが、アクションスターとしてではない。『戦うための』強さは持っていると自負している。だから俺という駒を使え」

王虎はそう言って私の前に跪いた。普通ならば「ありえない」と一蹴されてもおかしくない内容。だというのに、こいつはそれに乗ると。

「マックスと呼んでくれ。王虎」

「ならばこれから宜しく頼むぞ。親友」

「いきなり親友か？」

「知らんのか？　大事なのは長さではなくどれだけ心を許せるかだぞ？」

なるほど。そう考えるとそうかもな。

「ならば頼むぞ。親友」

「ああ」

そう言って私たちは握手をした。多分、こいつとならどこまでも行けるはずだ。

「だから、ウチの鈴の方が可愛い！」

「馬鹿を言え！　セシリアのほうが可愛いに決まっている！」

ちなみに、その後は夜通しどちらの妹が可愛いかという喧嘩になった。さりげなく、お茶や軽食を用意していたレイスが不気味だった。

第5話　兄、決意する（後書き）

ということで、セシリアのＩＳの名前は「ノブレス・オブリージュ」になりました。まあ、予想がついた方もいらっしゃることと思います。

そして、マクシミリアンが宇宙開発計画を始動しました。とりあえず、マクロスやバルキリーなどを製作します。アーマードコアも勿論作ることでしょう。

第6話　妹、織斑一夏と出会う。

やぁ、私だ。ん？　なん…だと？　私の出番はここで終わりだと？　この前口上は私のものではなかったのか？　なに？　セシリアが主役？　ふむ……仕方ないな。

ＳＩＤＥ　セシリア

どうもセシリアです。私は現在ＩＳ学園の教室にいます。ちなみに、私は1組でした。同じクラスに織斑一夏がいるのですが……。

「……織斑。入学前に配布された参考書は読まなかったのか？」

「古い電話帳と間違えてしまって読んでいません」

授業を行なっている山田真耶先生に「分からないところはないです

か？」と聞かれ全部分からないといった織斑一夏に向かい織斑千冬先生がそう質問した時の流れです。古い電話帳と間違えた、ですか。

はっきり言いましょう。私は織斑一夏に失望しました。いえ、一方的に期待しておいて失望するのは失礼なのでしょう。捨ててしまった事。これはまあ、色々と管理の面から言わせていただくなら許せませんが、たまに私もやってしまうので強くは言いません。しかしその後、織斑先生に再発行を頼むなりしなかったということは、彼にとってＩＳ学園に入るというのはそれくらいの価値しかなかったのでしょう。

「……軟弱者、ですか」

「何か言ったか、オルコット？」

「申し訳ありません。独り言です」

織斑先生から出席簿で叩かれましたが、ついそう呟いてしまうのも許していただきたいです。織斑一夏は努力をしたのでしょうか？ＩＳとは関係ない生活をしていたのかも知れません。だから、私たちより知識面で大きく遅れをとっているのは仕方ありませんし、それについて貶すつもりもありません。ですが、あの言動には努力を感じ取れません。世界中の男性が命を代償にしても立ちたかった場所にいるだけではありません。古い電話帳と間違えて捨てた。つまりは、それを必死に覚えてきた私たちの努力を無下にするようなも

のではありませんか？　私たちがこの学園に入るためにしてきた努力は古い電話帳と同意ということですか？

「……ちょっとよろしいですか？」

「なんだよ。今忙しいから後にしてくれ」

ですから、こうやって噛み付いてしまうのも容認していただきたいのです。勿論、八つ当たりや見当違いの可能性も否定できません。その際は非を認めます。でも、織斑一夏に聞きたいのです。

「私はセシリア・オルコットと申します。イギリスの代表候補生を努めさせていただいております。ご存知でしょうか？」

この方は努力をしているのか、と。もし、参考書を無くしても、織斑先生に申し訳ないから再発行を頼めなかったとしてもＩＳについて調べることはできます。

「……なぁ」

「はい」

私が望む答えは「セシリア・オルコットという人は知らないが、代表候補生の事は分かる」という感じの答え。これだけで判断するのはいけないのかも知れませんが、ＩＳについて調べれば必ずこの項目を見ます。さぁ、どう答えますか？

「代表候補生ってなんだ？」

「……」

私が彼に話しかけたことで聞き耳を立てていたクラスメイトたちも、ずっこけたりしていますが……そうですか。それが貴方の答えですか。

「貴方はＩＳに関わるものとして常識とも言える用語を知らない、と？」

「ああ。さっぱり分からない」

下手に嘘を吐くよりはいい、と考えているのでしょうか？　ですが、それでは世の中を渡っていくことはできませんよ？　特に、貴方のような特殊な立場の方は何かあればすぐに足元を掬われます。

「そうですか。分かりました。貴方はそこいらの軟弱者と同じとい

うことですね」

「む。おい、どういう事だ？」

怒りました、か。ですが、なぜそう言われるのかを理解していただきたいものです。

「先ほど、貴方は参考書を古い電話帳と間違えて捨てたとおっしゃりました。しかし、仮に捨てたとしても再発行を頼むことはできたはず。申し訳ないからできなかったなら、自分で調べるなりできるはずです。しかし、そのような事はしなかった。ただ『世界で唯一ＩＳを扱える男』という称号を享受していただけ。その称号に見合う努力をしなかったということですね？」

「……は？」

「考えつかなかったのですか？　私は男だからといって貴方を貶すつもりはありません。私の兄は貴方と同じ男性ですが、すでにイギリスにその名を轟かせています。そのために努力してきたことも私が見ています」

お兄様より劣るからという理由でも貶すつもりはありませんでした。でも、織斑一夏という男は、努力をしていない。それは私が一番嫌うこと。

「貴方はこのＩＳ学園に入るために努力をしましたか？　貴方も教官と戦ったかも知れません。結果はここにいるから勝ったのか、若しくは負けたにしろ監督の先生の合格ラインに届いていたのでしょう。それは賞賛されるべきです。おめでとうございます。ですが、貴方がいるこの学園に入りたくても入れなかった方々がいます。その方々に対して何も思うことはありませんの？　貴方が古い電話帳と間違えて捨てた参考書。貴方にとってこの学園に入ることはたったそれだけの価値しかなかったのでしょう？　自分は望んで入ったわけではないのだから、そう思っているのでしょう？」

「ち、違う！」

「ええ。違うかも知れません。もしかしたら、ご友人に読めないようにされたのをかばってそんな嘘をついたかもしれません。ですが、周りはそうは見ません。よくお考えになってください」

本当はもっと言いたかったのですが、運悪くといいますかチャイムが鳴ってしまいました。クラスは静まり返っていますが、気にしません。ですが、私たちは数多の人の夢を踏みにじってここにいます。ですから、その方々の為にも努力を忘れては駄目だ。私はそう思います。勿論、私の考えが絶対正しいとは思っていません。

「さて、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めたいのだが……自薦他薦は問わない」

クラス代表。これは、対抗戦だけではなく生徒会の会議に出席したりといわゆる「クラス委員」のようなものですね。その出場者を決めるための話し合いを授業の前にすることになったようです。

「はい！　織斑君がいいと思います！」

そして、クラスの方が織斑一夏を推薦しました。確か、クラス代表はそのクラスの成長率などの指標になると聞いたことがあります。そう考えれば織斑一夏が適任なのでしょう。ですが――。

「織斑先生。私は納得できません」

「ほう？　オルコット。理由は？」

「はい。ただ、先に知っておいていただきたいのは私は別に織斑さんが男性だからという理由で納得できないわけではありません」

「……続けろ」

「はい。彼は先程の授業で参考書を電話帳と間違えて捨てたと言いました。つまり、彼にとってＩＳとはその程度の物。そのような考えの方にクラス代表は相応しくないと思われます」

織斑一夏は苦い顔をしているようですが、もしそんな事が知られればどうなるか。私の考えすぎなのかも知れません。ですが、どうしても言っておきたいのです。

「ふむ。そうか。なら、織斑とオルコット。お前らは模擬戦を行え。勝ったほうがクラス代表だ」

いきなりそれですか。まあ、弟さんがそう思われるのは面白くはないでしょうね。つまりは、織斑一夏という人間がどれだけできるのかを見せたいのですね？

「え！？」

「分かりました。織斑さん……今までの私の言葉に反論したいなら全力で掛かってきてください。戦う時までに努力の跡が見られないのならば……私は貴方を認めません」

周りの方々は「無理じゃない？」とか「さすがにそれは可哀想だよ」などと騒いでいますか。下らない。実に下らない。

「黙りなさい！　男だから弱い、などという先入観は必要ありません！　織斑さん！　貴方もこんな風に言われて悔しくはないのですか！　貴方にもプライドがあるなら、全力できなさい！」

「……ああ。分かったよ。全力でやってやる！　セシリア・オルコット！　お前に俺を認めさせてやるよ！」

結構いい顔するじゃないですか。もしかしたら、失望するのは早かったかも知れませんね。お兄様、意外と苦戦するかも知れません。

そのころ、兄は――。

「……セシリア。一人で大丈夫なのか？」

「……気持ちはよくわかる。俺も鈴が日本にいる頃からずっとそんな感じだった」

シスコン仲間が増えたため駄目兄にランクアップしようとしていた。

Bボタン押しますか？

第6話　妹、繊斑一夏と出会う。（後書き）

電話帳云々はちょっと原作を読んだ時にすこし思ったことです。まあ、個人的異見なので実際は違うと思いますけど、重要なのは周りからどう思われるかと言うことだと思うのです。

しばらくはセシリアのターン。

第7話　妹、特訓する

やあ、私だ。マクシミリアンだ。残念だが、今回私の出番は少ないらしい。セシリアが活躍するのは嬉しいのだが、出番がないのはそれはそれで寂しいのだよ。まぁ、ゆっくりしていってくれ。ちなみに、もしネクストを作るなら「ステイシス」と「アンサング」のどちらがいい？　是非、聞かせて欲しい。むしろ、バルキリーでもいいと思うのだが。ちなみに、王虎は作るならば「黒くて一対多仕様で体当たりもできる高機動機体」とリクエストしてきた。お前、ナデ○コの劇場版見たな？　ちなみに、私はブラックサレナより夜天光が好きだ。

ＳＩＤＥ　セシリア

「行きますよ『ティア』」

『ウン。任セテヨ！』

織斑先生に放課後のアリーナ使用許可をもらい私はブルー・ティアーズの操作訓練を行っています。お兄様が組み上げた『ブルー・ティアーズ制御用ＡＩ』。名前は「ティア」です。何故でしょうか…この名前に親近感が……お兄様も私の『ノブレス・オブリージュ』という名前に色々思うところがあったらしいですし。やめましょう。これ以上考えるのはいけない気がします。

「ティア……合わせますよ？」

『オッケーダヨ。ママ！』

ブルー・ティアーズは全部で１２基。元々装備されていた数は６基だったのですが、お兄様が改造した結果、４基がレーザー、２基がミサイル、４基がリフレクター、２基がダガーという形になりました。基本的に、制御は私が行いティアは私のサポートという形をとっています。

『ママ…大丈夫？』

「大丈夫ですわ。自分も攻撃をしながら制御というのは辛いですが…貴方がいます。貴方がサポートしてくれるおかげで楽ができます」

『ウン！　ボク、ママノ為ニ頑張ルヨ！』

なんというか……妹ができた気分です。いえ、「ママ」呼ばわりされるのは早い気もしますが。ちなみに、お兄様は「パパ」です。ということは、私がお兄様の妻……いいですわね。まあ、現実には不可能ですけどね。

「というより、私にとってお兄様が男性の基準なんですよね」

こう言うのは失礼なのかも知れないのですが、恋人にするならお兄様のような方がいいです。っといけません。余計なことを考えていたせいでブルー・ティアーズの制御が甘くなっています。集中しなければ。

「あれ？　えっと……オルコット？」

「はい？」

声を掛けられたため、ブルー・ティアーズを収納し振り向くとそこには少し息の上がった織斑一夏がいました。走ってきたのでしょうか、息が荒いです。

「……えっと、私は襲われるのでしょうか？」

「ち、違う！　ちょっと……その…ルームメイトともめて逃げてきたところだ」

ルームメイトともめた、ですか。まぁ、不埒な真似をするような方ではなさそうですし。おおかた、シャワーを浴びようと浴室の扉を開けたら中にいた女子とご対面といったところですか？

「そんな感じです」

「……今までの場所とは違うのでいろいろ注意したほうがいいと思いますわよ？」

ただ、そこは織斑先生も考慮してあげればいいのに、と思う私はどうなのでしょう。

「まあ、ほとぼりが冷めるまでここにいますか？　私ももう少しここにいますので」

「あ、ああ。ところでなにしていたんだ？」

「特訓ですわ。私のＩＳの武装であるブルー・ティアーズを完璧に操作できるように」

ブルー・ティアーズを操作すると織斑一夏が話しかけてきました。これは良い訓練になるかも知れません。このまま続けさせてもらいましょう。

「でも、代表候補生なんだろ？　今のままでも十分強いじゃないか。それ以上強くなられると模擬戦を行う俺の勝てる確率が少なくなるんだけど……」

「ですが、私はオルコット家の者として現状に満足することは許されないのです。常に成長し続けなければ貴族として示しがつかないのです」

「え？　オルコッ「セシリア、で構いません」あ～セシリアの家って貴族なのか？」

まあ、知らないのも仕方ないかも知れませんね。私だって日本の名家は知りませんし。

「ええ。これでも結構由緒ある家系なのです。まあ、今となっては私と兄しかいませんが」

「え？　両親とかは？」

「詳しいことは言えませんが、すでにこの世にいないということだけ」

「あ…えっと、悪い」

意外とそういう事には気づくんですね。ちょっと見直しました。まあ、さすがに誰かに殺された可能性があるとは言えませんね。お兄様が調べているようですけど、多分私には知らさないんでしょうね。私が聞かされたのは殺した犯人はすでにどこかの組織に匿ってもらっているだろうということ。

「気になさらないでください。兄がいたおかげで寂しくはなかったので」

「ええと、お兄さんがいるのか？」

「自慢の兄です。突然、家や会社を継ぐことになったのですが、圧倒的能力で敵対する者たちを退けた方。私にとって、目標となる自慢の兄です」

そう。だから、つい織斑一夏という男性と比べてしまった。

「申し訳ありません」

「え!?　なんで謝るんだ?」

「私は貴方と兄を比べていたのです。突然、ＩＳを扱うことができた貴方。突然、家や会社を継ぐことになった兄。似ていたのです。だから、兄と重ねていました。勝手に期待して勝手に失望する。私はオルコット家の者としてはあるまじき行為をしていました」

「いや、そんな事はないぜ?　セシリアのおかげでその……俺に足りないものがあるって気づいたし。むしろ、そんな風に言ってくれたのはお前が初めてだし」

多分、今まで腫れ物に触るような扱いだったのでしょうか?　ですが、それでもここにいるというのはそれなりに思うことがあったのでしょうね。若しくは、織斑先生が手を回したのでしょうか。

「そうですか。でも、こうやって話せば印象も変わるものですね。最初は、挙動不審だったからこの人大丈夫かな?って思いましたよ?」

「ひ、ひどくないか？　俺だって、突然周りが女子に囲まれるのは」

「分かっていますわ。だから、こうやって話すとそうでもないことが分かりましたし」

とりあえず、ここまでにして休憩しますか。さすがにちょっとフラフラしますね。

「お、おい！」

「大丈夫ですわ。あ、すみませんけどそこのカバンにペットボトルがあるのでとっていただけます？」

「えっと…これか？」

さすがにカバンの中を漁るようなマネはしませんか。別にドリンクくらいしか入っていないので構わないんですけどね。ちなみに、運動後の水分補給は心持ち塩辛くて、少しぬるい温度が適しているようです。

「すみません。まぁ、お座りください。立ちっ放しというのも疲れますし」

そう言ってベンチに座りましたが、織斑一夏はひとり分の隙間を空けて同じベンチに座りました。正直言うと恥ずかしいです。その…先程まで動いていたので汗が……。

「ど、どうした？」

「いえ……その……汗臭くないでしょうか？」

「え……あ！　い、いや別にそんな事はないぞ？」

それならいいんですけど…。

ＳＩＤＥ　一夏

俺の目の前には金髪の女の子がいる。イギリスのＩＳ代表候補生のセシリア・オルコット。顔立ちは俺から見ても美人だと思う。ただ、纏う雰囲気っていうのか？　それが、その美貌を余計に際立たせているように感じる。例えるなら、王女様ってかんじ？

「織斑さん。一つ、聞いてもいいですか？」

「え？　あ、ああ。何だ？」

「もし…もし、です。男と女という二つの陣営で戦争が起これば貴方はどちらにつきますか？　同性である男側？　それとも、姉のいる女側？」

どういう事だ？　なんで、そんな事を聞く？　そんなあり得ないこと…。

「あり得ないこと、ですか。でも、ＩＳがこの世界に現れた当初も同じです。決してあり得ないとは言えません」

そして、セシリアは少しずつ話し始めた。先日、お兄さんから連絡が入ったこと。ＩＳの技術を使って人類の宇宙進出を計画していること。今でこそ軍事転用されているけど、元々ＩＳは宇宙空間で運用されることを目的に作られたという。じゃあ…。

「兄は宇宙進出を成し遂げます。ですが、妨害がないとは限らない。もし、兄がＩＳを使わずにそれを成し遂げれば今の女尊男卑の風潮は逆転する。それをよしとしない者、兄がそれを成し遂げるのが気に入らない者などにより戦争が仕組まれる可能性が高い。でも、そうなると確実に男女間の戦争になります」

「なんでだ？」

「もし、宇宙進出になるならＩＳを扱える女が優位に立てるかもしれません。でも、現時点でたかだか４００強の数しか無く、製造方法もたった一人しか知らないＩＳ。しかも、篠ノ之博士は一部の人を除いて排他的な方と聞き及んでいます。そのような方が製造方法を教えますか？」

答えはＮＯだな。あのひとは、俺や千冬姉、箒、両親以外には排他的。勿論、アノ人に気に入られれば話は別。それでも、精精が一人か二人。どう頑張っても一桁だ。それに、俺達にすら製造方法を教えるかどうか…。

「兄は、宇宙空間で運用できる兵器も考えているようです。そもそもすでにスペースシャトルが完成しているのだからそこにＩＳの技術を転用すれば問題はない、と」

セシリアは何がいいたいんだ？　でも、セシリアの顔は自信に満ち溢れている。まるで千冬姉みたいに。

「そのような事になれば男女間のパワーバランスは元に戻るか、数に勝る男性側が優位になるかも知れない。そうなれば、今まで見下していた陣営に肩を並べられるのは気に入らない女性が出てくるのは当然、でしょう？」

彼女は綺麗な笑顔を浮かべて宣言した。一瞬、俺はその表情に見とれていた。

「なら、私は女性陣営を裏切って兄の下に行きます」

多分、世界中の女性から「裏切り者」と蔑まれてもお兄さんと一緒にいるんだろう。だってセシリアの顔はとても綺麗で自信に満ち溢れていたから。

「そもそも、今の女尊男卑の風潮は気に入らないのです。能力ではなく性別で差別される社会が。確かに、女性の地位が向上したのは嬉しいのです。昔は女性だからと就職などで不利でしたが、今はそんな事はありません」

「そう、だな」

「ええ。ですが、地位が向上したからと言って、男性より強くなったからと言って男性を不当に貶めていいわけがありません。確かに、今まで女性を下にみていたのでそれを反省するのは当然でしょう。ですが、だからと言って今まで私たちが下に見られていたから次は…というのは許されるものではありません」

セシリアの目は同年代と思えないほどに確かな意思を持っていた。多分、俺はそれに見とれている。

「イギリスなどには『ノブレス・オブリージュ』という言葉があります。平たくいえば、高い地位にいるものにはそれ相応の義務があり、それを遂行することこそ美徳といった感じでしょうか？　とにかく、女性は高い地位にいます。ならばそれ相応の義務を遂行しなければなりません。男性だからと不当に見下すのはしてはならないことなのです」

高潔な女王。俺の少ない語彙力ではセシリアをこう表すしかなかった。漫画に出てくる理想を語るだけのお姫様じゃない。その理想を現実にするだけの力も持っている。

「オルコット家の女として、なにより『騎士王の再来』と呼ばれるマクシミリアン・オルコットの妹として私は示さなければなりません。上に立つ者がどうあるべきかを」

そう言って笑うセシリアの顔に俺は見とれていた。多分、惚れたかも知れない。

ＳＩＤＥ　某シスコン兄貴たち

「ん？」

「どうしたマックス」

「いや……妹に目をつけた虫が出てきたような気が……」

「へ～……そういえば、鈴も好きな男がいるとかいっていたような……確か、織斑一夏」

「……状況的に考えると虫はそいつだな」

セシリアがいるのはＩＳ学園。もし、マクシミリアンの勘が正しいなら十中八九織斑一夏がセシリアに惚れたのだろう。そして、鈴が惚れたのも織斑一夏。

「なぁ……王虎」

「なぁ……マックス」

「「近いうちにＩＳ学園に行くか」」

こうしてある意味束以上の天災がＩＳ学園に向かうことが決定した。

一夏の明日はどっちだ？

第7話　妹、特訓する（後書き）

ということで、若干むりやりでしたが一夏がセシリアに惚れました。
ただ、それが実るかは分からない（おい

せっかく、ブルー・ティアーズをノブレス・オブリージュに名前を変えたので、改造しました。とりあえず、リフレクター型はサイコガンダムＭｋ２のように運用。ダガー型はスローネツヴァイとかのようにファングとして運用。

そして、段々とマクシミリアンも動き始めます。とりあえず、動力とか関係なしにマクシミリアンが機動兵器に乗るとすれば、どれがいいですか？　アンサングかステイシスか、はてまたバルキリーか。

第8話　妹、戦う―前編

業務連絡――本日のマクシミリアンの挨拶はございません。理由は以下の音声を聞いて納得してください。

「何！？　セシリアがＩＳ学園で模擬戦を行うだと！　すぐに日本に向かうぞ！」

「待ってください社長！　仕事は「すでに全て終わらしてある！」マジだ！　有能なシスコンは性質が悪い！」

「待て！　マックス、俺も連れていけ「テメェはさっさとハリウッドの撮影に行け！」」

「いやぁ、マクシミリアン様たち生き生きしていますね～「レイスさん！　お二人を止めてください！」嫌です」

以上の事情からマクシミリアンの挨拶はありません。よって本編をお楽しみください。

ＳＩＤＥ　セシリア

なんでしょうか……とてつもなくお兄様が会社に迷惑をかけているような気が。いえ、迷惑と言ってもどことなくコメディ臭がしますけど。

「お待ちしていました……織斑さん」

「それがお前のＩＳかよ」

私の眼下にはＩＳを纏った織斑さんがいます。今日は、私と織斑さんの模擬戦。あの日以来、織斑さんは私に話しかけてくるようになりました。まあ、分からないことを聞いてきたりしているので、私も素直に教えています。ただ、私の場合は理論でＩＳを動かしているので織斑さんに理解できるか不安だったのですが、問題なかったようです。ただ、ポニーテールの女子篠ノ之箒さんがすごくこちらを睨んでいたのが気になりますね。織斑さんが好きなのでしょうか？

「ええ。これが私のＩＳ『ノブレス・オブリージュ』と言います。このＩＳは私の信念を形にしたものと言ってもいいでしょう」

この子はティアとは違って話すことはできない。でも、この子が私のことを思ってくれているのは分かります。だって――。

「行きますよ。ノブレス・オブリージュ」

こうして声をかけると呼びかけに応えるように淡く発光するんですもの。

ＳＩＤＥ　千冬

私が見ているモニターにはオルコットの射撃をひたすらに避けている一夏の姿が映っている。

「うわ～織斑君凄いですね」

山田君はそういうが…実際はオルコットが避けやすいようにしているだけだ。恐らく、初期設定のままで戦っているのに気づいている。

「……セシリア・オルコット。想像以上の実力者か」

この事にどれだけの人間が気づいている？　気づいているのは、更識楯無やその直下の部下である布仏姉妹と二匹狼くらいだろう。二匹狼が分からん？　あの素手で水族館のガラスを破壊できる高原と有効射程１０キロの斑目だ。まあ、今は関係ないか。

「一夏…勝て」

篠ノ之はそう祈っているが、無理だな。実力も、覚悟も違いすぎる。オルコットが一夏を男だからと見下していれば勝機はあった。だが、そんな事はなかった。

「（一夏、お前がどれだけオルコットに近づけるか。それでお前の今後が分かると言ってもいい）」

ＳＩＤＥ　一夏

「クソ……強い」

俺は代表候補生の実力を過小評価していた。俺は必死に動きまわっているのに、まるで予測するようにレーザーライフルを撃っているのがその証拠。

「代表候補生の名は伊達ではありません。それと、予測射撃をしているのではありません。『そこに来るように誘導している』のです」

「誘導ってそんな事出来るのかよ！？」

「ええ。だって、砲撃などで一箇所が空いていたら無意識にそこを選ぶでしょう？」

「な！」

あれか？　つまり、川とかでやる追い込み漁とか、物陰の入り口に仕掛けるゴキブリ捕獲器とかそんな感じかよ！　でも、確かに効果的なんだろうな。

――――敵レーザー、飛来――――

「な！？」

ヤバい。ボケッとしていたらレーザーが……避けられ――。

ＳＩＤＥ　セシリア

さすがに直撃コースのレーザーを避けきることはできませんでしたか。まあ、普通は今までＩＳに乗ったことがないのにあそこまで避ける自体おかしいんですけどね。

「やはり、織斑先生の弟ということなんでしょうか？　血筋と言うかなんというか」

もしそうなら…ある意味羨ましいですね。ですが、それも使わなければ意味が無い。

「そろそろ出てこられたらどうですか？　私のセンサーには貴方がまだ戦える状態だというのが出ているんですよ？」

「へっ。ワリィな。今やっとフィッティングとかその他もろもろが終わったところだ」

「そうですか。ならば……こちらも本気で行かせていただきます。ティア！」

『オッケーダヨ。ママ！』

ファーストシフトが終了したなら、もう出し惜しみはしません。

「この前、アリーナでやっていたあれか」

「ええ。遠隔操作型移動兵器…貴方には『ビット』と言ったほうがいいでしょうか？　これが『ノブレス・オブリージュ』の最大の武器である『ブルー・ティアーズ』です」

マウントされていた１６基の内、レーザー型の６基を自分の周りで周回させながら私は刀を構えながら不敵な笑みを浮かべている織斑さんを見下ろしていた。

「へっ。そう来なくちゃな……行くぜ？　俺にも負けられない理由

ができた。とりあえずは、千冬姉の名誉を守るさ！」

「そうですか。分かりました。さあ、行きましょう！」

私自身、どこまでブルー・ティアーズを操れるかは分からない。実戦で使うのは初めてだから。でも、だからと言って弱気になることは私のプライドが許さない。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「社長！　ブルー・ティアーズの起動を確認しました！」

「データを取り続けろ。勿論、相手のＩＳのデータもだ」

「了解！」

イギリスにあるオルコット・インダストリーの本社地下にある『アヴァロン』と呼ばれる巨大研究施設。ここはマクシミリアンの持つ様々な記憶を下に現時点の世界の技術よりもはるか先をゆく技術が作られている場所。そこで、マクシミリアンはＩＳ学園に秘密裏に潜入させているＯＲＣＡの人間から送られてくる戦闘映像やデータを解析させていた。

「社長。熱核反応タービンエンジンの試作型が完成したようです」

「なら、すぐに実験を行え」

「はい」

そして、現在主体で行われているのは宇宙進出用のマクロス級戦艦の開発。しかし、様々な制約からまずはバルキリーなどの人型兵器を製造することに決定した。

「マクロスを作るまでにはまだ時間がかかる、か」

できることならそれに至る道がみえればよかったが、それもまだ見えない。

第8話　妹、戦う―前編（後書き）

マクシミリアンは、抜け出す場合は仕事を終わらせてから逃げる。しかも、二日くらい居なくなってもいいように予定以上の仕事を終わらせる。だから、始末に終えない。

研究施設の名前はまあ、あれ。イギリスだし…ね？

ＡＣＦＡを久しぶりに再プレイ。とりあえず、アームズフォートに特攻仕掛けたのはいい思い出。虐殺ルートで、水没王子とタイマン張っていたら、いつの間にか1対5になってフルもっこにされたのもいい思い出……か？

第9話　妹、戦う―後編

やあ、私だ。マクシミリアンだ。本格的にマクロスなどを作り始めたが、やはり難しいね。今は。バルキリーや「ノーマル」を作っているところだが、動力機関の問題でやはり難航している。ＩＳのコアからエネルギーを持ってくるわけにはいかない。複製できない機関は、な。今やっとバルキリー用のエンジンの試作型ができたところだ。これを「ノーマル」に転用出来ればいいんだがね。まあ、やるだけはやるさ。

では、またいずれ会おうか。ちなみに、王虎はアメリカで撮影中だ。何でも、ＩＳ操縦者とのラブロマンス物だという話だ。米軍の全面協力らしいぞ？　今日もまたスタント無しなんだろうね。ただ、そのプロットを見せてもらったのだが……何故に学園モノ？　軍人と学生の二足のわらじをはくヒロインと、それを鍛える教官らしいのだが……うぅむ。

ＳＩＤＥ　箒

モニターの向こうにはビット型の武装『ブルー・ティアーズ』を操りながらレーザーを撃っているセシリアと、それをギリギリのところで避けている一夏がいる。

「織斑君……なんとか食い下がっていますね。やっぱり、先輩の弟さんですね！」

山田先生の声がひどく不快だ。私には分かる。一夏のあの嬉しそうな顔が。

一夏がセシリアと話すようになったのは入学二日目から。一日目の夜、アイツが私の部屋にやってきて、ちょっとしたトラブルで一夏が夜遅くまで帰って来なかった。多分、その時に何かあったんだろう。一夏の関心は今セシリアに向いている。今までのように病的なまでに鈍感な一夏だったらよかった。でも、アイツの顔は……私が一夏に向ける感情を持っている。

「……奪われた」

まただ。また私はＩＳという忌まわしい兵器で大事な存在を奪われた。

胸の中にどんどん黒い物が沈殿していく。きっとそれはもうヘドロのように醜悪なものになっているんだろうな。

ＳＩＤＥ　セシリア

「『零落白夜』か……これで、有利になったな」

――――零落白夜。主にレーザーやビームのエネルギー兵器を無効化する能力――――

ノブレス・オブリージュから送られてくる白式のデータ。これを聞いたとき正直に言うとちょっと驚きました。エネルギー兵器を無効化する単一仕様能力。これは、ミサイルやダガー型のブルー・ティアーズしか実弾兵装がないノブレス・オブリージュにとっては天敵とも呼べる物。ですが、甘いとしか言いようがありません。

「確かに、その能力は厄介ですね。しかし……私を舐めるのはそこまでにしておいてください。ティア、リフレクター型を展開、その操作を」

『オッケー！』

背部装甲にマウントされているリフレクター型のブルー・ティアーズを展開し、その操作をティアに任せる。本当は、これを使うこともティアを全面に押し出すこともしたくはなかったのです。ですが、負けるわけにはいかない。

「いくら零落白夜がすごかろうとも……所詮は刀で、貴方が反応できるくらいしか無い。教えてあげます。貴方が今までやっていたのは地面に脚をつけるのと同様の戦い方。ＩＳを使った戦い方というのがどういうものかを！」

未だ私はレーザーを曲げることすらできない未熟者。しかし、リフレクターを使うことでそれを可能にした。直線的とはいえ、前後左右上下の３６０度からやってくるレーザーに反応できるのは難しい。

「うわ！？」

「零落白夜の範囲はその刀の届く範囲でしょう？　ならば、その刀を振るのが難しい角度や速さなどで攻撃すればいいだけの話」

盾を全面に構えていれば、それ以外からの攻撃は防げない。そういう事です。

ＳＩＤＥ　一夏

「零落白夜の範囲はその刀の届く範囲でしょう？　ならば、その刀を振るのが難しい角度や速度で攻撃すればいいだけの話」

セシリアはそれだけ告げると、飛んでいたビットの速度を上げた。ただ、それだけで俺は反応しきれなくなった。例えるなら、いくつもの方向からボールを投げられるような感じ。それに、俺自身ＩＳを扱うのはこれが二回目。しかも、時間で考えれば初めてにも等しい。

「くそ……負けられるか！　俺にだって意地があるんだ！」

「……私はそれを踏みにじります。私はもっと上へ行きます。兄の為に、そして私自身の「ノブレス・オブリージュ」のために」

「――――あ」

セシリアは一瞬だけ唇を噛み締めるような顔をすると、反射させていたレーザーを囮に、俺の背後に集めていたブルー・ティアーズから収束させたレーザーを放った。俺はそれに振り返るだけしかできなかった。そして、俺は光に飲み込まれた。

「……織斑さん」

地面の落ちていく中、見上げた空にはセシリアが悠然と立っていた。それは、誘拐された時に見た千冬姉のように綺麗だった。

「次は……負けねぇ」

ここまで圧倒的に負けると悔しさよりも先に出てくる感情がある。絶対に、セシリアを超えてやる。それが俺の中に確かに根付いた。あの夜に惚れたかも知れないって思ったけど、あれだ。アニメであったあの状況だ。

『圧倒的な性能に心を奪われた』

俺は、セシリアっていう圧倒的な存在に心を奪われたんだ。そう思いながら俺は地面に落ちた。

ＳＩＤＥ　セシリア

結果から言えば彼は負けた。でも、彼は確かに見せてくれた。負けられないという意思を。

「貴方はこれから色々なことに巻き込まれるでしょう。でも、今の貴方なら跳ね除けることができるかも知れないですね」

ＳＩＤＥ　箒

ああ。妬ましい。セシリアのあの慈しむような顔が妬ましい。分かっている。セシリアが一夏に対して恋愛感情を持っていないことな

んて。でも、だからこそ憎い。だからこそ、妬ましい。だからこそ恨みたい。一夏に関心を寄せられている彼女が。

なんて醜い。片思いのくせに、自分から積極的にアプローチした事もないくせに、嫉妬だけして一夏にこっちに注目させる努力をしていないくせに。自己中心的と恨んでいた姉と何の違いがある？　あぁ、私は…篠ノ之箒は間違いなく篠ノ之束の妹だ。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「ブルー・ティアーズの収容を確認」

「ノブレス・オブリージュ及び、セシリア様には異常は見られませ

ん」

ふむ。初めてブルー・ティアーズを実戦で使ったらしいが……上手くいったか。

「ノブレス・オブリージュ用の追加パックは？」

「ブルー・ティアーズパック以外だと、「ストライク・ガンナー」と「ジェノサイド・ガンナー」が完成しています」

ジェノサイドのほうはセシリアは使わなさそうだな。あれは完全に面制圧用の装備だし。ふむ……。

「社長。それらとは関係ないのですが……フランスの企業から見合いの話が……」

「チッ。擦り寄って甘い汁を吸うしか能のないバカ共が。いつものように取り計らえ」

見合い、ね。別に、誰と結婚しようが構わんが…せめて、それなりの覚悟を持った奴がいいんだが。あぁ、当然のことながらセシリアへのそのような話は全て握りつぶしている。あの娘には自分で見つけてもらいたいからな。それに、あの子がいい加減な男を選ぶはず

はない。

「追加パックはそのうちセシリアに渡す。それよりも、熱核反応タービンエンジンの完成を急がせろ。それと、『アーマードコア』の方はどうなっている？」

「こちらの方は体だけできています。後は、動力機関を取り付ければすぐにでも稼働実験が行えます」

私は、結局『ノーマル』を作ることにした。理由は、『ネクスト』には強化人間が必要であること、コジマ粒子は発見できたが結局あの有毒性を除去することはできなかったからなどがあげられる。強化人間の方は正直に言うとクリアしている。というのも、我が社の私兵集団であるＯＲＣＡの幹部連中は全員が、自分から強化手術を願い出ている。それに思うところもあるが、まあいいとしよう。問題はコジマ粒子の方だ。あれをどうにかしなければネクストのプライマルアーマーやオーバーブーストなどが使用できん。まあ、それ以外なら強化人間さえ居れば大丈夫だろうけどね。

「……人生はうまくいかないものだ」

コジマ粒子を発見できたのはよかった。そして、コジマ粒子の製造方法も独占できたのは良かった。だが、結論から言うと研究用の粒子を残して大半のコジマ粒子は『理想郷』よりもさらに下に封印した。宇宙空間での粒子状態を確認していないためもしかしたら宇宙

空間では有毒性はないかも知れない。

「……少し休む。フランツ、後は任せる」

「はい。了解です」

ＳＩＤＥ　フランツ

王にして世界の覇者たらんとする人間。恐らく、人物批評家が見たらそう思うのが、マクシミリアン・オルコットという存在。

圧倒的能力で、先代夫妻が事故死した後のオルコット家やオルコット・インダストリーを掌握し、次はカリスマと財力を持ってイギリスの軍事面を抑えたまさに怪物。

俺がそんな人の下についたのは最初は務めていた会社の首切りにあ

って、ふらついているのを社長自らスカウトしに来たから。あの時はそりゃ驚いたよ。すでに、「オルコットの怪物」と称されていた社長が会いに来るんだからな。

自慢じゃないが、俺は結構できる技術者だと思っている。でもまあ……社内での評価は低かったよ。理由としては、女遊びがひどかったというか。まあ、そんな感じの理由でこの女尊男卑の世界では不要とされた。んで、酒浸りの日々を送っていたらあの人に拾われたってこと。

「面白いよな～。なんで、こんなモンを考え出すことができる？篠ノ之束もスゲェとは思ったが、ウチの社長も似たようなもんだろ」

俺自身、篠ノ之束は性格ややり方はどうあれ尊敬はしている。だが、他者に対して排他的なのは技術者としては失格だ。技術というのは多面的に見なければならない。あの女は噂や手に入れた情報などから鑑みるに、全て一人で考え、行動していた。

「バカじゃねーの？　コアの製造方法にしろ、何にしろ、一人でやればいずれ袋小路に陥る。だからこそ『競争』は必要だ」

それがわからないなら駄目だな。その点社長はそれを理解している。社内のみではあるが『競争』させている。だからこそ、オルコット・インダストリーはイギリスを掌握できた。だからこそ、このアヴァロン内では現在の技術の数十年先を行くような「熱核反応タービン

エンジン」や「コジマ粒子」などの研究が進んでいる。

「しっかし、本当に過ごしやすい職場だな～」

情報の秘匿さえ気をつければ好きなときに会社に来て、好きなだけ研究ができる。それでいて、給料はいい。まあ、その分結果を出さないといけないけどな。だが、それを差し引いても俺達のような連中にとっては過ごしやすい事この上ない。

「アンタがなんでこんな技術を持っているかは聞かねぇし、調べねぇ。だから、もっと俺らにアンタの力を見せてくれよ」

あぁ、アンタはどれだけ引き出しを持っている？　正しく、ここは俺にとって理想郷だよ。

第9話　妹、戦う―後編（後書き）

ビームを無力化する刀なら、刀に当てなければいいじゃないという話。

それと、箒さんが病んでる気がする。でも、この小説ではこんな感じで。まあ、マクシミリアンなり一夏なりがフォローすると思いますけど。

第１０話　兄、宣言する

やぁ、私だ。今日は久しぶりに私の出番だ。いやいや、しばらくはセシリアの場面ばかりで退屈だったよ。まあ、その分セシリアの活躍をデータに残しまくったがね。ところで、織斑一夏のセシリアを見る目が熱を帯びているように思えるのだが……これはあれか？あれなのか？　つまり、誅殺ＯＫと？　というのは冗談だ。いや、行為に及んでいたら殺していたが。まあ、セシリアもそのようなお年ごろだからな。私としては祝福を……する……ことが……できんなやっぱり。ということで、日本に行く機会があれば見に行こうと思う。その時……もし行為に及んでいたら……。

「社長。もうすぐアメリカです」

「分かった。チェルシー、スマンが紅茶を」

「かしこまりました」

ついつい熱が入ってしまった。まあ、あの娘が決めたなら文句は言わん。やはり一発殴るがな。さて、今私はアメリカに向かっているところだ。一応、自家用機だ。しかも、外には護衛用の戦闘機。ちなみに、バルキリーの試作型だったりする。ただし、バルキリー用の熱核反応タービンエンジンがまだ試作段階なので、従来のジェッ

トエンジンＥＧＦ―１２７をオーバーチューンした物。つまりは、ＶＦ―０『フェニックス』だ。それに、変形機構もファイター形態とガウォーク形態しか無い奴だがね。ちなみに、このアメリカ訪問はこの『フェニックス』の運用実験も兼ねているのだよ。

「しかし…経過は良好ですね」

「ああ。後は、熱核反応タービンエンジンが完成すれば、バルキリーの本格的開発も可能だ」

話しかけているのは、ＯＲＣＡのまとめ役のメルツェル。いや、まさか同名で同じ顔の奴がいるとは思わなかった。性格は違うがな。というか、ＯＲＣＡの幹部全員が「ＯＲＣＡ旅団」や「カラード所属リンクス」なんだよ。いやぁ、頼もしいというか恐ろしいというか。ちなみにオールドキングは変わっていない。そこに少し安心していた私がいる。

「アーマードコアの方は？」

「あっちも同様だ。まあ、あっちのほうが製造は簡単だろう。しかし…最近になって暗殺者が増えるとはな……今は中世ではないのだが」

思わず愚痴ってしまう私を許してくれ。確かに、イギリスを半ば掌

握しているようなものだから恨まれているのは分かっている。だが、それにしても週に１４回はやり過ぎではないか？　１日に２回暗殺未遂が起こっているようなものだぞ。さすがに面倒くさくなってくる。

「ですが、社長にはＯＲＣＡの皆様がいるではないですか」

「――――ん。だからこそ、だ。奴らにはアーマードコアのテストの方に行って欲しいんだよ」

「ご主人様。そちらの方はレイスが主導で行っております」

チェルシーの言うこともっともだがね。ああ、それといい忘れていたがチェルシーはセシリアがいない間は私の秘書をしてもらっている。レイスはどちらかというと私の影武者のような物だしな。

「ふぅむ。メルツェル、ＯＲＣＡのほうはどうだ？」

「何も問題はありません。ネズミ捕りに関しても、細心の注意を払っておりますので」

「そうか。なら、ネズミの方は情報を引き出した後は好きにしろ」

「了解しました」

ＯＲＣＡたちが望む戦場を与えられないのは心苦しいが、そこを考えていては仕方がない。

「メルツェル。今、ＯＲＣＡの中でセシリアの近くにいるのはセレンだな？」

「はい。セレンにはセシリア様の『絶対守護』を命じています。最悪、命を捨てるようにも」

「分かった。ネズミがセシリアに危害を加えんとも限らん。セレンにもそう伝えろ」

本来なら、公私混同も甚だしいのだろう。だが、セシリアはオルコット家を継ぐ者。その血は守らなければならない。言い方は悪いが、出自の知れないセレンの命よりも貴族であるセシリアの命のほうが重い。こう考える自分が嫌ではある。

「ご主人様。空港に降りるのでご準備を」

「ああ」

さて、アメリカに来た目的であるＮＡＳＡへと向かうとするか。ん？　何故かって？　宇宙については専門家の話を聞くのが一番だろう？

ＳＩＤＥ　セレン

私に与えられた命令は、セシリア様の安全の確保。そのために、セシリア様と同じクラスに入れるように工作をした。

「セレンよりメルツェルへ。セシリア様の周囲には今のところ異変は無し」

『了解した。引き続きセシリア様の護衛を続けろ』

「了解」

ＩＳ学園は他者からの干渉を受けないとは言え、危険が無いとは限らない。それに不慮の事故というものは存在するのだ。そのために私はここにいる。変装しているからセシリア様は私がここにいることに気づいていない。

「セシリア様。私がお守りします」

私は強化人間。しかも、マクシミリアン様がメルツェルたちに施した「リンクス」への強化手術ではなく、とある国が計画していた実験の失敗作。それが私。でも、マクシミリアン様はそんな私を拾ってくれた。セシリア様は私を認めてくれた。だから、お二人のために私はここに存在している。

「セシリア様……お慕い申し上げています。だから、せめて私にもう一度微笑んでください」

そうすれば私は戦えるから。

ＳＩＤＥ　セシリア

……何か、私の知らないところで誰かが愛の告白をしたような気がします。さて、私が何をしているかというと――――。

「誰が、地面にクレーターを開けろといった？」

まあ、訓練です。そして、急降下からの急停止の訓練だったのですが……織斑先生。織斑さんは初心者も初心者なのですから、他の人と混ざるのは難しいのでは？

「とりあえず、次は武装展開だ。オルコット、やれ」

「はい」

まあ、逆らっても仕方が無いので何も言いませんけどね。とりあえず、スターライトを展開しておけばいいでしょうか？

「ふむ。展開速度はさすがは代表候補生だ。まあ、コレくらいはできて当然だな」

まあ、そうなんでしょうけど……ここは軍隊ではないのですけど、そこは個々人の教育の仕方の違いなんでしょうね。

「オルコット。次は近接武器だ」

「はい――――こんな感じでよろしいでしょうか？」

近接用のブレードは、ライフルに外付けされているので一々呼び出す事はないのです。ちなみに、コレも「ノブレス・オブリージュ」の運用方法から考えたことです。性能的に遠距離射撃戦に長けているので、いざ懐に入り込まれたらイメージする暇もない。だから、予め外付けをしておけば問題はないだろうと考えた次第です。

「……まあ、いいだろう」

なんというか…織斑先生は人を指導するのに向いていないような気がします。いや、教員免許はあるのでしょうけど。まあ、確かドイツ軍で教導を行っていたようですから軍隊じ込みなんでしょうね。

そして、昼休みが始まり大半の生徒が学食などに集まったときに、学食に設置されていた大型モニターに緊急ニュースが入りました。そこに映っていたのは――――。

「お兄様!?」

「え？　オルコットさんのお兄さん？」

オルコット・インダストリーというか、お兄様の私兵集団とも言えるＯＲＣＡのまとめ役であるメルツェルさん、私がいない間はお兄様の秘書をしているチェルシー。そして、いつものようにただ悠然と立つお兄様が映っていました。

「えっと何々？　『オルコット・インダストリーが正式に宇宙開発事業に参入宣言』だって」

クラスメイトの誰かがニュースの見出しを喋っていますが、私には聞こえない。

「お兄様」

とうとう、動かれるのですね？　私もお手伝いをしたいのですが、今はここで自分を鍛えています。ですから、ここから卒業した際には――――。

「でも…この人格好良くない？　なんかこう……ねぇ？」

「あ～分かる。なんか……『強い男』って感じだよね！」

ん？　なにやら学食の空気がおかしいような……。

「てゆーか、見て！　今、調べたんだけどヨーロッパ…特にイギリスだと織斑先生とかよりも有名らしいよ！」

なんというか……嬉しいのですが、どことなく不安なんですよ。確か、お見合いの話もたくさん来ているという話しですし。

「どうしたんだ？」

「あ、一夏さん」

そうそう。織斑さんは、名前で呼ぶことにしました。それと、箒さんとも仲良くなりました。ただ、どことなく敵意を向けられていますけど。ちょっと、そこら辺のおはなしとかもしたいです。

「あれがセシリアのお兄さん？」

「ええ。そうなんですけど……あら？」

テレビの向こう側で、お兄様が指を鳴らしました。ちなみに、外…多分、イギリス軍の基地を借りていると思うのですが、そうすると二機の戦闘機がカメラに近づいてきました。もしかしてあれは……。

「何だあれ――――って、変形した！？」

一夏さんの驚愕の声は多分、学食にいた全員の代弁だったと思います。だって、戦闘機に手足が生えたんですから。

そう、あれは可変型戦闘機『ＶＦ』シリーズの試作型『ＶＦ－０フェニックス』。確か、エンジン関係の問題でロールアウトはまだ先だったはず。

『ご紹介しよう。ＩＳに変わる…とまではいかんが、新しい概念の戦闘機だ。現在は、まだ試作機だが…いずれは、この映像のように運用することが可能だ』

どこから持ってきたのか巨大なモニターに映っていたのは、『ＶＦ－１バルキリー』のＣＧ映像。戦闘機と変わらない『ファイター形態』、そこから手足が生えた形の『ガウォーク形態』、そして人型の『バトロイド形態』。それは、普通なら一笑に付されるもの。で

も、すでにガウォーク形態が現実としてそこに存在する。ならば、バトロイド形態も可能と思ってしまう。それが人。

『次は、こちらだな。宇宙作業用のユニットとして開発した「アーマードコア」だ』

そして、今度は格納庫から地面を滑るように現れたアーマードコア。確か、これも試作型の機体。

『とりあえず、ＶＦシリーズ及びアーマードコアは戦闘能力もある。なんせ、無限に広がる宇宙。エイリアンがいないとも限らないからな』

普通なら笑われる発言。でも、会場にいる人達もそしてここにいる人たちも笑えない。あそこに立つお兄様から放たれるオーラがそうさせている。だって――。

『とりあえずはこのような感じかね？　あぁ、まだ全体的に試作型だが……いずれは製品化する。それと……恐らく、世界中の人間が見ているだろう。なんせ、すでに会見が始まってから三十分以上経っているからな。ならば、ここで宣言しておこう』

だって、お兄様は――。

『私は、性別で優劣はつけん。女であろうが弱ければ弱い。男であろうとも同様だ。私は能力により人をわけよう。無論、努力するものは評価されるべきだ。現に、我が社はそのようにしている』

そう。オルコット・インダストリーが、人種・性別・出自などにこだわらない事はすでにヨーロッパでは有名。世界中から「やる気がある」なら雇用希望者を募っているのもまた有名な話。

『だから言おう。先程も言ったとおり、バルキリーやアーマードコアのパイロットは多ければ多いほどデータが取りやすい。空を奪われた者よ、ＩＳの適性が低くＩＳに乗れなかった者よ。私は性別による差別はしない。もし、もう一度空を飛びたい者がいれば、ＩＳとは違うが空を飛んでみたい者がいれば…私のところに来い。私は、それ専門の研究機関及びテスト部隊『ＯＲＣＡ旅団』を作り上げた。能力でのし上がるのを許容できるものは来ればいい。私は、覚悟があるなら誰であろうと受け入れよう』

『そして、能力ではなく性別という下らない物で優劣を付けている者たち。まあ、それも時代の流れならば仕方がないな』

お兄様の言葉に恐らく世界中が静まり返っていることでしょう。だって、お兄様は――――。

『だが、心しておけ。お前たちのその惰弱な発想が人類を壊死させ

るのだと……』

だってお兄様は、騎士王の再来とまで称されている方。このくらいは当然です。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

演説が終わると私は、基地内部へと戻っていたのだが……さて、これでどうなることか。

「お見事な演説でした。まあ、若干過激かも知れませんがこのくらいはしておかなければ無理でしょう」

「メルツェル。反応は」

「ご覧のとおりです」

ふん。静まり返っているか。もう少し、ここで声をあげるような者はいないのか。若しくは本社にそのような連絡を入れるものはいないものか。

「張り合いがないな」

「恐らく、社長と張り合えるのは篠ノ之束などくらいしかいないと思われます」

そうは言うがメルツェル……まあ、いい。

「ＮＡＳＡの長官はなんと言っている？」

「協力すると。あちらも、元々宇宙作業用だったＩＳが軍事転用されたのは悔しがっているので、すんなり協力してくれましたよ」

そうか。ならば、こちらはマクロスなどの開発で知恵を借りるとするか。いくらジーナスの記憶があるとは言え、やはり専門家に任せ

たほうがいいだろうしな。

「篠ノ之束は地球という世界を変えた。なら、私はその上を行く。立ちふさがるならば誰であろうと相手をしよう」

そう。かつて、ＯＲＣＡと敵対したあのリンクスのような男、そして自分の信念の表れである「歌」を持ってプロトデビルンとの戦いを終わらせた男のように。

「メルツェル。もし喧嘩を売られた時はどのように言えばいい？」

「こう言えばいいのでは？　『歓迎しよう、盛大にな』と」

第１０話　兄、宣言する（後書き）

ということで、マクシミリアンが世界中に目的を宣言しました。とりあえず、やっておかないと。そして現在はアメリカというか、ＮＡＳＡを抱き込みにかかっています。

そして、ひっそりと新キャラ「セレン」が出てきましたが、今後出てくるかは微妙。

第11話　兄、狙われる（前書き）

今回は、クオリティは低いです。あんま期待しないでください

第１１話　兄、狙われる

やぁ、私だ。自分でやっておいてなんだが、あの宣戦布告のあとから仕事が忙しくなってきた。そろそろ休暇を取るべきかね？　よし、脱走の準備を進めておくか。

さて、話は変わるが私が行った宣戦布告。その影響はそれなりにあったぞ？　まず、ＮＡＳＡと協力体制をとったのだが、あの宣戦布告の直後にロシア連邦宇宙局、欧州宇宙機関、ＪＡＸＡなどの機関がぜひ共同研究をしたいと言ってきた。その他にも、ＯＲＣＡ旅団に参加したいという元軍人などが増えてきた。それに伴いＯＲＣＡ旅団もオルコット・インダストリーの私兵集団というよりも、イギリスの独立軍の様相を呈してきた。

「となると、イギリス本土では少し手狭だな。よし、ここは政府に「社長。首相から通信です」ん。ちょうどいい。つないでくれ」

『マクシミリアン殿。お久しぶりですな』

「ええ。首相こそお元気そうでなによりです。ところで、どのようなご用件でしょうか？」

宣戦布告はちゃんとイギリス政府に許可をとったから問題はないはず。それに、ヨーロッパ各国に根回しをしていたから国連議会でもそこまでイギリスが攻撃を受けるということもなかったはずだが。

『確か、オルコット家は子爵の家柄だったと記憶しているのだが』

「ええ。それが何か？」

『いや、君が今までやってきたイギリス国内での活動などが評価されて女王陛下直々に爵位の格上げと、君自身に騎士の称号を与えることが決定してね？　つまり、その儀式の連絡を』

ふむ。爵位の格上げか。現代では結構珍しいな。それに、私個人に騎士の称号を与えると。これは、思ってもみない事だな。

「分かりました。それと、話は変わるのですが少し議会で図ってほしい事案がありまして」

それは、本拠地兼人工島の建設。ただし、外観はスピリット・オブ・マザーウィルだがな。やはり地上での母艦は必要だからな。ちなみに、予定では海の上に浮かせる。スピリット・オブ・マザーウィルの下に海中ドックを制作。その中でマクロスを製作するつもりだ。ちなみにドックはグレートウォールのような装甲にするつもりである。ん？　言いたいことがあれば言えばいい。金がかかる？　あい

にくだが、すでにイギリスの国家予算並みの資金があるのでね。

それと、スピリット・オブ・マザーウィルの弱点である『被害が内部に伝播しやすい』という欠点も、ピンポイントバリアを使用することで克服した。

『ふむ。分かった。とりあえず、その案件は議会で話し合う。とにかく、三日後に授与式があるから頼んだよ』

「委細承知」

さて、これで随分と動きやすくなる。すでに、アーマードコアの方はロールアウトがすんでいる。コジマ粒子こそ積んでいないが、それ以外なら『ネクスト』と言っていいだろう。まあ、『ネクスト』と『ノーマル』の間といったところかね。逆関節脚部などもＩＳのＰＩＣを改良してアーマードコア用の重力制御装置を完成させたから機動に関しても問題はない。

ＶＦシリーズの方も、なんとか熱核反応タービンエンジンが完成したので、バルキリーを鋭意製作中だ。ちなみに、Ｄ型とＡ型を基本的に量産。Ｊ型は小隊長機として少数量産。Ｓ型はメルツェルたち幹部連中専用機という形にしている。まあ、そこは変わっていない。勿論、Ｓ型は１機押さえてある。やはり性分というか、なんというか。私だって戦いたいのだよ。

さて、あんまり自分のことばかりに集中するわけにもいかない。実は、先日からオルコット・インダストリーがハッキングを受けている。おそらくは、束だろうな。必死にアヴァロンへアクセスしようとしているが、アヴァロンはその内部でネットワークが完結している。つまり、物理的にアヴァロン内へ侵入してハッキングをするしか情報を抜き取るしか無いのだ。

後は、亡国機業か？　ローディーやネオニダスに内偵を進めさせていたらようやく動きを見せてきた。まあ、それはある程度予想はしていたが……。

「マクシミリアンさま。また、です」

リリウムがつぶやくと遠くのほうで爆発音が聞こえている。今、私は『前の世界』で言うところのカラード所属のリンクスたちに護衛されながらオルコット・インダストリーへと戻っているところだ。なんというか、亡国機業はマフィアなどを使って私を殺しにかかっている。

「リリウム。現在地は？」

「市街地からおよそ１０キロ。メルツェルからオールドキングを出動要請が出てきています」

最近ではハリ、ネームレスが護衛を務め、チェルシー、リリウムがメイドとして、フィオナが秘書として傍にいることが多い。戦力過多とも思ったが、メルツェルたちがコレでも少ないくらいと言っていた。まあ、あの宣言の後から暗殺犯の数がおよそ４倍に跳ね上がった。そのため、『前の世界』のＯＲＣＡメンバーが暗殺犯の処分やそれらを放った連中の追跡、カラード所属リンクスが私の護衛を務めている。まあ、といってもハリ、ネームレス、チェルシー、リリウム、フィオナ、メルツェルは固定なので、その他のリンクスはアヴァロンなどでアーマードコアやＶＦシリーズのテストを行っているがな。ちなみに、ネームレスはホワイト・グリントだ。フィオナ・イェルネフェルトと一緒にやってきたからもしやと思ったが、この男どうやら亡国機業のような組織で改造されていたらしい。フィオナはそこの研究員だったらしいが、まああれだ。優しすぎたのが仇になったということだ。あとは勝手に想像してくれ。

「オールドキング、か。残念だが、焼畑農業はするつもりはない。このまま逃げる」

「まぁ、彼ならそうする可能性が高いですね。では、有澤「奴は、そのまま地割れを起こす」」

フィオナ。オールドキングと有澤を呼ぶ。それはすなわち地形が変わるどころの話ではないぞ？　あぁ、ちなみに有澤だが……やはり、有澤重工を仕切っており例のごとくのやり方だ。ただ、なぜか分からんが我が社の傘下に入ってきた。一応、我がグループの実弾兵装シェアの大半を担っている。

それと、組織図が大幅に変わった。多種多様な企業集合体になった。分かりやすく言えば、ＧＡグループやオーメルグループなどの企業連合体だな。定期的に内偵させておかなければ暴走するかもしれんな。そこはメルツェルにメンバーを選出させておくか。

「……来る」

あぁ。それとネームレスだが、基本的にしゃべることはない。仮にしゃべっても「来る」「そこだ」「出る」くらいしか言わん。ただ、フィオナが通訳替わりなのでコミュニケーションには問題はない。

「マクシミリアン様。伏せてください！」

私の脇に座っているリリウムが背中に乗る形でかばわれると防弾仕様のガラスが吹き飛んだ。ちっ。ミサイルか何かか？　しかし、こうやって守られるだけというのも性に合わんな。

「フィオナ！」

「今、こちらに『フェニックス』で真改が向かっている様子です。とにかく、それまで――――」

一応、車は防弾仕様なため銃弾などは大丈夫だが――。

「ネームレス。敵の装備は分かるか？」

「……ＲＰＧ－７」

よりにもよってそれか。さすがに、ＲＰＧ－７相手に持ちこたえることができるか？

「チェルシー、フィオナ。最悪、リリウムとネームレスで相手をするです。二人はマクシミリアン様を連れて逃げるです」

「……来た」

リリウムが盾になるつもりらしいが、その必要はなかったな。

『……こちら真改。援護に入る』

ギリギリで真改が間に合ったか。だが、『フェニックス』ではまだ継戦能力が低い。となると、はやくアーマードコアの開発を急がせんとな。それに伴い、各々の専用機も、な。

「侭ならんな」

しかし、そろそろうるさい連中も黙らせんとな。まずは、鬱陶しい見合い話だが…できるなら自分で見つけたいものだ。いい女はいないものか……。

本編はここで終わりですが、ちょっとぐだっているので現時点のマクシミリアンの陣営の様子でも書きます。頑張って語り風にしてみた。あくまで「風」ですよ？

『ヨーロッパの怪物』『騎士王の再来』『イギリスの傑物』と呼ばれるオルコット家の当主マクシミリアンが全世界に『宣戦布告』をしてからイギリスは変わった。いや、むしろ変わっていたというべきだ。今の世界ではＩＳこそがドル箱とも言うべき存在。しかし、マクシミリアンは新しい思想の組織とＩＳとは全く違うコンセプトの兵器を創り上げた。

『ＯＲＣＡ旅団』と称されている集団。元々は、オルコット・インダストリーの私兵集団だったが『宣戦布告』の後はイギリス政府や英国女王などが許可しているためイギリスの独立軍の様相を呈してきた。人種・思想・性別にこだわらず『空を飛びたい』『今の世界が気に入らない』『マクシミリアンの思想に共感した』といった連中が集まった組織。本拠地は大西洋に浮かぶアームズフォートと呼称される武装人工島。一時期は海洋汚染などを叫ばれていたが、イギリス政府すら認めされたマクシミリアンがそのようなつけ込まれるミスを犯すはずもなくむしろ、海洋保護に務めていた。そこはマクシミリアンの手法に感嘆すべきだろう

そして、特筆すべきはその保有戦力。本拠地である『アームズフォート』は外観は軍艦島とも言うべき景観。さらに、内部に入るのも

ＯＲＣＡ旅団の団員ですら様々なチェックを行うため部外者はほぼ潜入は無理だろう。それに、下心をもってＯＲＣＡに入ることも難しいだろう。何故なら――いや、これはいずれ語るときが来る。

『ＯＲＣＡ旅団』の空戦主戦力であるＶＦシリーズ。従来の戦闘機に『人型』『鳥型』の二つの形態を与えた兵器。かの『白騎士事件』の折に戦闘機が負けた原因の一つでもあった『近接戦闘能力の低さ』や『急激な方向転換』を払拭するような動きを『宣戦布告』時に見せた。ファイター形態からガウォーク形態になることで急減速とそれを応用した方向転換は空軍のベテランが乗ればＩＳに迫る性能を持っている。現在は、試作型の『ＶＦ－０フェニックス』が存在しているが、正式量産型の『ＶＦ－１バルキリー』のテスト映像が公開されている。恐らく、そう遠くないうちに各国の空軍に売り払われるか、『ＯＲＣＡ旅団』に参加した元空軍パイロットが搭乗することになるだろう。そうなれば、ＩＳにも遅れは取らないだろう。

次に『ＯＲＣＡ旅団』の陸戦主戦力であるアーマードコア。宇宙作業用のユニットと嘯いていたが、完全に戦闘用のユニットだろう。しかし、戦闘用というのは多種多様な運用を求められる。故に宇宙作業用というのも間違いではない。とにかく、特筆すべきはその性能だろう。動力炉はおそらくは熱核反応エンジン。ＶＦシリーズとはまた違った動力らしい。さらに、機体の各部をパーツごとに分けることで無限の発展性を持たせた。搭乗者の性格などにより性能が違う兵器。それはＩＳよりも顕著だ。

そして、それらの兵器を操る団員たち。その中でも、マクシミリアンの直属でもあり『首輪（リンクス）付き』と呼ばれる幹部連は、全員がマクシ

ミリアンの命令にしか従わず、なおかつ戦闘能力も恐らく世界最強の部類に入るだろう。『勇将の下に弱卒なし』とはよく言ったものだ。

最後に、マクシミリアン。彼を除くことはあり得ない。彼以上の傑物がこの世界にいるとは思えない。カリスマ・能力。そのすべてが規格外と言っていい。彼は宇宙へとその目を向けている。恐らく彼は見限ったのだ。ＩＳという宇宙へ向かうことのできる物が存在しているというのに、この狭い地球での覇権を争っている我々に。

『クローズプラン』。そう呼ばれているマクシミリアンが計画している『人類の宇宙進出』のプラン。そのための下準備も行っているのだろう。もし、その『クローズプラン』が実行されたとき、果たして頂点に立っているのは誰なのだろうか？　ひとつだけ言えるのは今の世界で満足している女性や必死に男性の復権を唱えている連中ではないことは確かだ。

第11話　兄、狙われる（後書き）

マクシミリアンはこんな感じで狙われています。ちなみに、襲っているのは亡国機業の設定です。真改が来たら全滅しました。エムとかそこら辺は来ていません。

さて、次回は箒さんが……ッ！　とまあ、そんなオオゴトではないのですけどね。

ちなみに、リリウムとか口調が変わっているのは仕様です。いや、決して「リリウムたん……かぁいいよぉ」とか変なブーストがかかったわけじゃないですよ？　本当だよ？

第１２話　妹、思う

セシリアです。今日は、私から始まります。とりあえず、特筆すべきことは…まあ、ＩＳ学園ではお兄様の『宣戦布告』などで一時混乱しましたが、今はおさまっています。普通なら、政府から色々聞かれるところなのでしょうが、イギリス政府というか、イギリスという国自体がお兄様を支持しているようなものなので何も無いのです。

『一般人にとって重要なのは性別などではない。どれだけ、自分たちの暮らしを楽にしてくれるか、だ』

その言葉通り、オルコット・インダストリーは社会福祉などにも力を入れているためイギリス国内でも評価が高い。確か、女王陛下からもお褒めの言葉をいただいていたはずです。なので、恐らくイギリスでお兄様に危害を加える者はそういないと思います。

「……ところで、一夏さん。特訓もいいのですが……根を詰めると大怪我をしますよ？」

私の目の前には地面の上で荒い息を吐いている一夏さんと、頭に手を当ててため息を付いている箒さんがいます。さて、私たちが何をしているかというとさっきも言ったとおり特訓です。ただ、なんと

いうか……その……。

「えっと……本当に言いづらいのですが、一夏さん。私の軌道を真似しようとしても無理です」

「それに、お前とセシリアでは戦い方が正反対だろう？」

一夏さんは私の動きを真似しようとしているのですが、正直に言うと馬鹿か？と思うのです。私は、基本的に移動砲台。一夏さんのように『敵に突っ込む』のではなく『敵から距離を取る』ような機動なのです。確かに時にはゼロ距離で射撃を行うことがありますが、基本的には攻撃を避けながら距離をとって射撃といった形なので、近接戦闘用の白式には全くと言っていいほど無理でしょう。

「ということなので、ＩＳの機動などは箒さんに教えてもらったほうがいいと思います。私ができるのは、対戦相手くらいでしょうし」

まあ、攻撃を避けるだけでも充分訓練にはなります。

「あら。ちょっと、箒さん。後はお任せします。ちょっと、電話が」

「ああ。分かった。さあ、立て」

「お、おう」

携帯に着信が来ました。相手は、お兄様。なんでしょうか？

「私です。どうされたんです？」

『いや、近いうちに日本に行くことになった。まあ、実際は仕事なんだが…その後少し時間が取れそうなんでな。もし可能なら会えないかと思ってな』

「そうなんですか！？　えっと…いつごろですか？」

お兄様の場合、様々な事情から休みをとることは難しいのです。いえ、仕事が忙しいとかではないのです。お兄様は仕事はすぐに終わらせて紅茶を飲んでいるような人ですから。では、何故休みを取るのが難しいかというと簡単なはなしです。

『しかし…何故奴らは私を監禁するのだろうかね？』

「いえ、本社から姿を消したと思ったらアメリカにいるような人を監禁する以外にどうやって確保すると？」

お兄様は、脱走癖といいますかストレスがたまるとある行動をとるのです。その内の一つが『国外逃亡』です。しかも、自分がいなくても大丈夫なように仕事は予定以上に終わらせていたりするのでただ逃げ出すよりはマシとはレイスさんの言葉です。

『あ、ちなみにＩＳ学園で映画撮影があるぞ』

「え？」

お兄様曰く、専属契約を結んでいる映画俳優「王虎」の新作映画の撮影が行われるらしくＩＳ学園がそれに使用されることになったらしいのです。その映画はまあ、なんと言いますかプロパガンダも兼ねているようで。

『もしかしたら、日にちが重なるかもしれんが別に気にすることでもない。むしろ、映画に出てくれないかと言われているくらいだ』

「え？」

『いや、実を言うと米軍から、な？』

「ああ、そういう事ですか」

この前、お兄様が行った宣言は各国上層部に多大な混乱を齎したようで、イギリス政府に様々な問い合わせがあったようなのですが、イギリス政府はもう引き下がれないと悟っていたのか、それとも覚悟をしていたのか毅然とした態度で対応していたようです。何故なら、お兄様の計画が成功すれば未来におけるイギリスの地位は確固たるものになります。さらには、それを実現できるであろう力も現実として存在しているからこその対応。

そして、そんなイギリスを支持したのがアメリカ。アメリカはかつてアポロ計画などを実行していた国。どうやら、アメリカの大統領はイギリスと協力しようとしているらしいのです。お兄様がいるから唯一のトップは無理、でもツートップとしては機能できるかも知れないからとお兄様は分析していました。

『まあ、日にちは何時になるかは分からん。とりあえずは楽しみにしておいてくれ』

「はいわかりまｓ『それと、学園にお前の護衛としてセレンがいる』え？『どうするかはお前に任せる』お兄様！？」

切れた……。セレンがいる、ですか。いや、いるのは嬉しいんですけど。あの娘、引っ込み思案だったから……大丈夫なんでしょうか？　とりあえず、後で探してみましょう。

「セシリア。ちょっといいか？」

「あら、箒さん。一夏さんはどうしました？」

「あいつなら先に部屋に戻った。少し、話がしたいんだ」

「ええ。いいですけど……」

声をかけられ、振り向くとすごく思いつめた表情の箒さんがいました。とりあえず、近くのベンチに腰掛けて話を聞きたいと思います。まぁ、用件は大体分かりますけど。

「私は……一夏が好きなんだ。そして、一夏と仲がいいお前に嫉妬している」

「……薄々と気づいてはいました。一夏さんと一緒にいる私に視線を送っていましたし」

話の内容は一夏さんについてでした。曰く、一夏さんが私と一緒にいる事が多くなった。自分と一緒にいるときですら私の事を話題にするといった感じだそうです。とりあえず、一夏さん。空気読みましょう。

「お前が悪くないのは分かっている。でも……だからどうすればいいか分からないんだ。小さいころ、姉がＩＳを作り出したおかげで平穏な生活は奪われた。各地を点々としていたんだ。友達なんて作れなかった。だから、私にとって一夏との思い出は大切なものなんだ」

ポツリポツリと喋り始める箒さん。それはどこか子供のように小さい姿。多分、箒さんは弱い。いえ、決して蔑んでいるとかではなく、弱い方。恐らく、今までＩＳの開発者の妹として苦しんできたのでしょう。篠ノ之博士は白騎士事件やその後の各国政府との交渉の後姿を消していました。肉親なら居場所を知っていると考えるのは当然。つまり、常に各国の監視や接触があったと考えるのが普通。そんな中、まともに人間関係を築けるはずもありません。私も『マクシミリアンの妹』という立場で、様々な人間が現れました。しかし、兄やレイスさんといった存在により守られながら人間関係を築いてきました。ですが、彼女にはそのような存在はいなかった。

「ＩＳは嫌いだ。私からなんでも奪う。ＩＳがあるから、家族を失ったし平穏な生活を失った。そして、今は一夏を私から奪おうとしている」

ＩＳという存在がなければ、私と出会うこともなかったのでしょう。そうすれば、箒さんがここまで苦しむこともなかったかも知れません。ですが、現実は違う。

「……私からは何も言えません。ですが……その、一度思いを伝えてみてはどうですか？　幸い、明日は休日です。今日一日、じっくりと話してみては？」

コレばかりは、どうしようも無いです。

「そう、だな。分かった……」

それだけを伝えると、箒さんはそのまま帰って行きました。私は、息を吐きながら空を見上げました。

「なんか……雨が振りそうですね」

どんよりと曇っている空。何故か、憂鬱な気分になります。

「箒さん……頑張ってください」

私は分かっていませんでした。箒さんは「一夏が何かにつけてセシリアの事をしゃべる」と言っていたこと。私はそれを「自分を負かした相手」の事と思っていました。でも、それは勘違いだったのです。

「え？　箒さんが泣きながら学園外に出ていった？」

少し、散歩してから寮に戻った私は寮の玄関でどこか焦っている一夏さんと会いました。

「その…ちょっと……」

一夏さんから聞いた話では、ＩＳの勉強をしていた時に箒さんが話があると言ったらしいのですが、今忙しいから後にしてくれと言ったらしいです。

それだけならまだここまでの自体に陥ることはなかったらしいのですが、ちょうどクラスの女子が部屋にやってきて話しかけてきたそうで、それに対応したら…という感じだそうです。

「なまじ顔見知りだというのが仇になりましたね」

一夏さんからすれば、箒さんと話す機会は沢山あるから後回しにしたということなんでしょうけど。これもまたタイミングが悪いというか、空気を読めというべきか。

「とにかく、織斑先生に相談しましょう。雨も降ってきたようです

し」

「で、でも「今、箒さんに会ってなんていうのですか？　何故、彼女が泣いてしまったのか、それを理解しなければだめですよ？」」

この人の鈍感さにも困ったものです。それに、私に好意を持っているのかも知れませんが私は誰にでも優しい人は嫌いです。そのような人ほど、危険人物を惹き寄せやすいから。だから、例え一夏さんが私に告白してきても断るつもりです。

そして、私たちは織斑先生にこの事を伝えに行ったのですが、そこで聞かされたのは箒さんが学外に出たらしいということでした。

ＳＩＤＥ　箒

雨がふっている。でも、傘はない。だから濡れたまま歩く。

『一夏、話があるんだ』

『ちょっとまってくれ。今、勉強中だから』

『……少しくらいは大丈夫だろう？　それに、私だって教えてやるかr『ヤッホー。織斑君。今大丈夫～？』』

『ん？　何だ？』

思い出すのはさっきの事。一夏、なんで……私の話は聞かないでクラスの女子の話は聞くんだ？

『ふぅ。勉強が遅れちまったな』

『一夏……話を『悪い。もう少し待ってくれ』……』

時間がないならなんで女子の話は聞いたんだ？　なんで私の話は聞かないんだ？　その時何かがキレタ。だって、もう限界だったから。半強制的にこの学園に入れられて、それで一夏がこの学園に来るって聞かされて嬉しかった。また、昔のように一緒にいられると思っ

たから。でも、結果はどうなんだ？

『もういい。お前なんか知らない……勝手にすればいいだろ！』

そのまま逃げてきた。校門を出たときに警備員に何か言われた気がしたけど無視して走り去った。感情的になりすぎたと思う。でも……。

「怖い。セシリアには勝てないから……」

セシリアは凄い。自分自身に「常に成長する」と言い聞かせてその通りにしている。セシリアの兄という存在がそうさせているのだと思う。それに比べて私は……。同じように世界に名を轟かせている兄弟がいるのに。だから、怖い。もしセシリアが一夏を好きになったら私じゃ勝てないから。

「一夏。お前は私のことをどう思っているんだ？」

もし、ただの幼馴染だったら……。

「ん？　何だ？　風邪をひきたいのか？」

顔をあげるとそこにはコートに身を包んだ男がいた。その顔を私は知っていた。

「マクシミリアン・オルコット。セシリアの――」

セシリアの兄。

「セシリアの事を知っているのか…おい」

あれ？　目の前が暗く――。

第１２話　妹、思う（後書き）

とりあえず、ごめんなさい！（ジャンピング土下座

だって……筆が進んだらこうなったんです！　ボクは悪くない！ハズ。

とりあえず、現時点での好感度表的な物

マクシミリアン→登場キャラ

セシリア：大事な妹。彼氏はできてもいいが、半端者は許さない

一夏：とりあえず、会っていないので判断保留。ただ、セシリアから色々聞いているので、評価は低い。

千冬：顔なじみ。とりあえず、日本に来たときは会う程度。

束：そちらの領分には干渉しないから、こちらにも干渉するな。一応、ライバル。

箒：誰？

セシリア→登場キャラ

マクシミリアン：尊敬すべきお兄様。実は、日本のサブカルの影響で禁断の愛というのを妄想していたりする。

一夏：まぁ、お友達。とりあえず、空気嫁

千冬：戦い方を教えてくれる人。

束：誰？　興味ありません。

箒：お友達。応援します。

こんな感じかな？

第13話　兄、出会う

私だ。マクシミリアンだ。ちょっと、予定より早く日本についたので秋葉に行ってみた。いやぁ、なんというかパワーに満ち溢れていたよ。さて、ちなみに私は一人だ。いや、一応隠れて護衛はされている。土砂降りになったので傘を買って街を歩いている。私自身は雨に濡れるのは嫌いではないが、ここで風邪をひくと色々と面倒なことになるから…ん？

「一夏。お前は私のことをどう思っているんだ？」

「ん？　何だ？　風邪をひきたいのか？」

土砂降りだというのに傘もささずにうつむいて歩く少女。別に、雨の日に傘をささずに踊る人間がいても構わないが……どうも、訳ありのようだ。雨の日に絶望しながら歩く人間もそういまい。ましてや、紛争地域やスラム街ならともかくこの日本ではそのような話はあまりないだろう。

「マクシミリアン・オルコット。セシリアの――――」

ん？　こいつセシリアを知っているのか？　よく見ればＩＳ学園の制服？

「セシリアの事を知っているのか。おい……？」

話しかけようとしたら倒れた。さすがに、まずいか？　肺炎を起こせば事だ。

「メルツェルか？　今どこだ？　ああ……車を回せ。それと、病院を一つ都合つけろ。ついでに、チェルシーたちも連れてこい」

こういう時、資産家は楽だ。多少の無理は金で都合つけることができる。あまり使いたくはないがな。しかし…こいつの顔どこかで見た気が……。

「あ、すみません！　妹がご迷惑をおかけしまして…」

私が雨に濡れないように抱き抱えると声をかけられた。それは仕立てのいいスーツに身を包んだ女。　なんだ……姉？　いや、しかし……この女どことなくおかしい。まず、懐の銃だな。こいつ、どこかの諜報員か？　ということは、喧嘩の内容はそれ絡みか？

「本当にすみません。久しぶりに会おうという約束をしたのですが、ちょっと喧嘩してしまって…」

待てよ。思い出した。この少女は篠ノ之箒。姉は束しかいないはず。それに、この女…。

「確か…篠ノ之箒には姉は束しかいないはず。そして…普通、一般人が懐に銃を持つはずもないと思うが？」

「――ッ」

図星、か。それにしても分かりやすいな？　本職ではないのか？それとも、ただ単にそのようなことに慣れていないか？

「まぁ、どちらにしろ……すぐに帰ったほうがいいと思うぞ？　誘拐は……さすがに、な」

「知るかよ！　テメェはさっさとそのガキを渡せ！」

おいおい。図星だからといってすぐに銃を突きつけるのはどうかと思うぞ？　まったくＩＳが出現してから自分は誰よりも強いと変に勘違いした連中が多くなって困る。

「……お前は、激昂しやすいようだな。それでは、いずれ足元を掬

われるぞ？」

「なんだｔ「撃て」な！？」

悪いが、私の周りには常に護衛がいるのでね。サイレンサー付きなので、処分には問題ない。まぁ、不意打ちの狙撃を避けられるとは思わなかったが。

「さて、私は逃げさせてもらうよ。この少女を介抱しなければならないようなのでね」

横抱きは思春期の少女には御免被るところだろうが、この際は我慢してもらうか。

「マクシミリアン様。乗ってください！」

「メルツェルか！」

ちょうど、角を曲がったところにメルツェルたちが車を回していたが……タイミングがよすぎるような気もするが。とにかく、助かったな。

「あの女は？」

「オールドキングが向かいましたが…逃げられたようです。ＩＳを装備していた、と」

「亡国機業、か」

奴らが、ＩＳを所有しているのは分かっていたが、ここまで強硬手段に出るとは……ＩＳ学園に内通者でもいるのか？　それともずっと監視していたか。どちらにしろ、薄氷を踏むような状態なのは間違いないか。

「ご主人様…その子は？」

「チェルシーか。何、迎えを呼んだのもこいつが原因だ」

連絡を入れてわずか２分か。恐らく、メルツェル辺りが私の現在地を読んでいたな？　相変わらずの男だ。

「とりあえず、セシリアに連絡を入れておいたほうがいいか」

全く、どうなっているのかね？

ＳＩＤＥ　セシリア

「お兄様から連絡が入りました。外を歩いていたところ偶然、ＩＳ学園の生徒を保護し、現在病院に搬送したそうです。学生証などを確認したところ箒さんだそうです」

ただ、衰弱しているようで今は動かさないほうがいいとも伝えると一夏さんは俯いて、織斑先生は大きく息を吐いていました。そして、織斑先生にだけ伝えるように言われたのは篠ノ之博士絡みで誘拐されかけたこと。これは、一夏さんに伝える必要はないでしょう。そうすれば、一夏さんの事ですから騒ぐ可能性があります。でも、一夏さんが騒いだところでどう仕様も無いです。

「とりあえず、無事が確認されているならばいい。マクシミリアンはなんと？」

「『事情は分からんが、こちらで保護しておく。落ち着いたらそちらに連れて行く』とのことです」

なんでもお兄様とは親交があるらしく、手紙等のやりとりも月に一度ほどあったらしいです。そのため、名前で呼んでいるようです。

「そうか。とりあえず、織斑。お前はもう少し周りを見ろ。熱中するのも悪くはない。だが、それだけでは駄目だ」

「……はい」

とりあえず、一夏さんへの対応は織斑先生に任せましょう。私は……何をすればいいんでしょうね？

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「……メルツェル。正直にいおう。私は年下の女性は嫌いだ。いや、嫌いというより苦手だ。ただし、セシリアやＯＲＣＡの人間を除く」

「まぁ、気持ちは分かりますがね……というか、お嬢は除くんですか「当然だ」はいはい」

さて、私が何をしているかというと病院の廊下で缶コーヒーを飲んでいる。理由としては、病室を追い出された。チェルシーに。最近、チェルシーが私に対して容赦がなくなった気がする。やはり、脱走しすぎたのが問題か？　それとも、一週間寝ずに作業をしていたからか？　思い当たるフシが多すぎる。

「しかし…どう思う？」

「まぁ、あの年は箸が転んでもおかしい年頃といいます。つまり、それだけ感受性が強い」

つまりは、色恋関係か？　平和だな。しかし、その平和も綱渡りの状況なのに気づいているのか……いや、気づかないほうが幸せか。

「いや、あの様子をみる限り平和ではないでしょう。どちらかというと昼ドラのような感じじゃないですか？　私はあの子が好き。でも、あの子は別の女を見ているって感じ」

……なんだ？　よく分からないが、核心をついているような気がする。とりあえず「ご主人様」ん？

「どうした？」

「少しよろしいですか？　メルツェル様も」

チェルシーに呼ばれ病室に入ると挙動不審な篠ノ之箒がいた。ふむ。

「おはよう、というべきか？　私のことは知っているようだが、一応自己紹介をしておこう。マクシミリアン・オルコットだ」

「……篠ノ之箒、です」

ふむ……あの篠ノ之束の妹と聞いていたが……中々礼儀はいいのか？　いや、違うな。どうも事務的な感じがする。あいにく、様々な人間と会話をしてきたのでな。このくらいは分かる。

「さて、何故あのようなことになっていたか教えてもらおうか？」

「それは…「織斑一夏、か？」……」

当たり、だな。メルツェルの推測も当たりということか。

「これも青春か？　ふむ……思えばそんな事私はしなかったな」

義務教育中もひたすら会社経営などに踏み込んでいたからな。仲の良かった女子などはいたような気もするが、どうも財産狙いのような気がしてな。まぁ、あれだ。私もなんだかんだ言って疑心暗鬼になっていたのだよ。

「……ぬぅ」

「ご主人様が落ち込んでどうするんですか」

いかんいかん。先ほど、秋葉原で「灰色の青春はいやだー！」と叫んでいた男がいたからな。その時に、私もそうだったなぁ。と思ってしまった。

「あなたの妹が一夏を惹きつけているのが……怖い。私は何も出来ないから」

ん？　落ち込んでいるうちに独白か？　話を聞く限り、自分に自信がないというよりは、関係が変わることを恐れているようだな。待てよ？　確か…篠ノ之一家は日本各地を転々としていた。そして、ＩＳが発表されたのは篠ノ之箒や織斑一夏が日本の小学校の１年生とかそこら辺だったはず。普通、転校を繰り返していてもそれなりに友人は作れる。しかし、篠ノ之一家はいまや「天災」と称される篠ノ之束の家族。監視を受けているはず。つまり、そのせいで、か。

「一つ聞きたい。小さいころ一番印象にのこっている事は？」

「……私がいじめられていた時に一夏が助けてくれたこと」

おおかた、こいつにとって織斑一夏は姉に壊された平穏の残り物、と言ったところか？　随分と弱いな。いや、子供の頃から監視され続けていればこうもなるか。だが――。

「私から言えることはただ一つ。いつまで悲劇のヒロインを気取っている？」

「貴方に何が分かる！　私はあなたのように成功者じゃない！」

「分からんよ。そして、そんな事は知らん。だが、一つだけ言っておく。自分だけが不幸だと思うな？　ＩＳのせいで崩壊した家庭など今日日珍しくもない」

別に、姉のしたことの責任を取れなどは言わない。だが、自分だけがさも不幸だとするのはやめておいたほうがいい。

「チェルシー。ここは任せる。メルツェル、車をまわせ」

「はい」

さて、とりあえずＩＳ学園へと向かうか。千冬とも色々話さなければならん。

「チェルシー。カウンセリングは任せる。男と女では考え方が違うからな。それと、お前が判断して問題ないようだったらＩＳ学園に連れてこい。一応、リリウムを呼んでおく」

「かしこまりました」

予定より早いが、まあＩＳ学園にはいずれ行くつもりだったから問題はないか。そして、病室を出て玄関へと向かう途中でふと思った。

「しかし、篠ノ之束は何がしたかったのか分からんな。自分の行った行動の結果、肉親が苦しんでいる。篠ノ之箒の行動次第では、篠

ノ之箒は死んでいたかもしれん。もし、そうなった場合……彼女はどうするのか？」

「そこまで追い詰めたのは篠ノ之束本人ですからね。自棄になって世界を滅ぼす、とか？」

「それこそ愚者そのものだ。織斑千冬は『織斑一夏の誘拐』『ＩＳ学園へ事実上の監禁』『織斑一夏を守る』という代償を払った。さて、篠ノ之束はどのような代償を払うのだろうな？」

まあ、もう払っているという可能性もなくはない。

ＳＩＤＥ　チェルシー

「何なんだ……あの人は……」

シーツを握り締めながら呟く篠ノ之箒さん。多分、彼女も分かっているんでしょうね。自分だけが不幸じゃないと。でも、受け入れることができないからというところでしょう。正直に言うと、受け入れることが出来る人が珍しいんですけどね。

「篠ノ之さん。ご主人様…すみません。マクシミリアン様はよく成功者や勝ち組などと言われていますが…貴女のお姉さんと同い年という若さのため、敵対する人間は多いのです」

今でこそ、ＯＲＣＡ旅団の人間が護衛をしていますが、オルコット・インダストリーを継いだ当初は何回か親戚より攻撃を受けていました。

「え？　で、でもあのような態度だとそれも当然なんじゃ……」

やはり、皆さんそう思うんでしょうね。でも、あのように堂々としているからこそここまで来ているというべきでしょうね。

「ですが、上に立つ者としてあのような言動は必要なのです。それに、マクシミリアン様とセシリア様のご両親は亡くなられています。それも、お二方がまだ１０何歳の時に」

「え？」

しかも、周りは利権を貪ろうとするハゲタカばかり。マクシミリアン様があのような言動をするようになったのも、それが原因なんでしょうね。

「さて、ちょっとお話ししましょう。これでも、貴女より年上ですから人生経験はそこそこありますよ？」

「え？」

お姉さんがなんでも聞きますよ。

第13話　兄、出会う（後書き）

マクシミリアンの言動は元からですよ？　むしろ、おおっぴらにしゃべることが出来て嬉しがってもいましたよ？

とりあえず……どうします？　箒とチェルシーの話を書きますか？

正直言うと、マクシミリアンでもセシリアでもない視点なのでどうしようかと。

それと、次回はマクシミリアンがアーマードコアに乗る！　といっても、試運転のような感じですが。

第１４話　兄、動く

やあ、私だ。人が行動する際はある程度の地盤が必要だと思うのだ。私が宣戦布告する前にイギリスを掌握したように、少しでも被害を少なくするために交渉などを行った。そうすることである程度の未来予想が可能となる。そうすれば、後は簡単だ。たやすく目的を達成できる。

そして、それに伴い仲間を増やさなければならない。何故か？　では、質問するがたった一人でなんでもできると？　その結果が篠ノ之束だぞ？　彼女は他人に興味がないからな。まぁ、悪いというわけでもないが誰にもしゃべらなかった結果がこれだ。一家離散。自身は指名手配。妹は裏組織に狙われている、と。

「まぁ、何が言いたいかというともっと会話をしておけということだ。そうでなければ、結果は……まぁ、言わんでも分かるだろう？」

「……」

『……』

さて、私の目の前には千冬と通信越しではあるが束がいる。ここにいたるまでの過程を大まかに話そうか？

今から、大体…1時間前か？　メルツェルの運転でＩＳ学園に到着した私は、千冬を呼び出して秘密裏に千冬の部屋へと入った。そして、篠ノ之箒についての報告を済ませていた。その途中でメルツェルが、部屋に仕掛けられていた隠しカメラなどを見つけ、それが篠ノ之束謹製であることに気づいた千冬が声をかけるとこうやって通信が届いているということだ。とりあえず、私からも色々と言いたいことはあるが、それはひとまず置いておく。それに正直に言えば、『そんな事』にかまけている暇はない。

「束。お前はもう少し人の思考を考えろ。別に、他人に興味をもてなど言うつもりはない。だが、自分の行動で他人がどのような行動を取るか位は考えろ」

まぁ、理解しなくても構わんがな。そうしなければ今日のようなことがより酷い形で現れるだけだ。あのまま妹が誘拐されて人質になっていただけだ。もしくは……体の良い当て馬か？　人体改造されなくてよかったな、というしか無いな。

『……じゃあさ、君がほうきちゃんを守ってあげてくれないかな。私じゃ信じてもらえないようだし……』

「断る、と言いたいところだが……まあ、いらん干渉はできないようにはしておく。だが、近いうちに妹と話せ。そうしなければ、また同じことが起こる」

ふむ。守る代わりにこちらに干渉しないように告げるべきか？　だが、人質をとるのは私の主義に反する。さて、どうするべきか。

「少しいいか？　マクシミリアン。お前は…そんな事ができるのか？」

「まぁ、仮にも大企業の社長でもある。それに、女王陛下からも覚えはいいからな。ある程度の無茶もできる」

このようなときに権力を持っていると色々と楽だ。権力は使うものだからな。

『じゃあ、お願い。その代わりに、君の邪魔はしないよ』

「……まぁ、信じよう」

意外、だな。なにやら心境の変化でもあったか？　もしくは、そうしなければならない理由ができた、か？　もしや亡国機業が本格的に動き始めたか…。予想では、何らかの協力関係にあると思っていたが…気にしすぎたか。

「なぁ、マクシミリアン。もし、一夏の安全を確保してくれと私が頼めば……どうする？」

「……ふむ。私はこれでも何百、何千、何万人という社員を養っている。さらには、お前も知っているとおり、宇宙進出を狙っている。一応、ヨーロッパは全ての企業を傘下・業務提携をしているが、敵は多い。悪いがメリット無しでは動けん」

セシリアならばデメリットありでも動くがね。他人には…それも、取り扱いの難しい『織斑一夏』という存在ならば。

「すまんな。大企業の社長といえども、メリットなしではな。束はこちらの行動に干渉しないと取引を持ちかけていたから引き受けたが…」

束がこちらに干渉しなければこちらもＩＳのシェアには大規模な干渉はしない。それだけでもこちらとしては助かる。故に、篠ノ之箒

の身柄の安全確保を引き受けた。だが、織斑一夏を抱き込んでもデメリットしかない。未だ、大半の兵器が完成していない現状では織斑一夏を抱き込んでも、世界を相手に出来るだけの戦力がない。最悪でも、バルキリーを５００機、アーマードコアを２００機、アームズフォートを４つは欲しい。後は、パイロットたちの技量任せになるが、量産体制が整えば勝つ。しかも、かつての世界大戦で欧米列強に善戦した『ゼロ戦』を開発した日本の技術力があれば…。

「そう、か」

千冬には悪いが、コレばかりはな。

その後、私は本社で完成した『アンサング』のテストのためにイギリスへもどることになった。結局、アーマードコアは『アンサング』を作った。バルキリーの方も押さえてあるが、アンサングに乗るためには強化手術を受けなければならない。ＡＭＳほどとは言わんがそれなりにアーマードコアを『ネクスト』のように動かすことができる。

さぁ、これからが大変だ。

ＳＩＤＥ　千冬

先程のマクシミリアンの言葉が頭に残っている。

『なぁ、マクシミリアン。もし、一夏の安全を確保してくれと私が頼めば……どうする？』

『……ふむ。私はこれでも何百人という社員を養っている。さらには、お前も知っているとおり、宇宙進出を狙っている。悪いが、メリット無しでは動けん』

もし、何らかのメリットをマクシミリアンに提示すれば守ってくれるのだろうか？　もしそうなら…私は何でもする。一夏が無事ならそれで。

『ちーちゃん』

「……気にするな」

考えろ。どうすれば奴を味方に引き入れることができる？　マクシミリアンが宣戦布告を行った後に、一夏への干渉が強くなった。恐らく、性能では勝るが『数』という戦争において絶対的に必要なアドバンテージを奪われているため、男でもＩＳを使えるようにしたいのだろう。まぁ、マクシミリアンに思うところはあるが、私たちが同じようなことをしたから文句は言えない。なら、奴を味方に引き入れることが最善。どうすれば…。

私に払えるメリットがあるのか？　私にできることといえば、精精ＩＳを使って飛ぶくらいだ。だが、ＯＲＣＡ旅団には私以上の人材が多い……井の中の蛙、か。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

『それでは、これより『アンサング』のテスト戦闘に入ります』

「了解した。マクシミリアン・オルコット……アンサング出るぞ」

スピリット・オブ・マザーウィルの下に存在する海底ドック。その中にある闘技場。そこに私はいる。強化手術を受け、完成したかつて『私』が乗っていたネクスト『アンサング』の劣化コピーとも言える機体。何故、劣化コピーというかというとコジマ粒子を積んでいないことだ。全て、熱核反応エンジンでエネルギーをまかなっている。コジマはさすがに地上では危険過ぎる。

『テスト相手は、リリウム・ウォルコットの『アンビエント』です』

リリウム、か。『前の世界』では、カラードランク2のネクスト、か。いけるか？　一応、私を含めて全てのリンクスに専用機を与えたが……私自身がうまくやれるかどうか。

『マクシミリアン様、行きます』

「来い」

その言葉と共にミサイルが発射された。広さは元々マクロス級を開発するためのドックを利用しているため、少なくともアリーナ並ではある。

「悪いが…ただではやられん！」

この世界のミサイルは『前の世界』の物よりも追尾性が悪い。故に、QTだけで殆どのミサイルを避けることも可能だ。その証拠に、ミサイルは全て避けている。だが――。

「チッ。QTはさすがにきついか？」

脚部関節に負荷がかかり過ぎているな。グラヴィティコントロールシステムの不調か？　それとも――。

『マクシミリアン様。アンサングの調整はまだ完全ではありません』

そういう事か。アンビエントはミサイルばかり撃っているのは。恐らく、この戦闘もアンサングの調整ということか。分かってはいるが……どうも舐められている感じがするな。

『マクシミリアン様。本当は、マクシミリアン様がアーマードコアやバルキリーに乗るのリリウムは反対です』

そう。リリウムの言うとおり、私が強化手術を受けるのも、バルキリーを確保するのも実は反対が起こった。しかし、私自身がテルミ

ドールやジーナスの記憶を持っているため、機体に乗らないというのが我慢ならないということ。そして、ただ後ろで指示を出すだけというのでは人は付いてこない。古来より、カリスマを持つ人間というのは戦場に立っていたという事例がある。ここまで言えば分かるな？

「お前たちには悪いと思っているが……ただ守られるだけは性に合わんのでな！」

つまりは、こういうことだ。それに、世界にケンカを売ったのだ。私だけが生身というのもこいつらに悪いからな。なぁに、子供が作れるか分からんが例え私が作れなくてもセシリアがいる。あの子なら…私の後を継いでくれるさ。

そして、数時間後にセシリアから篠ノ之箒が学園に戻ってきた事を伝えられたが、正直に言うとすっかり忘れていた。すまん。

第１４話　兄、動く（後書き）

とりあえず、専用劣化ネクストはアンサングに。逆関節好きですが何か？　そしてマクシミリアンは強化手術を受けました。理由は本編で話したとおりですが、周りは勿論反対しましたし、これからも出撃する事がないようにしますよ？

チェルシーと箒の会話はその内番外編で出します。その時に、ひっそりと文中で書いていたヨーロッパ全土を掌握したときの場面も別であげます。多分。ＧＡＥみたいになっている……何この企業連。

次回は、いよいよＩＳ学園に二人のシスコンがやってくる！

番外編その1

その1：チェルシーと箒

「箒さんは……もう少し素直になっていいと思いますよ？　甘えたければ甘えないとだめですよ？」

私の目の前でチェルシーさんは優しく諭してくれる。セシリアと話していたときに姉のような人がいると言っていたけど、多分この人なんだろう。

「でも、私は……口下手だし……」

そう。小学校低学年から転校を繰り返してきたから人見知りしてしまう。仲の良くなった人と話すには問題はない。でも、初対面の人や大人相手では恐怖しか無い。だって、私に近寄ってくる人間は全員が姉さんの事ばかり聞いてきて、時にはしつこく質問してきたのだ。

「なるほど……大変でしたね。大丈夫です。もう怖い人は来ませんから」

そう言って私の頭を優しく撫でてくれるチェルシーさん。こんな人が姉だったら…。

「そんな事を言っては駄目です。篠ノ之束さんはどんな形であれ貴女の事を思っているんですよ」

そう言ってチェルシーさんは怒った。でも、私には信じられない。だって、あの人はいつも笑っている。私が一夏と離れたくないと泣いていた時も笑っていたんだ。そんな人が私を思ってくれているなんて信じられない。

「……ちょっと、ここらへんは長くなりそうですね」

私の思考が堂々巡りになったと同時に困ったように苦笑したチェルシーさんの声が聞こえてきた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　チェルシー

ネガティブになり易い子。それが、篠ノ之箒という少女に抱いた私の第一印象でした。ですが、それも転々として落ち着けない暮らし。そして、篠ノ之束という女性に関係があるからと監視され続けてしまえばこうなるのでしょうか？　もしくは頼れる大人がいなかったから、ですか？

「大丈夫ですよ？　今はあなたの周りにはたくさんの頼れる人がいますから」

もし、お嬢様にご主人様がいなければどうなっていたのでしょうか？　でも、そこでいつも思うのです。ご主人様は何故耐えられたのか？と。　確かに、先輩がいたからというのもあるのでしょうが、それでも……出来すぎています。

「あの……チェルシーさんから見てセシリアやさっきのマクシミリアンさんはどうなんですか？」

「えっと、お嬢様に関してはもう少し息を抜いてもいいと思います。その……お兄様の妹として恥じないようにします！と頑張っているのはいいのですが……ね？」

勿論、イギリスにご友人はたくさんおられるのですが、年頃の女の子らしくお買い物とかにも行って欲しいのです。行かないという訳

ではないのですが。

「マクシミリアンさんは……？」

「そう、ですね……たまに仕事を抜け出す癖がなければいいのですが。まぁ、息抜きをされていると考えればまだ…」

「マクシミリアンさんの事が好きなんですか？」

え？　私がご主人様のことを？　それは――――。

「確かにそうです」

私がご主人様へ恋心を抱いたのは、オルコット家を継がれてから。性別や生まれではなく能力で判断してもらったから今の「メイド長」という地位にいます。私は、決して裕福な家の生まれではなく、オルコット家のメイドになったのも少しでも給金の良いところに行きたかったから。でも、そんな私をご主人様は認めてくれました。だからこそ私は慕っています。でも――――。

「ご主人様は、脱走癖などもありますがご自分がいなくても機能するようにしてからいなくなります。先輩でもあるレイスさんは、いつ自分が死んでもいい様にと分析していました」

世界に喧嘩を売ったご主人様。そのため、敵は多い。ご主人様がオルコット家を継いだ頃から暗殺など日常でした。そして、今ではその数も何倍になったことか。だから、ご主人様がいつ死んでもしっかりと『クローズプラン』を完遂できるように根回しをして、その練習として脱走をしていると先輩は考えているようです。

「私はご主人様の事をお慕いしてます。だから……死んでほしくはありません」

「……」

「でも、それは許されないんです。いくらご主人様の事を好きでもそれを表に出してはいけないんです。それが……メイドですから」

メイド。それは言い換えれば使用人。使用人が仕えるべき主に恋心を抱くなどあってはならないこと。身分違いにも程がある。それが許されるのは物語の中だけ。だから、私はこの思いを表に出すこと無く死んでいきたい。

「ご主人様……ごめんなさい。せめて……この思いだけはお赦しください」

「あ……ぅ」

駄目ですね。これでは、どちらが相談に乗っているのか分かりませんね。

その2　マクシミリアンのお仕事1　時系列で言うなら、ＯＲＣＡ旅団拠点完成前

「何？　海底に鉱山？」

「はい。調査隊によると…鉄鉱石などが大量に……それに、その…前大戦時のものと思われる戦艦なども発見されました」

部下の報告に私は唸る。鉱山が発見できたのは嬉しい。それに、大戦時とはいえ戦艦などが発見されたということも利益が大きい。使

える部位があれば使うし、最悪溶かす。

「となると……そこに拠点を作ったほうが得策か。よし、その鉱山を中心に拠点を作成する」

さて……どんなものになるかね？　できるなら……分かりやすい形がいいな。要塞か。マクロス級は……メインだ。だが、要塞といえば……アンサラー？　スピリット・オブ・マザーウィル？　ギガベース？　さて、何を作るか。いっそのこと全部作るか？　夢が広がるな。

※　マクシミリアンは珍しくテンションが上がっています。

その3　マクシミリアンのお仕事2

さて、私は現在ＪＡＸＡに来ている。というのも休暇がてらの視察だ。そして、正直来なければよかったと思った。

「フハハハハハハ！　できた！　できたよ！　ＩＳのシールドなんて一発で破壊できる拡散咆が！」

「ヒャッハー！　タンクこそ最凶！　タンクこそ至高！　ガチタンじゃー！」

「あぁ……ウチの愛しい多脚タン。もう……ウチと結婚して？　ウチ尽くす女だからぁ」

「ロケットパンチ……いや、ドリルプレッシャーパンチだ！　ｋｔｋｒ！」

何だこの連中。ＪＡＸＡには変態しかいないのか？　というか、ぶっちゃけていおう。ここはアクアビットか？　いや、あそこまでひどくはないか。別ベクトルで酷い気はするが。

「いえ。彼らはその……特別でして」

所長が冷や汗を流しながらビクビクしている。そりゃ……そうもなるだろう。

「ん？　おい！　大将だ！　ありがとうございます！」

「あなたのおかげで好きなモノを作れます！」

「ウチの愛は多脚タンにしか注がないけど……大将なら……いいよ？」

すまん。誰か胃薬を。リリウム。お前は下がっていろ。何か危ない感じがする。

「ん？　銀髪美少女！」

「写真じゃ！　写真を撮れ！　すぐさま三面図におこすんだ！」

「すでに塩ビの準備は整っています！」

「バカ言え。ここは亜鉛ダイキャストだ！」

「あぁ！？　超〇金なんてふざけてんのか！？」

「超合〇ロビンちゃんなめんな！」

「貴様ら、今の流行りはねんどろ〇どぷちだ！」

「マクシミリアン様。この人達怖いです」

安心しろ。私も怖い。こいつら大丈夫か？

そう思ったのだが、のちにこいつらのおかげで拠点製作やバルキリー、ＡＣネクストの開発が一気に進んだ。素直には喜べないな。

※現実のＪＡＸＡとは差異があります

番外編その1（後書き）

あれ？　なんかいつの間にかチェルシーさんの思いのたけを吐き出してた？　あるぇー？

それと、ＯＲＣＡ旅団の拠点はこんな感じです。海底はまだ未知の領域なのでここまでやってもＯＫかな？

ＪＡＸＡはこんな集団ではないですよ？　あくまで小説ですよ？あそこの人たちはちゃんとした技術者集団ですよ？　本当だよ？

第１５話　兄、ＩＳ学園に来る

改めて、ＩＳ学園よ。私が来たぞ。しかし、参った。強化手術の影響かは知らないが、少し右足が引きずるようになってしまった。医者曰く一過性らしいから問題はないようだがな。

さて、冗談はさておき。王虎が隣にいるが……妙にそわそわしているな。

「フッフッフ。実は、鈴がＩＳ学園に転入したという情報はすでにメルツェル経由で知っている」

「おい。勝手にＯＲＣＡのネットワークを使うな」

一応、王虎もＯＲＣＡ旅団に所属している。ただ、こいつの場合は広告塔として動いてもらっている。さらに、こいつ自身のポテンシャルも相まってＶＦシリーズやノーマルを普通に操れている。ただ、なんというか……こいつのあり方はダン・モロに似ている。いや、奴ほどヘタレではないが。

「しかし……ＩＳ学園か。日本がせっせと国税を使って作った箱庭……思っていたより豪華だな。つーか、お前が関わっているなら当

然か」

「まぁ、な。日本政府も長期のスポンサーは欲しかったようでな。ぶっちゃけたことを言うと、製品のテストにはもってこいだった」

机や電子機器などの実働データは集まった。これは、うれしい誤算でもあった。というのも、元々スポンサーにはなるつもりではあったが、ここまで製品を卸せるとは思っていなかったのだ。日本政府よ。それほどきつかったのか？　まったく、アメリカもしょうもないことをする。ここは、日本のフォローに入って今後の交渉をやりやすくするべきだろう。ただでさえ、外交が下手な国なのだから。おかげで有澤重工経由で圧力がかけやすくなった。

「とにかく、行こうぜ」

「まぁ待て。リリウム。迎えは誰が来る手はずになっている？」

「織斑千冬です。それと、生徒を無駄に刺激する必要もないと護衛はリリウムだけです」

ふむ。まぁ、ネームレスは無口のうえ纏う空気が危ないからな。仕方ない。それに、フィオナはネームレスがいないと若干精神的に危ういし……奴はネームレスに依存しているような気もするがな。メルツェルは、まぁ元々が謀略家であるから前に出ることはないな。

どうせオールドキングかダン・モロ辺りが隠れて護衛にいるはずだろう。ただ、この組み合わせどうにかならなかったのか？　ウェン・Dやエイ・プールとかメイ・グリンフィールドとかいるだろう……ん？　対外的にまともそうなのがこいつらくらいしかいないというのはどうなんだ？　癖が強すぎるな。もう少し……人格とかそこら辺も考慮すべきか？　いや、だが…。

「マクシミリアン様。織斑千冬が来ました」

「ああ。久しぶり…というほど会っていないわけではないな」

「そう、だな。とりあえずは、この前のことには礼を言う。篠ノ之ももう大丈夫だ」

「あれは、チェルシーだな。私は何もしていない」

これは事実だ。そして、チェルシーが何を話したのかも知らない。まぁ、知る必要もないか。

「とりあえず、案内してもらおう」

さて、久しぶりに会うセシリアは成長しているかな？　それと、王虎。貴様は落ち着け。

ＳＩＤＥ　セシリア

それは、突然でした。数日前に友人になった中国の代表候補生の鳳鈴音さんを含めたいつものメンバーで学食で食事をしていると、入り口が騒がしくなりました。学食にいた全員の目がそちらを向くとそこには――。

「兄貴！？」「お兄様！？」

いつものスーツにコート、サングラスという姿のお兄様とメイド服を着て三歩後ろに控えているリリウム。その横には、織斑先生とどことなく好感の持てる顔立ちのアジア系の男性がいました。鈴さんの言葉から察するにご兄弟なのでしょう。

「え！？　あれって、『王虎』でしょ！　あの映画スターの！」

「それに隣にいるのってマクシミリアン・オルコット!?　なんでここに!?」

それは、私が聞きたいです。確かに、ここに来るという事は聞いていましたがまさかここまで早くだとは。

「りいいいいいいいいいん！　元気だったかー「やかましい」げふ――」

そして、鈴さんのお兄様らしき方が大声を上げて駆け寄ってきそうになった瞬間にお兄様の足払いで派手にこけました。あの……さすがにそれは……。

「本来ならまず理事長の所へと行くはずが…貴様の我侭でここにきたのだが?」

お兄様はサングラスに指を当てながら少し怒っているようでした。

「さて、千冬。案内してもらおうか?」

「……会わなくていいのか?」

そう言って私を織斑先生は見ますが、お兄様はこちらを見ずに一言。

「今の私は『オルコット・インダストリー社長』だ」

そう。お兄様は公私混同をしません。でも、レイスさんから聞く限りすごく遠まわしに私を守ってくれているようです。ですから、お兄様が少しでも安心出来るように頑張るのが私の仕事です！

「……兄貴。置いて行かれたよ？」

「も……もーまんたい……」

ただ…同じ兄でも鈴さんのお兄様は……私的には遠慮したいです。

その……ノリの軽い人は……。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

ん？　王虎を置いていった理由？　邪魔だからだ。それに、奴の場合は私とは別件だ。奴は映画撮影。私は、卸した製品のチェックや学園とのスポンサー契約の更新と――。

「マクシミリアン。私を好きにしていい。だから……一夏を守るために力を貸してくれ」

千冬に呼び出されたためだ。

「……修羅場、です」

リリウム。誰からそんな言葉を教わった？　何？　王大人よ。貴様何をしている。

「べぇくっし！」

「おや、王大人。どうしました？」

「ＣＵＢＥか。いや何。誰かが私の噂をしているのかと思ってな。それより、見てくれ。リリウムのメイド服の写真だ」

「……孫バカ爺が」

※お爺ちゃんは孫娘が可愛いようです。

第１５話　兄、ＩＳ学園に来る（後書き）

この小説では、王大人はただの孫バカ爺です。　え？　ロリコン糞爺？　誰ですかそれ？

第１６話　兄、交渉する

ＳＩＤＥ　千冬

『――つまり、これ以上マクシミリアンに大きな顔をさせておけば我らだけではない。君の立場も危うくなるのだ。だから、速やかに織斑一夏の身柄をＩＳ学園からこちらに引き渡して欲しい』

嘘をつけ。私の立場の心配など建前だろうが。だが私にはどうすることもできない。それは、私がこのＩＳ学園に教師という形で『軟禁』されているという事実が証明している。ここに勤務し始めた頃は一夏を養うために少しでも給金の良いところを探した結果が、この学園だった。そして、そこでＩＳを教えていくうちに逃げられなくなった。家に戻ることすら許可を願いでてから一週間後になることもあった。気づけば一夏を守ることすら難しいほど学園に縛り付けられていた。少し探ってみたら、そうなるように委員会が操作していたらしい。世界最強を手元においていたかったのだ。

世界最強などともてはやされていても所詮は『国家』には勝てないということだ。あのマクシミリアンの『宣戦布告』の後にあの男に言った。

何故、あんな事をした？　世界に混乱をもたらすのか？と。だが、言ってから気づいた。マクシミリアンに言われて気づいた。

『お前と篠ノ之束にその言葉を言う資格はない。その言葉、そっくりそのまま返してやろう』

そう。私にマクシミリアンの行動を咎める資格はない。何故なら、マクシミリアンがやったことも、私と束がやったことも大差ない。ただ、それが『平和的』だったかの違いなのだから。では、何故そのようなことを言ったのか。それは、嫉妬していたのだ。私たちと同じことをしておきながら自分の妹などを守りきれているあの男の才覚に。

「どうすれば……一夏を守れる」

そう考えていたときに、箒の誘拐未遂事件が起こりその処理を行ったマクシミリアンが学園へとやってきた。そして、束は『例外を除く相互不干渉』を自分の能力を引き合いに出して箒の保護を認めさせた。だが、私にできることなど殆ど無い。技術？　そんなモノマクシミリアンに必要か？　戦力？　ＯＲＣＡ旅団を組織しているのに？　では、私は何を代償にできる？

その結果、考えたこと。それは、私自身を奴に捧げることだ。戦力としては役に立たないかもしれない。だが……それでも、私は……。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

やぁ、私だ。ＩＳ学園にやってきたが、セシリアが元気そうで何よりだ。通信は忙しくない限りは定期的に行なっていたのだが、やはり自分の目で確認すると安心するな。

「マクシミリアン様」

リリウム。もう少し逃避をさせてくれ。いくら私でも疲れている状況では逃避もしたくなるのだ。まあ、それでは話も進まないから切り替えることにするか。

私が通されたのは応接室。スポンサー契約の更新などは『理事長』の都合が今悪いということなので、数時間後になった。そして、その結果がこれだ。

「マクシミリアン。私を好きにしていい。だから……一夏を守るために力を貸してくれ」

そう言って頭を下げる千冬を見て固まっているわけだ。しかし、『私を好きに』か。恐らくこの前の束との取引が原因か？　私が宣戦布告をしたから今のＩＳ市場を崩されたくない連中が織斑一夏を渡せと働きかけているのは知っていたが、ここまで追い詰められているとはな。

「……ひとまず落ち着け。そして、話を聞こうか？」

リリウムに紅茶を淹れさせながら座るが……ふむ。これも私の行動の結果か？　まぁ、その関係で千冬から色々言われたりもしたが、な。

「……ＩＳ委員会から一夏の身柄を引き渡すように要請があった。理由は……多分、お前だ」

当たり、か。性能で言えば劣るが、拡張性・量産性などで勝るＶＦシリーズやＡＣ。それらを導入するにはＩＳで利権を得すぎたということか？　コンコルドでも似たようなことがあったな。しかし、別にそう急ぐことでもないと思うがね。ＩＳとＶＦシリーズやＡＣとは運用コンセプト自体が違うというのに。まぁ、それも自業自得

だな。

「それで、私に保護を求める代償として自分か？」

「……ああ」

しかし、何故そこまで守ろうとするのか分からんな。両親がいないことになにか関係があるのか？　まさかとは思うが……実は織斑一夏はアスピナ機関やアクアビットのような人体実験の被験者だから、とか言わんでくれよ？　まぁ、そこはさておき……織斑千冬をもらったとしてメリットはあるか？

「……ふむ」

「……」

生身の戦闘能力は高そうだが……私を除いた強化人間に勝てるか？　ダン・モロ辺りには勝てそうではあるが、確実に真改やオールドキングは無理だな。リリウムたちなら互角といったところか？　あぁ、ちなみに私は逃げに徹すればまぁ……リリウムレベルなら問題ない。オールドキングレベルは無理だ。ダン・モロには……不意打ちなら勝てる。奴はあれでいて強いからな。となると、戦闘能力ではＩＳの操縦などから察するにＯＲＣＡ旅団では上位にははいるか。

「……やはり、駄目、か？」

「織斑千冬。少し待ってください。マクシミリアン様はメリットなどを算出しています」

しかし、世界最強のＩＳ操縦者をこちら側に引き入れることで得られるメリット。広告塔としての役割。織斑千冬という存在に恐怖をいだいている連中の牽制。ＩＳ主義・各国上層部の女尊男卑推進派の議員などの士気低下、などが狙えるか？　牽制よりも士気低下のほうがありがたいか。正直、ＩＳ陣営のバッシングが鬱陶しかったからな。

そして、織斑一夏を守る場合のデメリット。ＩＳ委員会を完全に敵にまわす、イギリスやフランス、アメリカ以外の先進国が敵になると言ったところか。ロシアは…宇宙開発関連の組織はこちら側だ。まぁ、ある程度は押さえてくれるだろう。ん？　よく考えればそこまでデメリットがないな。アフリカやＩＳを保有していない国にＶＦシリーズやノーマルＡＣを輸出する予定だから、そこら辺の国はこちらを支持してくれる。アメリカはＩＳとの両立を図るつもりらしいから、公の立場は中立だな。この場合アメリカの物量主義が幸いだった。あちらも、元軍人の雇用に困っていたからな。となると、デメリットはＩＳ陣営を完全に敵にまわすと言ったところか。

ふむ……そこはメルツェルの裏工作でなんとか被害は最小限に抑えられるか。むしろ、ＩＳ陣営の士気低下を狙うならアリか。

「……よし。いいだろう。織斑一夏の保護を行おう。まぁ、立場が微妙であるから完全に『こちら側』とはできないが……牽制くらいにはなるだろう」

「本当か！？」

「ああ」

フランスの場合は、デュノア社が何とかしてくれるだろう。あそこはＩＳの開発関係で下降気味だったが、社長がハイエナというか鼻が利くというか。オルコット・インダストリーの子会社になる代わりに自分たちも宇宙開発に参加させろと言ってきた。まぁ、メルツェルが人員を派遣しているので裏切ることはないだろう。

「とりあえずは…何もしなくていい。というか、するな。自身で分かっているとは思うがお前はＩＳしかできないと言っていい」

「……ああ」

「理解しているならなにより。委員会への牽制などの工作はこちらが行っておく。お前は現状のままここで教師を続けていろ。余計な真似はするな」

体などいらんよ。性欲処理？　そんなものＯＲＣＡの連中やチェルシーで事がすむ。それよりも、下手に手を出せば……束や織斑一夏が妙な行動に出んとも限らん。織斑一夏なら所詮は実験体予備軍の少年。問題はないが、な。どちらかと言えば、束がな。

「さて、これでいいか？」

「……ああ。でも、私は――――」

「悪いが…興味はないな。私が君に惚れていれば、『婚約者の弟』として守れたかも知れないが……現実は違う。それだけのことだ」

さて、そろそろ理事長も帰ってきた頃だろう。そちらの方に向かうとするか。

「まぁ、お前は魅力的な女だと思うぞ？　ただ、私の嗜好ではなかったというだけだ」

いや、千冬はミリアに似ているのだが、な。『私』的にはもう少し明るいほうがいい。こんな時に『別の世界の自分』の記憶があると厄介だ。似ている人間がいるとつい重ねてしまう。

「マクシミリアン様…？」

おっと。移動中だというのに顔に出ていたか。まったく、表情を隠すためにサングラスをかけているというのに、これでは駄目だな。さっさと行くか。

ＳＩＤＥ　千冬

振られた、か。いや、自分の目的のために利用しようとしていたんだ。それも当然か。本当に、私に価値はあるのか？　ＩＳ世界最強という肩書きしか持たない私が……。

「あぁ……悔しいなぁ……」

私は……無力だ。

ＳＩＤＥ　メルツェル

ふむ。織斑千冬を抱き込んだ、ですか。まぁ、彼女自身には「世界最強のＩＳ操縦者」としてのネームバリューしかありませんが、ＩＳ至上主義の連中にとってコレほどない裏切りでしょうね。なるほどなるほど。閣下が好いておられれば、婚約者としてＩＳ信者の心を折る予定でしたが、閣下が望む展開ではない。というより、あの女は閣下には相応しくない。自分を代償にしたのは評価するが、ただそれだけ。

「さて……本社の方はどうですか？」

「問題はありませんよ？」

すぐ後ろにいるレイスにそう話しかける。相変わらず気配を見せない男だ。『幽霊（レイス）』の名前そのものですね。

「閣下は未だ日本ですか？」

「ええ。セシリア様の成長を確認する意味もあり、クラス対抗戦でしたか？　そこまではいるつもりらしいですよ？」

「よくＩＳ学園が認めましたね。スポンサーは偉大ということですかな？」

しかも、隠れ蓑に『映画撮影』もありますからね。委員会は今頃やきもきしているのでしょうねぇ。ＩＳとＶＦ・ＡＣを両立させるには利益を得すぎましたからね。

しかし篠ノ之束が既存の常識を覆したように、閣下も現在の常識を覆そうとしている。確か、どこかの学者か思想家が『歴史は繰り返す』という言葉を残していましたね。まさしくその通りだと言っておきましょう。

さて、『人類宇宙進出計画（クローズプラン）』を進めましょうか。

「そういえばメルツェル。デュノア社の社長が自分の娘をマクシミリアン様の嫁にと言ってきましたよ？　セシリア様と同い年だそうです」

「おやおや。閣下をロリコンにしたてあげたいのでしょうかねぇ。アメリカからも何人か見合い写真が来ています。まぁ、そこは別に急ぐ必要はないのでは？　せめて、そのような事を伝えるのも一段落してからでいいでしょう」

まぁ、その時も決して遠くはない。恐らく、そのクラス対抗戦でしたか？　それが終わった辺りでしょう。その頃には、アームド級は完成していますから、ね。

第16話　兄、交渉する（後書き）

ということで、抱き込みますがフラグは建たなかったです。今のところ千冬にあるのは、ＩＳ陣営の士気低下の役割。まぁ妥当では？

さて、次回からは少しシリアスもお休みしようと思います。とりあえず、シスコン・ブラコンが書ければいいかな？

それと、この小説ではデュノア社社長は「有能なハイエナ」みたいに書いていきます。実は、結構こんなキャラ好きだったりします。

さて、シャルはどうなることやら。つーか、マクシミリアンにフラグ……「キャラ→マクシミリアン」の一方通行でいいかなもう。

それと、マクシミリアンは大抵「マクシミリアン様、閣下、大将、旦那、旅団長」のいずれかで仲間内からは呼ばれています。つーか最初は、「レイス＝メルツェル」と考えていたりしてました。

作者が好きなネクストはアンサング。でも、それと同等にオラクルも好き。好きなキャラは、テルミちゃん、隊長、リリウム、オールドキング。

設定集（前書き）

情報整理も兼ねての設定集です

設定集

マクシミリアン・オルコット

オルコット家の若き当主にして「オルコット・インダストリー」の社長。前世の記憶をいくつか持っており、少なくとも「マクシミリアン・テルミドール」と「マクシミリアン・ジーナス」の記憶を持っている。

イギリス国内ではその手腕やカリスマから「騎士王の再来」とまで言われているが、実際は記憶にある「マクシミリアン・テルミドール」の言動や思考を真似ているだけである。

性格は冷静沈着だが、基本的に言動が舞台役者のように大仰である。後は、たった一人の肉親であるセシリアを溺愛しておりシスコン。でも、「妹は絶対に渡さん！」タイプではない。

恋人などはおらず、また口では「結婚するか」と言っているが実際はそのような感情は薄い。また、現在関係を持っているのはチェルシー、エイ・プール。作者の趣味である。

また、能力により人を差別する男。ただし、能力が低くとも努力する者は評価する。

日本を訪れたときに購入した扇子がお気に入りの品。

束の陰謀なのかは分からないが、束より送られてきたＩＳコアを使ったＩＳを操縦することができるが、本人は武装のデータ取りくらいにしか使っていない。

王虎とは親友？の間柄。彼のパトロンでもある。

彼は現在、「マクロス」による宇宙進出計画『クローズプラン』を始動中。

ネクスト操縦用の強化手術を受けた。ただし、戦うとすれば緊急時

のみ。
搭乗機：ネクストＡＣ『アンサング』、ＶＦシリーズの最新機。

セシリア・オルコット

マクシミリアンの妹。原作とは違い、プライドが高かったりポーズから入ったりするが、傲慢ではないし、男だからと見下すわけでもない。
兄の影響を受けており、能力によって人を区別するが、努力する人はちゃんと評価する。また、ただ与えられるものを享受する事・努力をしない者を嫌う。
また、男性の好きなタイプの基準が兄なのでかなり厳しくチェックする。重度のブラコンである。兄のおみやげは全て大事にとっており、今現在のお気に入りは犬のぬいぐるみ。
現時点で、一夏への感情は「仲の良い男友達」である。これが変化するかは一夏次第。

凰王虎（ファンワンフー）

凰鈴音の兄である。しかし、鈴が日本に両親と共に引っ越してくる際には本国に残っていたため一夏たちとの面識はない。ただし、一

度鈴を尋ねた際に千冬とは話をしたことがある。また、気功により遠当てを使うことができたため束が接触し、その際にＩＳコアをもらう。ただ、コアの状態なのでＩＳ自体は持っていない。多分、マクシミリアンが作る。

世界的に有名なアクションスター。スタントを一切使わずに様々なアクションをするため男性ファンが多いが、二枚目ではないがどこか安心するような顔つきのため女性ファンも多い。ちなみに、自他共に認めるシスコンである。基本的に思考が「仕事＜鈴」である。マクシミリアンが描く「宇宙進出計画」に協力している。ちなみに、ちゃっかりマクシミリアンをパトロンにしている。

その他の設定

1.　ＯＲＣＡ旅団について

所属しているのは、ＡＣｆａに登場したカラード及びＯＲＣＡのメンバー。ただし、転生体などではなく、平行世界の同位体。そのため、全員の性格などが若干変化している。その他にもリストラされた軍人などが所属している『世界最大の私兵集団』でもある。ただし、名義上はイギリス版外人部隊扱い。

2.　コジマ粒子について

有毒性などは原作通り。ただし、その強弱はコジマ粒子の濃度に依

存する。要するにめんつゆを原液でいくか、水で薄めるかである。ゴメン。作者のフロム脳の中ではこうなんだ。

3.　ACのネクストとノーマルについて

とりあえず、「ネクスト＝専用機」「ノーマル＝量産機」ということで一つ。あとは、コジマ技術は後付で。ただし、ネクスト専用。

4.マクシミリアンの持つ「マクロス世界の技術」について

「OTM＝異星人のオーバーテクノロジー」は「マクシミリアン・ジーナス」が知りうるであろう技術のみ。つまり、ゼントラーディ系の兵器の技術は不明、ということで一つ。

5.　ISとAC及びVFシリーズの力関係

性能はISが上。しかし、拡張性や量産性などはAC及びVFシリーズが上。ただし、VFシリーズの巡航速度はIS以上。

第17話（前書き）

朝起きる
←
そういや、あのＩＳ小説って更新されていたっけ？↑お気に入り登録を忘れていた
←
トップページの原作検索から行けばいいだろう
←
一番上にこの小説。アクセス数が４万超え
←
（つД⊂）ゴシゴシ
←
（？・Д・）今日はエイプリルフールじゃないよ？
←
とりあえず、最新作投下するか↑今ここ

第17話

さて、私だ。織斑千冬には現時点でやってもらうことは一切無い。下手に動かそうものなら予測不可能な事態を引き起こすからな。

「しかし……セシリアも頑張っているな。ノブレス・オブリージュの操作もだが、ブルーティアーズの操作も、か。負けていられんな。私も「駄目です」……」

リリウム……私もな？　男だ。戦いたいんだ。

最近、アンサングに乗っていないからストレスが溜まる。いや、一応シミュレーションを使用しているが…やはりGを実際に感じなければ、な。しかし、それすらも最近はリリウムやウィンなどに控えるように言われる。

「立場は理解しているのだが……やはり、私は戦うほうがいいよ」

「駄目、です。マクシミリアン様は戦う必要はない、です。リリウムたちが戦うです」

「……あぁ」

仕方ない。私が死んでもいいようにクローズプランは計画されているが、それでも不確定要素がないとも限らん。自重するか。とりあえず、オールドキングや真改との組み手は続けておくか。最悪、自分で逃げられるくらいは必要だろうし。

「まぁ、それはいい。しかし、千冬。何故、王虎が授業を？　サイン会とかならまだしも」

「いや…簡単にいえば総合学習だ。それに……お前も見ただろう？　山田君の操縦するＩＳの突撃を真っ向から受け止めた奴の力を」

あれは見物だった。地面を削ったが、ＩＳの突撃を止めたのは予想外だったからな。しかし、王虎が授業…まぁ太極拳を教えているし…精神修養などの意味では有効か。

「しかし…千冬。貴様の弟……セシリアに若干近いのではないか？」

「そうか？」

セシリアの横にいる二人の少女。片方はこの前会った篠ノ之箒、もう片方は王虎の妹の鈴音。まぁ、これはいい。だが、その横だな。

織斑一夏……貴様、近くないか？　それと、チラチラセシリアの動きを見過ぎではないか？

「マクシミリアン様…目が怖い、です」

ん？　そうか？　しかし、だ。別に思春期の男だ。そのようなことも理解できるさ。私自身は忙しくてそんな事にかまけている暇はなかったからな。ん？　シタことないのか？だと。悪いが、そのような処理はチェルシーやエイ・プールで済ませている。そんな事は今はどうでもいい。今重要なのは――――。

「とりあえず…『事故』は仕方ないな。そう、『たまたま』持っていた銃が『たまたま』暴発するのも「落ち着いてください閣下」…いつの間にいる？　エイ・プール」

「リリウムから『閣下が暴走しそう』という連絡を昨日受けまして…」

リリウムの方を見ると親指を立ててドヤ顔。一瞬、ドヤ顔が王大人に見えた。やはり、あのご老体の影響を受けているな。というか、王大人よ。孫のようにリリウムを可愛がっているのはいいが……貴様、真顔で「プリンセスメーカーっていいな」というな。あの時の全員の顔を見たのか？　メルツェルが絶句していたのは初めて見たぞ。

「ちなみに、オールドキングはあそこです」

「エイ。私は面倒事は嫌いなのだが……」

「すみません。その……メルツェルが『潜入ならコレが必須らしいぞ？』とダンボールを」

あの馬鹿…。まぁ、潜入ツールを用意したのはいいだろう。だが、ＴＰＯというものがあってだな？

「ねぇ……なんで、屋根の上にダンボールが？　しかも、めっちゃでっかい」

「さぁ……？」

アリーナの屋根にダンボールがあったら駄目だろうに。それに、そのサイズ…絶対中に『リザ』をいれているな？　カサカサと音がしているぞ？　無駄な機能をつけるな。というか脚部を鳥足から多脚に変えたな？　いくらＩＳ技術の運用でパーツ交換が楽になったからと言って、一々無駄な事をするな。

「頭が…「閣下。お薬です」……用意いいな」

「閣下のためならば」

「……そうか」

千冬が頭を抱えているな。安心しろ。私も抱えたい。やはり…色モノ集団だな。

「とりあえず……閣下。メルツェルより護衛を命じられたので、これよりエイ・プール。任務に入ります」

「ああ」

まぁ……オールドキングがいるから外からの攻撃は防げるだろう。ん？　ダン・モロもいる？　あ～……。

「閣下。一応、奴も……リンクスですから」

いや、奴はムードメーカーだろう。性格的に。

ＳＩＤＥ　セシリア

「さぁ！　ということで、太極拳でもやってもらおう！　言っとくが、そこら辺のエクササイズよりキツイからな！」

私たちの前にたつ男の人。有名な映画スターの「王虎」さん。この前友人になった鈴さんのお兄さんなのですが…。

「とりあえず……織斑一夏！　お前には俺が直々に教えてやる……とりあえず、ポン刀一本で渡り合えるくらいには」

「はぁ…いや、今も渡り合えていると思いますけど」

「そりゃ、地面に脚を付けているからだろう？　ＩＳは三次元機動だ。そこを教える。『これ』で」

そういって王虎さんが取り出したのは……あら？　あれって……。

「マックスに作ってもらった特性トレーニングマシン『木人くん』だ。さぁ、戦え！」

木人くん。確か、あれって……最初はただのサンドバック。でも、一定以上のデータ収集を終了すれば、そのデータを使っての組み手になるものでした。

「言っておくが……これは『お前自身』だ」

そう。動きが寸分の狂い無く『相手』の動きになります。つまり、もう一人の自分と戦うことになる。

「あら？　でも、三次元機動って？」

木人くんは組み手用の物。確かに、ブースターが付いているので空中戦も可能ではありますけど…。

「あぁ、そこは二人にこのランドセル型ブースターを…あ」

木人くんにブースターを背負わせて飛ばしたと思ったら爆散しました。え？　欠陥品ですか？

「「「「……」」」」

沈黙が痛いです。お兄様も頭を抱えています。織斑先生は胃を抑えています。

「……さぁ、一夏くん！　行ってみよう！」

「嫌です！」

「兄貴が代わりに乗ってきなさいよ！」

鈴さん。女の子がそんな言葉を使うのはどうかと思いますが……コレばかりは。

お兄様……セシリア、挫けそうで「とりあえず、撃て」え？

「のわぁぁぁ！　マックス！　お前、何撃ってきているんだ！」

『やかましい。大体、そのブースターは一般人には使えん。というか、それはＶＯＢの失敗作だ。それを使うな。それと、お前がすべきことはそれではないだろうが』

エイさんから渡されたであろう拡声器を使って喋っていますけど…さっきの銃撃は誰が？　メイド服のリリウムが胸をはっているのが気になります。背負っているアンチマテリアルライフルにも。というか、そのライフルって人間相手に使えました？　そもそも、それを避けた王虎さんって…。

『いい加減に授業を進めろ。さもなくば……』

「何しやがる！　まさか…鈴をどうにかするつもりか！？」

『いや、興味ない』

「んだとゴラァ！？　鈴に魅力がないというか！」

『……面倒だな。千冬。もう、私の接待はいらん。王虎と変わってくれ』

そうですよね。織斑先生の方がいいです。というか…太極拳をやるのはいいんですけど、やっぱりＩＳの操縦からやった方がいいと思います。

「死にさらせぇ！」

『……リリウム』

いや、だから人間相手にアンチマテリアルライフルを撃つのは……って！

「「「「避けてる！？」」」」

あの…え？　確かに、銃弾を見切ることはできます。でも……えぇ？

その後、なんですが…どこからとも無く男の方が「マクシミリアン。俺も混ぜろ！」と現れました。お兄様は「オールドキング。お前が出てくると大事になるから帰れ」と言っていました。なんでしょうか？

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「しかし…意外と元気でやっているようでなによりだ」

「実際、オルコットは教師からの覚えはいいぞ？」

さて、現在何をしているかというと放課後なのでティータイムだ。
参加メンバーは、私と千冬と山田女史、エイ、リリウムだな。まぁ、後ろ二人は給仕をしているが。

「あの～。そこで袋に詰められているのって……」

王虎だな。まぁ、気にすることもないだろう。こうでもしなければ授業中の教室に突撃していくだろう。

「で、でも…」

こいつにはこのくらいが丁度いい。公私混同するような奴は駄目だ。

「（閣下もあんまり人の事言えないような気がしますけど）」

「（マクシミリアン様の場合は、ストレスが溜めないようにすれば

いいです。最近はシミュレーションに乗る時間がなかったからストレスが溜まっています。チェルシーも困ってました）」

「（一つ聞きたいんだが…何故、奴は戦いたがる？　お前らのような腕のたつ部下がいるだろうに）」

「（閣下曰く「ただ座っているだけでは人は着いてこない」だそうです）」

「（でも、それって……危ないんじゃないですか？）」

「（危ない、です。だから、リリウムたちが常についているです）」

ん？　なにやら色々言われているような気がする。私は普通だぞ？

「そう思ってる時点で俺と同類だっての」

やかましい。

第17話（後書き）

とりあえず、エイプーの出番は多くなるよ。オールドキングもね。

次回は、ちょっとくどくなるかも。

それと、息抜きにこんな感じのネタを書いてみた。

「オリ主と五反田弾が主人公。オリ主はヴァイサーガ、弾はラーズアングリフぽいＩＳを使って暴れ回る」

まぁ、どうなるか。所詮は妄想だね。

第18話　兄、語る

「さて、何故私が会社経営をするようになったかというと――」

やあ、私だ。私は今講演中だ。何故、こんなことになったかというと「せっかく、大企業の社長がいるのだからためになる話でも聞かせてくれ」と依頼されたからだ。まあ、経済関連のことを話せばいいだろう。思想などを話せば私の喋り方の問題で刷り込みされる可能性があるからな。やめておこう。　今更じゃないか？とか思う人間は黙っておけ。そもそも、ある程度自由に行動できる大人と未だ親の庇護下にいる子供と比べるな。ちなみに、講演は2，3年生対象だ。1年は講演より実習だろう。

「――と、こう言った感じにまずは社内を掌握した。まずは、足元を固めることだ――」

とりあえず、両親が暗殺されたかも知れないなどという事は伏せておこう。知らせることでもないからな。しかし、その暗殺犯だが…数日前にセーヌ川に死体で上がっていた。どこかのマフィアの庇護下に入っていたと思ったんだが…ヘマをして捨てられたか？

「そして、足元を固めた後は――」

講演が終わった後、質問を受ける状態になったが、ひと通り見る限り私の話は結構好評だ。ところどころに、面白いと思われる話をいれておいたのがよかったか？

「あの、一つ質問なんですが…一体どうやって会社を今のように大きくしたんですか？　お年は織斑先生などと同い年と聞いたのですが――」

ふむ。テルミドールの言動や根回しの方法を真似たのだが……さすがに言うわけにもいかないか。

「先程も言ったかと思うが、まずはオルコット家を固めた。良くも悪くも私の家はそれなりに有名だった。今でこそ実力主義を謳っている私だが、あの頃はそのような事を言うことも無理だったな。君たちも知っておいたほうがいい。世の中先立つ物は金だ」

世知辛いし、夢も何も無いが結局はそこに行き着く。

「あまり言いたくはないし、夢を壊したくはないのだが…例え君たちがどれだけ優れていようとも権力者には勝てない。まぁ、だから私は完全実力主義を社訓として掲げたわけだが」

だが、それでも社内だけだ。外に出ればやはり、だ。例え、宇宙進

出をしようとも、移民船団を創り上げようともそれぞれの船団のトップには現在の世界を牛耳る連中のような者が座るのだろう。だが、せめてそれに対抗するだけの力を持つ者がいれば……いや、今言っても仕方が無いか。

「まぁ、私から言えるのは努力を忘れるなということだな。自分の意見を通したいなら偉くなれ。だが、政治の場は伏魔殿、混沌と呼ばれる。気を抜かないことだ」

「では、次の質問なのですが……王虎さんとはどのような縁で？」

む。やっと楽な質問がきたな。やはり休暇中はできるだけ堅い質問はやめてもらいたい。

「まぁ、簡単にいえば私がスカウトした。調べたところ彼はどこの事務所にも所属していなかったからな」

「え？　じゃあ、どうやって仲良くなったんですか？」

さすがに夜通し妹談義をしたからとは言えんな。主にセシリアの今後で。

「……まぁ、互いに妹がいたからな。それで話があったというのも

あるな」

「「「「へ～。やっぱり家族って凄いんだな～」」」」

さて、夜通し妹談義。しかも内容は「うちの妹にはこんな服が似合うはず！」という会話を大の大人が二人っきりで叫んでいたのは言わずにおくか。言ったら色々終わるな。

ＳＩＤＥ　セシリア

屈辱です。

「セシリアって料理下手ね」

「ちょっ…鈴。もう少し優しく……」

「いや、一夏。でもこれは少し…。食べられないほどではないから余計に、だな」

まさか味付けがダメダメだったなんて……。

「お兄様は…美味しそうに食べていました」

「……セシリア様。マクシミリアン様はセシリア様が作ったものなら無条件で『美味しい物』と思い込むです」

「私はセシリア様の作られた料理なら何でも食べられます！」

リリウムとセレンが慰めていますが……挫けそうです。あと、セレンの言葉は何か裏がありそうです。それとリリウム。お兄様はそこまでじゃないと思います。

セレンはリリウムが猫のように持ってきました。

「でも、中華料理店の娘としてこれは、ね」

そりゃあ、プロの料理を毎日食べているであろう鈴さんからすればそう思われますよね。あ、ちなみに実家ではテーブルマナーを学ぶため以外では豪勢な料理は出ません。お兄様曰く「飽きる」だそうです。私は一週間で飽きました。

「とにかく、精進あるのみね」

鈴さんは励ましてくれますが…自信がないです。前途多難です。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「閣下。本国のメルツェルとレイスから連絡です。アームド級が八割方完成したと」

「そうか。なら、そろそろマクロス級の開発に踏み切るか。重力制御装置の状態は？」

与えられた部屋でエイや合流したチェルシーから連絡を受けているが、ようやくか。ちなみに王虎は撮影だ。私にもオファーが来ていたがキャンセルだ。

「ご主人様。ＶＦ－１のセレモニーですが……本当にご自身が乗られるのですか？」

「ああ。『少しの訓練しか積んでいない大企業の社長』が操縦出来れば盛り上がるだろう？」

実際は少しどころではないがな。オールドキングやネームレスなどには勝てないが、それなりに動かせる。

「一応、オールドキングやネームレス、ＣＵＢＥに周囲の警戒をさせるつもりですがご自愛ください。閣下がいなくなると世界は混乱します」

今私が居なくなる程度で混乱するなら、ここまで世界は変わらなかったさ。あの宣戦布告は言ってしまえば流水の中に石を投げただけのもの。その石が流水の方向を変えるか否かはこれから決まる。

「さて、もう少し休暇を満喫するつもりだったが…本国に帰るぞ」

「クラス対抗戦はご覧にならないのですか？」

「残念だが、仕事が優先だ――――ん？」

メルツェルから通信？

『閣下。お久しぶりです。閣下におきましては「用件は？」――――社交辞令くらい言わせてもらってもいいでしょうに。まあ、いいです。篠ノ之束を追跡していた奴から篠ノ之束がなにやら動きを見せているようです。しかし、『偶然』なのですがこちらに戻っていたようだくためのチャーター機が故障してしまいました。なので閣下にはそちらに残っていただきます。何かあれば事なので人員を送ります』

「ふむ。偶然、か。それは怖いな。チェルシー、どれくらいかかるかな？」

「恐らく、クラス対抗戦後になると思われます」

それは大変だ。ん？　白々しいと？　自覚しているさ。

第１８話　兄、語る（後書き）

なんとか、ネットも元通りになりました。ご迷惑をおかけしました。

一応、マクロスは両腕がアームドタイプの劇場版です。

ネタ倉庫の方に新作を一個あげたのでよろしければ見てください。

第19話　兄たち、話す

「……」

「……」

やあ、私だ。今の状況を手短に話そう。織斑一夏たちが私の目の前にいる、以上。

「…で？　私に聞きたいことでもあるのかな？」

「あ、はい」

ふむ。何を聞きたいのか分からんが……もし、セシリア関係なら無視するわけにもいかないか。

「その「ん、少し待ってくれ」え？」

「私だ――――何？　そうか……あぁ。お前に任せる」

連絡を入れてきたのはメルツェル。どうやらアメリカで大統領をトップとする「ＶＦ・ＡＣ派」と副大統領をトップとする「ＩＳ派」の政争が表面化してきたらしい。ちなみに、この二つの派閥は簡単にいえば「ＩＳは軍事兵器から完全にスポーツ用に切り替え、その代わりとしてＶＦ・ＡＣを導入して宇宙開発を行う」か否かで争っている。普通に考えれば「ＶＦ・ＡＣ派」の主張通りにすればいいのだろうが、まあそれをするには利権を得すぎたのだ。それに「ＩＳ派」の場合は派閥に女性運動家などが大量に居るからな今更引込みが付かなくなったのもある。

まぁ、その関係で大統領の命令で速やかにＶＦ－１を販売してくれと連絡があったらしい。まあ、もう少し待ってもらおう。やはり、性能を分かりやすく伝えるにはそれなりの舞台が必要だからな。

「さて、何の話だったかな？」

「あ～えっと…「ウチの兄貴、ご迷惑をかけていませんか？」」

ふむ、迷惑か。奴と一緒にいて起こったことは……特に無いな。うん。１週間ほど部屋にこもって妹談義をしたが大した問題も起こっていない。

「閣下……」

ん？　エイ、どうした？　仕事は全て終わらせておいたから問題はなかろう。そこが問題だと？　分からんな。

「あ～この人ウチの兄貴と同類だわ」

「え？　鈴、どういう事だ？　この人と王虎さんが同類って」

「幸いセシリアがいないから言っておくけど……お兄さん。セシリアに恋人ができたらどうします？」

「……本来なら殺したいが……まぁ、セシリアが選んだなら……祝福……を」

「閣下。お顔とお声がひきつっています」

「ウチの兄貴より理性的だけど本質はシスコンね。つーか、兄貴より有能だと思うから余計に性質が悪いわ」

シスコンで何が悪い？　というか、チェルシーたちと同じことを言うのだな。

ＳＩＤＥ　王虎

「何？　マックスの事を？」

俺の前に道は無い……じゃねぇ。ボケるのはここまでにしておいて、俺の前にはマックスの妹のセシリアと篠ノ之束の妹の篠ノ之箒がいる。

そして聞かれたのはマックスの生活状況。やっぱ妹なら気になるのかね？　マイスイートエンジェル鈴はそんなことあんまり聞いてくれないのに。

「はい。知っているだけでかまいませんので。私がいないあいだのことを教えて欲しいのです」

ん～。一応、俺にも『常識』はあるんだよ？　そりゃあ、鈴が代表候補生になったときにちょっかいだそうとした軍の高官相手に脅しをかけたけど『常識』はあるんだよ？　だから、さすがに言ってはいけない事も理解している。例えるならマックスの部屋の隠し部屋にある『生まれてから撮られている』セシリアちゃんの写真集とか。

さすがに言えないよな～。言ったらあいつのイメージが崩れるような気がしてならない。

「そうだな～。俺も撮影とかで一緒にいる時間は少なかったけど…結構好き勝手やっていたと思うぞ？」

好き勝手やって『宣戦布告』だもんなぁ。しかも、イギリスという国家を完全に手中に入れてフランスも大企業を次々と吸収しているからな。まぁ、アイツが言っていた「宇宙進出するには組織を一本化させる必要がある」という事も納得できるし…仕方ないのかねぇ。

「まぁ、互いに妹は大事だからな。マックスも君のことは気にかけていたよ？」

うん。ＩＳ学園に潜入させてる部下からのセシリアちゃんの映像を高画質ＨＤに録画して編集するくらい。

「そうなんですか…」

う〜む。シスコン・ブラコンたちの常識として他人の妹・弟に対して親愛の情を必要以上に持ってはいけないのだが……かーいなー♪

『王虎……殺すぞ？』

……あるぇー？　今、ものすごい殺気を当てられたような気がするよ〜？

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

王虎よ。セシリアを一番に考えるのは私だけの特権だ。それを邪魔するのであれば、ＯＲＣＡ旅団『ある意味最強』である有澤を送るぞ？　かつてイギリスの森林を焼け野原にした面制圧能力を存分に味合わせてやろう。

「さて、話を戻そうか。それで？」

「あ……えっと、何故その……ＶＦシリーズとかを作ったんですか？」

「あの宣言を見ているのならあれのとおりだ。人が性別で差別されることはあってはならない。能力で区別されるべきだと常々思っていたのでな」

大体、男に生まれるか女に生まれるかなんぞ選べるはずもない。だというのに、と言っておこう。それに、性別で分けられているのならばその種族に未来はない。簡単な事だ。なのにそれを理解していない連中が多すぎる。

「さて、私はこれから用事があるのでここで失礼させてもらうが……織斑一夏。少し耳をかせ」

「え？　は、はい」

織斑一夏の耳元に口を近づけただ一言告げる。

「セシリアを射止めたいなら……八方美人はやめることだな」

「え？」

誰にでも優しい。確かに美徳だ。それに、それを実行に移しているらしい織斑一夏は若年ながら大した人間だろう。だが、それではな。他人の感情の機微に聡くなくてはな。セシリアがこれから相手にするであろう連中は笑いながら後ろでにナイフを持っているような連中だからな。現時点では、この少年は認めん。決してセシリアが居なくなるのが嫌なわけではないぞ？

「閣下、思考がダダ漏れです」

「お前にしか漏れていないならそれでよしだ」

さて、もうすぐ対抗戦らしいが……どんなことが起こるのかねぇ？

まぁ、何が起ころうと『有効活用』させてもらうとするか。

第１９話　兄たち、話す（後書き）

シスコンの常識云々は友人が言っていたことです。

そして、ネタでこんなのを考えてみた

「ＩＳ×武装錬金」

つまりは、ＩＳの武装が全て武装錬金……有り得ねーな。でも、零落白夜とソードサムライＸの特性が似ていたからね……。気が向いたらネタ倉庫にあげます。

次回はいよいよゴーレム事件ですよー。つくづく思ったこと。自分は日常パートに入れば一気に執筆ペースが落ちること。うぅむ。

第２０話　ＡＣ対ＩＳ

「しかし、一回戦からこの対戦カードとはな。千冬、仕組んだりしていないのか？」

「していない…と言いたいが、こうもおあつらえ向きの対戦カードなら私でもそう思ってしまう」

「フッフッフ。織斑一夏には悪いが、鈴が勝つ」

シスコンは置いておいて。さて、今日はクラス対抗戦だ。まぁ、束が動きを見せているようだから、周囲には光学迷彩を搭載したオールドキングの『リザ』とエイの『ヴェーロノーク』を配置している。呼び寄せたリリウムとチェルシーは私の横で護衛。こういう感じだな。千冬に護衛？　奴はこの後管制室に引っ込むぞ？　王虎？　奴に護衛がいるとでも？

「しかし…鈴音には分が悪いな。衝撃砲だったか？　『不可視』と銘打ってはいるが実際は一部の空間が陽炎の様に揺らいでいる。そこを突けば「甘い甘い。ウチの鈴がそんなに簡単に悟らせると思うか？　一応、本国にいた頃はちょくちょく俺が色々教えていたんだぞ？」ふむ。そうか、なら織斑一夏も分が悪いということか」

それに鈴音が使うＩＳは中国が『燃費の良さ』などをコンセプトに創り上げた機体。そう簡単には潰れん、か。白式は確かに高性能だが…燃費の悪さがなぁ。

「さて、そろそろ決着も――――」

織斑一夏が衝撃砲を掻い潜って懐に入り込みなにやら青春ぽい事を言って、それに王虎が切れかかり王虎を蹴り飛ばし、そして戦闘が仕切り直しになったと同時にアリーナ内に警報が響き渡った。それと同時にアリーナ内に一つの影が現れた。

「……これか」

砂埃の中から現れたのは漆黒のＩＳ。まるでゴリラを思わせるような意匠。恐らくこれがメルツェルの報告にあった『篠ノ之束の動き』だろうな。

「遮断シールドも誤作動……いや、ハッキングか？」

『ああ。マクシミリアン。お前は逃げろ「シールドを破壊しようか？」何？』

救助に行きたいが、シールドのせいで行けないと言ったところか。ならちょうどいい。

「まぁ、私に任せておけ」

「ご主人様。どうぞ」

チェルシーから渡されたのは一つの通信機。それに、まだ政府の高官も避難しきっていない上に、生徒たちも大量に残っている。デモンストレーションとしては最高の舞台だ。これが束の仕込みのおかげかどうかは分からないが、存分に利用させてもらう。

「私だ。オールドキング、エイ。やれ」

『『了解』』

通信が切れたと同時にシールドに向かって大量のミサイルが降り注ぐ。迷彩を解除して現れたのは2機のＡＣ。

「あれは……ＡＣだと？」

「いかにも。まぁ、一応私の護衛ですよ。ＩＳで襲撃されないとも

限らないのでね」

各国政府の高官もいた事が役に立ったな。精精、本国にＡＣの性能を伝えてもらうとするか。まぁ、そのためには生き残ってもらう必要があるから逃げてもらうがな。

「エイ。お前はシールドを破れ。オールドキングはシールドが破れれば、学園の教師と共にフィールド内に入れ」

エイは武装の全てをミサイル系で統一している。その分赤貧生活を送っているらしいがな。ちなみに、弾薬代などはこっちから出しているんだが……エイの場合はその量が多すぎて間に合わないというのが現状だ。その結果社員食堂で丼に海苔を乗せただけの食事を取っている姿が目撃されている。まぁ、さすがにそれはどうかということで私の護衛をさせて食費などに割り当てているのだが…。一応、言っておくがそれを盾に関係を持っているわけではないからな？

『了解。これより攻撃に移ります』

本来なら拠点攻撃などは有澤などを呼ぶのが正しいが、奴の場合は『有澤重工社長』という顔もあるためそちらの方を優先してもらっている。そのため、それなりの面制圧能力を持ち後方支援に優れているエイを布陣した。

『す、すごい……遮断シールドが減衰していっています！』

山田君。ウチの兵器はそれなりに強いのだよ。遮断シールドの構成を調べた結果強固なエネルギー結界のようなものと判明した。そのため、エネルギー減衰効果のあるミサイルを『ヴェーロノーク』に搭載したからな。

「織斑一夏、凰鈴音。聞こえるな？　あと少しで援軍が来る……それまでもたせろ」

「「え！？」」

同時に返事か…仲のいいことで。ん？　あれはセシリアたちか。

「お兄様！　私たちにできることは！」

「ない。そもそもこれは通常の状態ではない。素人の上に学生のお前たちが出来ることなど…邪魔にならないようにしておくだけだ」

セシリアも箒も絶句しているが…事実だ。むしろ、ＩＳという力を使えるだけ『自分にもできることがある』などと勘違いする人間が多い気がするな。まあいい。セシリアもまだ学ぶことはあるか。

『閣下。もう少しでシールドを一時破壊できます』

「了解した。千冬、聞いたとおりだ。シールド消滅と同時にそちらの戦力を――」

「ご主人様！」

ちっ狙いは私か？　まさか減衰したとはいえ遮断シールドごとぶち抜くとはな。

「リリウム、チェルシー。セシリアたちを連れて逃げろ。幸い、観客席の避難は進んでいる。なんとか逃げきる！」

その言葉と共に観客席を走るが…強化手術を受けておいてよかったと思うよ。ちなみに私の強化手術は他のリンクスたちとは違い、主に身体機能の強化手術を受けている。これを受けなければ『アンサング』もＶＦシリーズも調達しないと言われた。うぅむ。

ＳＩＤＥ　千冬

「な……アンノウンのビーム照射を避けているだと……」

「嘘…ですよね？　ＩＳのハイパーセンサーなどで強化されているならまだしも…」

モニターにはコートの裾をはためかせながら客席を走るマクシミリアンの姿が映っている。幸いにも、アンノウンＩＳの標的はマクシミリアンに移っているらしくシールドを突き破りながらマクシミリアンを狙っている。

「一夏、凰！　狙いはマクシミリアンの方に向いている。お前たちはその場から離れろ！」

マクシミリアンの部下の攻撃でシールドが減衰している今なら零落白夜でシールドに穴を開けてそこから逃げることができるはず。

『ＩＳ学園の皆さ～ん。ＯＲＣＡ旅団ですよ～？』

減衰したシールドを無理やり突き破ってきたのは先程まで沈黙していたマクシミリアンのもう一人の部下。確か名前はオールドキング。

奴はマクシミリアンとアンノウンの間に入るとなにやら緑色の光を発した。その光はアンノウンのビーム照射を拡散させて無力化した。

『さて…そこのガキども。さっさと逃げろ。そんでマクシミリアン。お前もさっさと引っ込め。死んでもらっては困る』

「ふっ。だろうな…オールドキング。やりすぎるな？」

マクシミリアンはサングラスを指で押し上げるとコートを翻してメイドに通信機を手渡した。実に絵になる光景なのだが…先程までの動きを観ている私としては納得できない。あれだけ動けるなら自分でも解決できるはずでは？

「アンノウンには悪いが……私の仕事は戦闘ではないのでな」

なるほど、な。奴はあの『宣戦布告』や社風などから分かるとおり合理主義者。つまりはこれも予定通りということか。

『あいむしんかーとぅーとぅーとぅとぅー♪』

オールドキングと呼ばれた男が乗るＡＣは地面を滑るように動き回りながらアンノウンに弾丸を浴びせている。相手の攻撃は避けるか緑色の光で拡散させている。しかも何かの歌を口ずさむことから余

裕ということなのだろう。

「凄い、です」

山田君も絶句している。恐らく、この映像を見ている者全てがそう思っているはずだ。

『ＩＳは世界最強の機動兵器』などと称したのは誰だったか。実際、白騎士事件の際に私は戦闘機を大量に撃墜した。その結果としてそのような呼ばれ方がされた。しかし、今眼の前にある光景はなんだ？

『ふぅむ。ＩＳと実戦を行うのは初めてだが……まぁＰＡありならそこまで苦じゃないな。これなら…そこそこの軍人でも互角に戦うことはできるか？』

外部マイクからそのような声が聞こえる。その内容は衝撃的なもの。つまりは、ＡＣに乗っているのが軍人などの訓練を受けたものならＩＳと戦い、勝つことも可能ということ。

「あれがオルコット・インダストリーの兵器か。しかも乗る人間は訓練を受けさせれば誰でも乗れる、か。素晴らしい」

そんなつぶやきをマイクが拾っていた。確か今回の対抗戦には外部

から数人の賓客を招いていた。その中の一人なのだろう。

「まさか……これが狙いか？」

この映像は恐らく外部にも流れるはず。そうなればＡＣの性能の高さが知らされる。結果として反ＩＳを掲げる連中はこぞってマクシミリアンにつく。これが狙い？

「狙いとは失礼な。イレギュラーを活用させてもらっただけだ。そもそも、妹の成長を見るための試合に細工などするものか」

そう言ってメイドと少女を引き連れて部屋に張ってきたマクシミリアン。その顔は苦笑していた。

「千冬。気をつけろ……私の情報ではこの乱入事件…束が絡んでいるらしい」

「どういう事だ？」

耳元でささやいた言葉。それは私を絶句させるには充分なもの。どういう事だと聞き返す前にマクシミリアンはモニターの中でＩＳを破壊してコアを取り出しているオールドキングに指示を出していた。

「エイはそのまま周囲の警戒だ。オールドキング、それらすべて回収してここまで持ってこい」

マクシミリアン。お前は何を知っているんだ？　そして、何を狙っているんだ？

ＳＩＤＥ　一夏

「終わった……の？」

隣にいる鈴の声がどこか遠いものに感じる。突然現れたＩＳ。そして、それに対して攻撃をしかけていたけど、すぐに標的は別の人間に移った。そして、今度は落ちてきた緑色のロボットが圧倒的な力

を持ってＩＳを無力化した。

「なんだよ…これ」

ＩＳには敵わず危うくやられそうになった。そんな中セシリアのお兄さんは生身でビーム照射から逃げた。そして自分の部下らしき人を使ってＩＳを倒した。他人任せとかじゃない。あの人は言い切った。

『――――私の仕事は戦闘ではないのでな』

あの人は多分誰かに情けなくはないのかって言われてもこう言うんだろうな。

「お兄様は相変わらずすごい方です」

いつの間にか傍にいたセシリアが寂しそうな笑顔で呟く。その横で箒は思いつめたような顔をしている。鈴も悔しそうな顔をしている。

「やっぱりまだ私ではお兄様のお力になることはできないようですね」

ＩＳという力を持っていても結局は子供ということなんだろうな。

「強く…なりたいなぁ」

気づけばそんな言葉が口から出ていた。多分、この場にいる全員が同じ気持ちだったはず。

「強くなる、ねぇ。はてさて『強くなる』とはどんな感じなのかな？」

全員が振り向くとそこには仁王立ちで笑う王虎さんと後ろでサングラスを押し上げているマクシミリアンさんがいた。

ＳＩＤＥ　？？

「それでは貴女にはＩＳ学園へと転校してもらいます」

「はい。それで…メルツェルさん。ボクは一体何をすればいいんでしょうか？」

イギリスの海上に浮かぶオルコット・インダストリー本社にしてＯＲＣＡ旅団の本拠であるアヴァロンの一室で一組の男女が会話をしていた。

「いえ特にすることはないです。強いて言うなら……ＩＳ学園で学生生活をしっかりと楽しんできてください、ですね」

男はメルツェル。彼はそう言ってニコリと笑った。

「まぁ、体には気をつけてください。それとイレギュラーな事態があれば報告を」

「はい」

そして少女はシャルロット・デュノア。様々な事情から『マクシミリアンの婚約者候補』の一人である。

第２０話　ＡＣ対ＩＳ（後書き）

とりあえず、ゴーレム１戦終了。

ＡＣ・ＶＦ・ＩＳの能力は三すくみ状態。どれが勝ってもおかしくはない。ただし、コスト的にはＶＦやＡＣが優れている。

そして、シャルが登場。婚約者候補なのは父親の行動の結果。

第２１話　兄、暗躍する

私だ。前回の終わりに織斑一夏たちが強くなりたいと言っていたが…明確な目標がなければ意味が無い。さて、それを聞いた王虎が撮影が終わった後に一週間のオフを利用して全員を鍛えると告げたが私は参加せずに本国に戻っている途中だ。

「しかし……心配だな。チェルシー辺りを残しておくべきだったか？」

「セレンがいるから大丈夫でしょう」

チェルシーよ。そうは言うが……王虎がどうも信用できん。特に、数日前に「フルメタル・ジャケット」を見ていたのが。

「マクシミリアン様。それよりも今は二日後の『ＶＦ－１バルキリー』のセレモニーの事を考えたほうがいいです」

「そういえばそれが目的だったな。英国空軍は？」

「保有ＩＳ全機、陸軍や海軍も巻き込んで軽く一個師団規模は用意

したらしいです」

量産体制も整い、正式に『ＶＦ－１バルキリー』を発表することになった。では、問題だ。性能を分かりやすく伝えるためにはどうすればいいか。まぁ、戦闘だな。

セレモニーは私が操縦するＳ型とＩＳ英国代表。Ｊ型Ａ型の混成中隊と保有ＩＳ及び陸軍海軍戦力といった所。まぁ勝とうが負けようがＶＦ－１の性能の高さは証明される。そして、『アヴァロン』ではすでに様々なＶＦシリーズが作成されておりＶＦ－１１サンダーボルトの試作型が開発されている。本命であるマクロスもアームド級が完成しており本体のほうも順調に製造されている。もうすぐ…『クローズプラン』が完成する。

「ご主人様。まもなく『アヴァロン』です」

「さて…では始めるとしよう。人類の新たな一歩を」

ＳＩＤＥ　千冬

「さぁ！　今回は真面目に行くぜい！　とりあえず、お前ら全員精神修養からだ！　どいつもこいつも自分がどれだけ危険なのか理解していない！」

そう言って叫ぶのは凰王虎。本来なら私の授業だったのだが、まぁこれもいいかと思い変わった。実際、奴は中国では武術家としても高名らしいのでもってこいなのだろうがどうも不安だ。ちなみに、一夏たちだけに教えるのかと思ったら一年全クラス対象にした。やりすぎではないか？

「とりあえずテメェら！　まだガキのくせに自分より年食ってる連中を見下してんじゃねぇ！　テメェらが今いるこの場所はテメェらだけの力で手にいれたわけじゃねぇだろうが！　それが理解出来ないなら［自主規制］で［自主規制］でもしておけ！」

奴は海兵隊か？　ものすごく情操教育には悪そうなんだが…。

「大体、男より強いだぁ？　じゃあ、テメェら！　今すぐ拳銃持ってどっかの事務所にカチコミかけてこいや！　女が強いのはＩＳを扱える女のみ！　んなことも分からんようなら［自主規制］して［自主規制］で［自主規制］しておけ！」

「ね、ねぇ。凰さん。あれって…」

「兄貴は基本的に優しいけどスイッチが入るとああなる。私も拳法を教えてもらっていたときはずっとあんな感じ」

「ゴラァ！　無駄口叩くなゴミ虫共が！」

なんというか……若干名頬を染めている奴がいるのが不安だ。マクシミリアン。お前、これ知っていて逃げたな？

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「当然だ」

「閣下？」

「いや、なんでもない」

さて、電波を拾ったことは軽くスルーするとして今私はイギリスの裏路地にいる。護衛はエイのみ。周りにはゴロツキばかり。はっきり言えば『裏の世界』だ。そのようなところに何故私がいるかというと…。

「『マーリン』はいるか？」

「おやおやオルコットの若様ではありませんか。何か御用ですかな？」

とある古ぼけた占い館。その中に尋ね人がいる。『魔術師（マーリン）』と呼ばれている６０過ぎの老人。金さえ積めばホームレスの夕食からロー

マ法王の私生活まで調べ上げる『裏』では有名な情報屋でもある。では、何をしに来たかというと。

「『亡国機業』について調べて欲しい。金は言い値で払う。他に入用ならばその都度払おう」

「ほう？　随分と太っ腹ですねぇ。あの亡霊共に何か恨みでも？」

「『クローズプラン』を邪魔されるわけにはいかないのでな。それに、その口ぶりでは知っているようだな？」

「長く生きていると、ね。なるほどねぇ。いいでしょう。では、前金で二万ドルを」

日本円にしておよそ１５０万か。金額提示を聞いたエイが素早く小切手に金額を記入し、マーリンに渡す。さて、用件は果たしたからさっさと帰るか。

「閣下。お下がりください」

占い館を出た直後にエイに庇われた。ふむ……最近は表に出ることも多くなってきたから少なくなっていたのだが……やはり暗殺者は

くるのかね？

「……恨まれているのは知っていたが……自分より年下の少女に恨まれているとは初めて知ったな」

現れたのは顔の上半分をバイザーらしきもので隠したセシリアと同年程度の少女。さて、どこのエージェントか。可能性があるのは中国・ロシア辺りだが……以前やりあったシチリアマフィアという可能性もある。ん？　こうして考えるとよく生きているな私は。

「気は進まないけど……死ね」

その言葉が響いた瞬間にエイがコルトガバメントとナイフを取り出す。うむ。行動が素早い人間は好きだ。しかし――。

「ふむ……別に暗殺は今更なのだがな。せめて名前くらいは聞かせてもらえないものか。名無しなのは部下の一人で間に合っている」

「……エム」

コードネームか。まぁ、偽名であろうとなかろうと呼び方があるならいいのだが、エムか。エム……エム……とんと聞き覚えがないな。まぁ、エージェントならそうなのだろうが。

「閣下に触れさせると思うか？」

「邪魔するなら殺す」

いや、私を放っておいてヒートアップしないでもらいたい。しかし……いくら訓練を受けているとはいえ強化手術を受けているエイと互角とはエムという少女…伸び代があるな。

「しかし…私が戦えないと思っているのは駄目だな」

「な……」

「閣下！」

一番の実力者がターゲットの護衛を引きつけておいて不意打ち。まぁ、悪くはない作戦だ。ただ、やるなら遠距離からの狙撃にしておくべきだったな。

「これでも鍛えているのでね？　そう簡単には死なないさ」

しかも、背後からナイフで襲いかかるなど……読みやすいにも程がある。それならまだ手榴弾（パイナップル）を持って自爆の方が確実に殺れる。

「チッ……。展開」

「『サイレントゼフィルス』か。なるほど…亡国機業か」

少し前にイギリスの研究所から奪取されたＩＳ『サイレントゼフィルス』。イギリスは今でこそＩＳ・ＡＣ・ＶＦの三つを並行して運用しているが、奪取された当時はまだＩＳが優勢だった。そして、『サイレントゼフィルス』は第二期ＢＴ兵器搭載ＩＳ。まぁ、何が言いたいかというと『サイレントゼフィルス』の性能は『ノブレスオブリージュ』よりも上だということだ。

「しかし…これは少し分が悪いか？」

一応、『オルコット・インダストリー』にＩＳは2機ある。一つは束からもらったコア。もう一つは研究用として政府から借り受けたコア。しかし、『ＩＳ』として運用しているというよりもどちらも研究用。または、絶対防御を利用した武装テストなどに使用しているため戦闘能力は高いが、実用的ではない。

「閣下。私が囮になりますのでお逃げください」

「どうやらそれも無理なようだ」

増援か。確かあれは…アメリカから強奪されたという『アラクネ』だったか？　亡国機業とはどのような組織なのだろうな？　もし利害が一致するなら……。

「死ねやァ！」

「悪いが目的を果たすまでは死ぬわけにはいかんな」

さて……どうするべきか。せめて騒ぎを聞きつけて誰か駆けつけてくればいいのだが。時間稼ぎくらいはするか。

「君たちは何故攻撃してくるのか…教えてはくれないのかな？」

「ハッ、時間稼ぎか？」

「まあ、そう取られても仕方なかも知れないな。だが、分からないのだよ。私の目的は知っているだろう？　それが気にいらない連中はいる。だが、おまえたちの目的はいまいち読めん」

束は別だ。アイツの場合は千冬たちがいるおかげで行動が読みやすい。だが、亡国機業は全く分からん。まだ、私のみに攻撃を仕掛けているのなら「ＩＳの利権を守るための傭兵部隊」などと推測することもできるのだがな。しかし、どうするか…。

「とりあえず…命令だからな。死んでもらうぜ！」

さすがに逃げ切れんか？「伏せてください！」お？

「なんだと！？」

私に迫ってきた『アラクネ』に向かって緑色の粒子が光のように降り注ぐ……何？　ＩＳの防御フィールドが減衰していくだと？　まさか――。

「マクシミリアンさん！　ご無事ですか！？」

シャルロット・デュノアと『ラファール・リヴァイヴ・カスタム』か。何故ここに？

「えっと『マーリン』って人からメルツェルさん宛に映像が届いたので…。それと、メルツェルさんが『試作劣化コジマ弾』のテストもついでにと言ったので……」

そういえばここは奴のテリトリーだったな。メルツェルに連絡が行くのもうなずける。しかも、開発中の新兵器も持ち出すとは……。

「まあいい。これでなんとか行けるか？」

「はい。シャルロットが『オーメル・ライール』を持ってきてくれたため行けます」

『オーメル・ライール』は先ほど説明した我が社が所有するＩＳコアの内、新兵器のテスト用などに使用しているＩＳだ。まぁ、これで形成は逆転した。『劣化コジマ弾』が完成しているならシールドも問題ない。さて――――。

「さて、ここはお互いのために引き分けにしておいたほうがいいのではないかな？」

「チッ……上司からの帰還命令が出たしな……気に食わねぇが退いてやる」

「そうか。では、その上司に伝えておいてくれ。我々には交渉の準備がある、とな」

「……ハッ。それよかあの緑色の鳥の脚みてぇなＡＣに乗ってる奴に伝えておけ！　必ず殺してやるってな！」

「……伝えておこう」

離脱していく２機のＩＳを見ながらふと思う。亡国機業の目的は本当になんなのだろうかと。

「しかし…オールドキングに対抗意識を持っているのか。やめておけばいいものを」

オールドキングは危険人物以外の何者でもない。奴が私の下にいるのも奴の目的と私のやり方が一致しているからにすぎん。あの女……オールドキングを『男だから』などと侮っていれば……クレイドルの連中の二の舞だろうな。

「……エイ。『マーリン』に追加で１０万支払ってこい」

さて、エイが戻ってきたらさっさと帰るとするか。しかし、シャルロットは日本に向かっていたと思ったのだが…何故に？

「えっと…一応、『婚約者候補』だから甘えてきなさいってメルツ

ェルさんが」

「……高笑いしていそうだな」

第２１話　兄、暗躍する（後書き）

オリキャラが出てきたけど気にしないでください。出番はここだけでしょうし。

そして、新武装「劣化コジマ弾」……言わずとも意味は分かるな？

そういう事だ！

そして、みんな（？）大好きシャルロットが登場。ちなみに、ＩＳがカスタム？じゃないのは強化途中だから。日本に行く頃には完成しているはず。

作者は、期末考査の時期なので更新は来週の水曜以降となるでしょう。

ふふっ、俺……このテストが終わったらエイプ―とセッシーと会長と簪ちゃんと一緒に海に行くんだ……ふふっ。

第２２話　イレギュラー

ＳＩＤＥ　王虎

今回は俺が主役だ。鍛えるぜ～？　鍛えるぜ～？　鍛えまくるぜ～？

「んで？　一夏はなんで強くなりたいんだ？　言っちゃあ悪いが…今のお前はそこいらの男たちと比べると強いと思うぜ？」

ＩＳは性能的にはＡＣやＶＦを総合的に上回る。巡航速度などではＶＦに負け、量産性や汎用性ではＡＣに負けている。でも、その他は結構上回っていると言ってもいい。制限ありとはいえそれを扱える一夏は強いと言っていい。

「でも…この前の正体不明のＩＳが乱入してきたときに何もできなかったんだ」

「……下手に戦えるっていうのも問題かも知れねぇな。一夏、お前は……いや、お前だけじゃない。鈴やセシリアちゃんたちもだ。まだ子供だ。子どもが命がけで戦っちゃあ駄目なんだよ。太平洋戦争末期に日本が学徒動員をしただろ？　その結果はどうだ？　まぁ、元々欧米に国力で負けていたって言うのもあるけど…散々なものだ

ったはずだ」

「でも！」

んー。そういや、一夏って昔誘拐されていたな。もしかしてそれで「強くならなきゃ」とかいうトラウマでもあるのか？　鈴の気持ちに気づかないのも恋愛よりも強くなることに思考がいってるからか？

「んー。じゃあ、なんで強くなりたいかを考えてこい。あ、言っておくけど「何もできなかったから」とかいう理由じゃ駄目だぞ？　ちゃんと『明確』な答えをな？　相談するのもありだ」

さて、どんな答えを出すのかな～？

ＳＩＤＥ　一夏

なんで強くなりたい、か。だって、強くならないと大事な人を守れないじゃないか。俺が誘拐された時も…俺が弱かったからなのに。

「何をお一人で考え込んでおられますの？」

「またウチのバカ兄貴に何か言われたの？」

「どうしたんだ？」

セシリアに鈴、箒か。三人も俺より強いはず。どうすれば強くなれるか聞いてみるかなぁ。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「輸出用ＶＦ・ＡＣの開発も完了した。後は、セレモニーを行えば全世界の変革が再び行われる」

すでにマクロスも形になってきた。宇宙進出ももはや夢物語ではない。そう、何も問題はない。例え、妨害があろうとも止められんよ。

「閣下。少しお耳に入れておきたいことが」

「何だ？」

それは、タクラマカン砂漠から１機のＩＳが飛び立ち消息をくらませたという報告。しかも、明日はイギリスでＶＦ―１のお披露目が行われる。

「……亡国機業か束か。まぁいい。とにかくセレモニーは明日だ。警備を固めておけ」

まったく……だが、何故か気にかかる。亡国機業にしろ束にしろ…１機だけでどうにか出来るのか？　とにかく警備を固めるしか無いか。

ＳＩＤＥ　束

それはちょっとした興味心からやってしまったこと。かつて使用されていた『ブサイク』なシステム『ＶＴシステム』。あれは今のところちーちゃんのデータをトレースしているシステムだった。だから『ＩＳのコアネットワークを利用して全てのＩＳ操縦者の動き』を集めてみた。そして、それを１機の新たに作ったＩＳにインストールした。それだけじゃつまらないから『保存されていた人間の脳細胞』を埋め込んでみた。そしたら、何が悪かったのか『暴走』した。それだけならいつものこと。破壊するなり沈黙化させればいいと思っていた。でも――――。

『ＩＳモＡＣモＶＦモイレギュラーダ。イレギュラーハ消エナケレバナラナイ』

適当な人間を選んだのが悪かったのかも知れない。もしかしたら、私やマクシミリアンに潰された奴かも知れない。そんな小物の思考パターンを使用してしまったのが失敗だったかも知れない。暴走したソレは近くにあった『ゴーレム』などを取り込んでどこかへ飛び去っていった。

「……失敗だったな～。まさか、小物にあれだけの力があったなんて……。やっぱり人間って恨みとかが強いんだねぇ」

さて、どうしようか？　正直に言うとマクシミリアンが宇宙進出しようがどうでもいい。宇宙進出してもちーちゃんたちが無事ならそれでいいし。

「まぁ、いろいろ利用させてもらおうっと。でも、一応マクシミリアンには連絡いれておいたほうがいいかなぁ」

色々大変だよ。

ＳＩＤＥ　？？

憎い――――殺したい――――認められない――――許せない――――。

マクシミリアン・オルコットが憎い。若造のくせに世界を牛耳ろうとしている。あいつがいなければ今頃オルコット・インダストリーは俺のものだったはず。なのに、奴のせいでその野望も潰えた。そして、俺がオルコット夫妻を殺害したことを突き止められてツテを使ってマフィアに匿ってもらっていたけどそれも長くは続かず、臓器売買のために殺された。その時に俺は『死んだ』のだ。しかし、

『生き返った』のだ。あの篠ノ之束が偶然にも俺を生き返らせたのだ。しかも、ＩＳのコアと同化する形で！　コアにはなにやら少女らしき『意思』があったが所詮は子供の『意思』だ。簡単にねじ伏せることができた。

『ＩＳモＡＣモＶＦモ必要ナイ。ソウダ…私ガ世界ヲ制スルニ相応シイノダ』

対抗するだけの力は手に入れた。この体はまだまだ進化する。確かに俺は奴らと比べると小物かもしれない。だが、『小物』と侮っているからこそ『付け入る隙がある』のだ。これで――――。

ＳＩＤＥ　セシリア

「なぁ、どうすれば強くなれるかな？」

一夏さんのその問いは、私たちにも答えづらいものでした。その問いは人それぞれと言えます。だから、参考にはできないと思いますけど…。

「アタシは…まぁ、兄貴を独り立ちさせるため」

鈴さんはお兄さんを妹離れさせるために強くなるのだとか。これは以前、二人の時に聞いたのですが、鈴さんはご両親が離婚された際に家出をしたらしいのです。それでその時に鈴さんのお世話をお兄さんが行ったそうです。元々、日本に引っ越す前からシスコンの気はあったようですが、その家出の際に覚醒したらしく、それから鈴さんの世話をやくようになったようです。要するに、私はもう大丈夫だから自分の夢でも追いかけてくれということらしいです。

「私は…まだ分からない」

箒さんの場合は、立ち位置が微妙な部分もあるので仕方ないかも知れません。

「一夏さん。別に急ぐ必要はないと思いますよ？　それに強くなる理由なんて人それぞれです。確か、一夏さんは織斑先生を安心させるために家事を頑張ったんですよね？　それだって『強くなる』って事だと思いますよ？」

多分、王虎さんの問答はこういう感じなんじゃないでしょうか？
あせらずにしっかりと一歩ずつ強くなれって事だと思います。

「そうなの…かな」

「ええ。それに一夏さんも強いじゃないですか。私と戦ったとき諦めなかったでしょう？　諦めない人は強いんですよ？」

鈴さんも「あ～ウチの兄貴もあきらめ悪いわ」とぼやいています。
どうしましょう。哀愁が漂っています。そんな話をしていると硬い表情の織斑先生と山田先生が走ってきました。なんでしょう？

「オルコット。落ち着いて良く聞け…先ほど、イギリスで行われていたオルコット・インダストリーの新製品『ＶＦ－１バルキリー』の披露セレモニーの会場に所属不明のＩＳが乱入し……マクシミリアンが重症を負い、現在集中治療室だ」

「……え？」

「ちょっ――――セシリー――――」

その時、足元が崩れたような気がしました。

第２２話　イレギュラー（後書き）

なんか「ナインボール」らしき敵が出てきましたが、本文の通り小物です。ただし、しつこい上に若干強化されています。例えるならば、仮面ライダーインペラーとか種運命のジブリールとかそこら辺。

第２３話　兄、消える

その施設は異様な空気を纏っていた。イギリスの海に存在するオルコット・インダストリー本社にして『ＯＲＣＡ旅団』の本拠地である巨大要塞（アームズフォート）『スピリットオブ・マザー・ウィル』通称『アヴァロン』の航空機発着デッキには武装したＡＣや拠点兵器として開発した『モンスター』を始めとするデストロイドが厳戒態勢で周囲を警戒していた。

そして『アヴァロン』の最深部――海底に広がる『ギガベース』と称されるこれまた巨大な要塞の医療ブロックはピリピリとした空気と慌ただしい空気が混ざり合って混沌と化していた。

「しかし…ネームレスには感謝だな。危うく死ぬところだった」

そして、その医療ブロックの中でも厳重に警備されている一室で腕を包帯で吊りながらもベッドの上に座るマクシミリアンと、各々好きなようにくつろいでいるレイスやメルツェルなどの上層部メンバーがいた。

「篠ノ之束からの連絡が入って幸いでしたね。だからこそ『ご主人様が重症を負う』偽装ができました」

そう言って紅茶を入れるレイスに全員が頷く。そして、思い出すのは数時間前。

それは、イギリスのある軍基地で行われたセレモニー。敷地に広がるのは、ファイター形態の正式量産型ＶＦ－１Ａバルキリー２５機。そして、マシンガンやライフルといった平均的な武装を装備している正式量産型ノーマルＡＣ『アルジーヌ』２５機。合計５０機の兵器がそこに鎮座していた。

「では、これよりデモンストレーションを行わせていただこう」

そして、マイクから響いたのはこの場所の支配者であるマクシミリアンの声。その言葉と共に各国のスカウト空軍を集めたＶＦ専属パイロット集団『スカル師団』とノーマルＡＣを操る『レイヴン師団』の選抜パイロットたちがそれぞれの愛機に火を入れた。そして人間が準備運動をするように機体を足踏みさせたり、可変翼を動かしている。人種も性別もバラバラな連中だが気持ちはたしかに一つだっ

た。

「ハッハッハッハ！　よう……青空！　戻ってきたぜ！」

「戦車はまだ終わらんよ。そう…これからも進化していくのだからな！」

「やった……ママ！　見てくれ！　ボクはママを守れるまでに強くなったんだ！」

それはパイロットたちからすれば待ち望んだ瞬間。ある者は再び空を飛ぶことのできる歓喜。ある者は旧時代の兵器と蔑まれた戦車の復活への歓喜、ある者は夢にまで見た『ロボット』に乗れるという歓喜。そして、会場に招かれた各国の高官やＩＳ委員会の委員なども様々な反応を示していた。

「ふむ……ＶＦの方が国土が広い我が国には必要か」

「私のところは山岳地帯なのでＡＣの多脚型でしたかな？　それが最も運用に適していますな」

「……悔しいが認めるしか無いのか」

反応は様々だったが、総じてＯＲＣＡ旅団の技術を認める形になった。そして、次々と本国や組織の上司などに連絡を入れてＶＦやＡＣの配備を行うように進言していた。

「……これで世界は再び変わる。まずは軍事パワーバランスをもとに戻「閣下。先ほど『アヴァロン』より通達が。篠ノ之束よりＩＳが暴走し、こちらに向かってきているそうです」」

メルツェルから齎された情報。それは、タクラマカン砂漠で反応したＩＳの事。マクシミリアンはその原因は束辺りにあると思っていたのでそこまで驚いてはいない。むしろ、連絡を入れてきたことに驚いていた。

「ふむ……リンクスは出撃していないのか？」

「いえ。一応、ダン・モロがセレモニーの中に紛れて、ＣＵＢＥがフラジールの機動テストも兼ねて出撃しています。よって、先ほどフラジールには周囲の警戒を行うように命令しておきました」

「そうか。とりあえずは警戒を続けろ」

仮にリンクスが警戒に出ているとはいえＩＳによる奇襲は察知するのは至難の業でもある。理由としては、いきなり目の前でＩＳを展

開して襲撃や技術力のある組織ならばＩＳのレーダー反応を鳥などに偽装することも可能なのだ。故に受身にまわるしか無い。

「メルツェル。最優先させるのはゲストの安全だ」

「存じておりますが…一応、ホワイト・グリントを傍に――」

メルツェルの言葉と共にマクシミリアンの隣にはネームレスがついた。『煽動家』テルミドールの記憶があるマクシミリアンとしては、傍にＳＰなどを置くのをあまり好まない。煽動家に必要なのは『傲慢なほどの自信』であるとマクシミリアンは考えている。

「まぁ、それだけでは駄目なのだろうがな」

そして、セレモニーもある程度進行した中、ついにそれはやってきた。躊躇も何もない凄まじい速度で会場に降り立った赤と黒で彩られた鋼。

「馬鹿な……ナインボールだと!?」

それは様々なマクシミリアンの記憶の中に欠片だけ存在した記憶。世界の均衡を崩す可能性のあるイレギュラーを排除するために作られた『最強の無人機』ナインボール。

『消エロ！　イレギュラァァァァァァァァァァ！』

人工音声の雄叫びと共に搭載されていた火器を全方位に無作為に発射するＩＳ。ゲストの方にはギリギリで反応したダン・モロがＰＡを前方に展開することで難を逃れたが、マクシミリアンのほうはそうはいかなかった。しかし、ネームレスにより突き飛ばされたおかげでミサイルの爆風や熱だけの被害で済んだ。

「ナインボール……まさか私のように？　それとも……誰かが創り上げたのか？　目的はは……我らの技術か？」

ナインボールはテルミドールの記憶にはなく、『レイヴン』の一人の記憶にあった『最強』の１機。そして、その存在と驚異を知っているからこそ読み違えてしまった。ＩＳの狙いがマクシミリアンだということに。

『貴様ガイナケレバァァァァァァァァァァ！』

二発目はＡＣの体当たりで弾き飛ばされたため不発と終わり、不利を悟ったのかＩＳは踵を返して逃げ出した。しかし、空中に逃げたことで射線を気にしなくても良くなったスカル師団とレイヴン師団の一斉掃射を受けている。防御フィールドの恩恵で直接的なダメージは受けていないようだが、それも何時まで持つことか。エネルギ

ーが無限に生成されるとは言え、それが＝無敵ではない。粗末な装備だと排熱不良も起こすし、機体が持つかも怪しいのだ。

『オノレェェェェェェ！』

ＩＳは捨て台詞を吐いて速度をあげようとした。しかし――。

「私だ……逃がすな」

『お任せください。そのためのフラジールです』

駆けつけたチェルシーに手当を受けながら命令を下したマクシミリアン。そして、命令を受けたフラジールからは逃げられなかった。

『……おや。逃げられましたか』

劣化コジマ弾頭によるシールド減衰効果とミサイルの併用で直接ダメージを入れたが、頭部ユニットだけがもの凄いスピードで離脱していった。逃げられたのだ。

「そして、解析の結果……継ぎ接ぎだらけのＩＳだったわけか」

「ええ。しかも、篠ノ之束の情報だと他の機械などを取り込み進化していくそうですよ」

紅茶に口をつけ眉を顰めるマクシミリアン。決して紅茶がまずいわけではないのだが、余計なことをする天災に辟易しているのは事実なので仕方がない。

「まぁいい。レイス、バルキリーとアルジーヌの販売は？」

「全て滞り無く。あのＩＳ乱入事件で一定の戦闘能力を見せたのが効いたようですね。あれは完全に敵でしたから」

むしろ、マクシミリアンが持つレイレナードやオーメル、ＧＡなどの技術を流用した兵器やシステムの能力を知らしめる形になっていた。

「しかし…これからどうなされるので？　医者曰く、数週間で完治するようですが」

ネームレスに突き飛ばされたとは言え、爆風や熱風、その他もろもろの瓦礫などで負傷したマクシミリアン。怪我自体は強化手術を受けていたこともあり、すぐに完治するものだったが、過労の影響なのか内臓などに異常が見つかった。内臓とかを強化しなかったのかと思ったりもしたが、そこは手術した連中の意図があったのだろう。あまり強化するのはどうかとか。

「ふむ……せっかくだ。私はしばらく療養することにしよう。世界がどう動くのかをゆっくり見てみたい」

「了解しました」

元々、自分がいなくなっても動けるように仕込んでいたのだ。この際じっくりと世界情勢を確認したい。そう思い命令を下した。

「ですが、またあのＩＳが出てくるかも知れませんので、常に護衛は置いてもらいます」

「まぁ、それは当然だな…誰かＩＳ学園に行き、セシリアに説明を頼む」

「でしたら…ちょうど「あ、ボクが行きます」…シャルロットが編入するので彼女に頼みましょう」

一応はマクシミリアンの婚約者候補にいるシャルロット。しかも、リリウムと同じように王大人に可愛がられているため、この場にいても何も誰も言わない。というか、むしろ王大人には実の祖父のようになついている。

「それでは頼むか。シャルロット、セシリアには心配は要らないと伝えておいてくれ」

「はい。任せてください！」

こうして、イレギュラーによりマクシミリアンは一時表舞台から姿を消す。しかし、それは決して計画の中止につながるものではなかった。

「ところで閣下。シャルちゃんがお嬢様に伝えるのはいいんですけど…婚約者候補って知られたら怒るんじゃないですか？」

「……あ」

エイの言葉に思い出したかのような声を上げるマクシミリアン。気が緩み過ぎである。

第２３話　兄、消える（後書き）

デストロイドも作られています。そりゃあ、作らないとね。

劣化ナインボールは多分この後もちょくちょく出てきます。ナインボールの恐ろしさは性能もだけど、無人機だからこその量産性によるしつこさだと思います。つっても、中の人は小物ですけどね。

マクシミリアンは重症ということで引っ込みましたが、多分裏に徹すると思います。しばらくはセシリアサイドですね。

そして、作者は月曜から宮城県にボランティアとして派遣されますので、更新は恐らくお盆以降になると思います。いや、こっちに戻って来たら投降するかも知れませんが。とりあえず、次回もよろしくお願いします。

第２４話　妹、怒る（前書き）

キャラ崩壊注意

第２４話　妹、怒る

マクシミリアンが重症を負い絶対安静という情報が世界中に知らされた。しかし、それを信じたのはそれこそ権謀術数に疎くまた、その経験も少ないＩＳ委員会の女性委員や頑なまでに男を見下している女性や、ＶＦ・ＡＣなどの台頭により失われるであろう自分の利権を守ろうと必死になっている政治家などである。

「マクシミリアンが、ねぇ。ハッ、アイツのことだ。影武者だろう」

いまや世界を牛耳ることも可能なほどに巨大化したオルコット・インダストリー。それを創り上げた男が簡単に倒れるはずもない。王虎は撮影中のハリウッドでニュースを聞き、そう結論づけた。

「う～ん。まぁ、大丈夫か。それよりＩＳを乗っ取るなんて……でも、小物っぽいしなぁ。いずれマクシミリアンに潰されるかなぁ」

原因を作った天災は大して気にせずに再び潜伏した。

そして、マクシミリアンの最愛の妹であるセシリアは――――。

「……よく考えればお兄様がそう簡単にやられるはずもありません

わ」

「「「「え？」」」」

アリーナで倒れたセシリアはどこからとも無く現れたセレンにより部屋まで移送され現在に至る。ちなみに、一夏たちも心配して見舞いに来ていた。

「お兄様は昔から仕事を抜け出すのが得意でしたし、例え倒れても業務に支障がないように取り計らっていましたから。それに『意識不明の重体』ではなく『重症』です。恐らく影から世界を見るとかそんなことを考えているはずです」

正解である。さすがは妹というべきか。セシリアの発言にセレンは大きく頷いている。最もセレンはセシリアの言葉に疑問を挟まないのであまりあてにはできないが、彼女の姉からそのような報告をうけている。

「で、でも……怪我したのは確かだろ？　心配じゃないのか？」

共に肉親が姉兄しかいない、だからもし千冬が同じような目に合えば冷静でいられる自信がない一夏はセシリアにそう聞いてみた。しかし、セシリアは微笑みながらしっかりと告げた。

「お兄様が私を残して死ぬはずがありません」

それは一切の迷いもなく言い切った言葉。兄が――仲間内で重度のシスコンとまで称される兄が自分を残して死ぬはずがない。最初こそ動揺してしまったが、落ち着いて考えればそう思える。

「だから心配はいりません」

「えっと……ここがＩＳ学園であってるのかな？」

翌日、ＩＳ学園の校門で金髪の少女が唸っている。ふと校門の横を見ると二人の男性が作業着で校門のペンキを塗り直していた。

「……つーか任務から戻ってきて休む暇なくペンキ塗りって……ひどくね？　これって業者に頼むべき仕事じゃね？」

「……所詮、私たちは雇用主の命令には逆らえないんですよ。ちなみに、業者に委託する場合は日本政府などからの機密情報防止のための調査がその会社に入ります。そんなことにお金をかけるよりは、『更識』所属の私たちに命令したほうが早いんですよ」

某人外予備軍の二人である。しかし、シャルロットは無視して構内に入っていった。溢れ出る欝オーラにドン引きしたのだ。

「え!?　出番終わり!?　名前も出てないよ!?」

「仕方ないでしょうね～。ま、次の出番に期待しましょう。あるかどうかは分かりませんが」

その通りである。あと、出番があるかどうかは……未定である。

ＳＩＤＥ　セシリア

「え～っと突然なんですが、転校生がやってきました。フランスか

ら来られたシャルロット・デュノアさんです」

先日は動揺してしまって不甲斐ない姿を見せてしまいましたがもう大丈夫です。そもそもお兄様が私を残して死ぬはずはありません。

「えっと…セシリアさん…だったよね？　ちょっと後で話したいことがあるんだけど…」

「え？　あ…えっとデュノアさんでしたか？　なんでしょう？」

「うん…ちょっと大事な話。でも、もうすぐ先生が来るらしいから後でね？」

織斑先生が所用で遅れるため少しだけ話しかけてきたシャルロットさん。大事な話ってなんでしょうか？　でも、ものすごく嫌な予感もするんです。私の勘がそう告げています。

「えっと…ここじゃまずいかも知れないからちょっと外に出ようよ」

「ええ…かまいませんけど…」

そして休み時間。一夏さんたちにも話しておいたほうがいいかもしれないとシャルロットさんが告げていつものメンバーと織斑先生が屋上へと連れてこられました。ところでセレンはどこにいるんでしょうか？

SIDE　セレン

「姉さん。シャルロット・デュノアが来たんだけど」

私は姉である霞スミカに連絡を入れる。姉と言っても血は繋がっていない。まだ研究所にいた頃にお世話してくれていたから姉さんって呼んでいるだけ。

『む。そうか…メルツェルの予想より早かったな』

姉さんの後ろではチェスをしているマクシミリアン様とメルツェル。一応、偽装の事はオルコット・インダストリーの人間なら全員知っていること。まぁ一般の社員とかは『休暇』を取っていると思っているけど。

『デュノアはセシリア様にマクシミリアン様の近況を報告するために接触したのだ。それと、デュノアは実質ＯＲＣＡだから心配はいらん』

まぁ、マクシミリアン様の襲撃事件もあったからセシリア様の護衛強化の役割も担っているんだろう…。そりゃあ、私だって万能じゃないから一人じゃ無理だけど…。

『セシリア様を取られるから気に入らないのか？　心配するな。セシリア様はそんなかたではないだろう？　それにデュノアは一応、マクシミリアン様の婚約者候補なのだか――「それはどういう事ですのー！？」……今のって』

「……セシリア様。多分、婚約者候補とか言うのを喋ったんじゃない？」

あ。マクシミリアン様が脂汗を流し始めた。本当にセシリア様の話になると一気にカリスマが崩れるなぁ。

『衛生兵（メディック）！　マクシミリアン様が血を吐いた！　すぐに来い！』

『メルツェル…私は……セシリアに何といえばいい？　あの子に「

妹と同じ年の子がいいんですか！？　お兄様はロリコンですか！？」
と言われたら生きて行く自信がない』

『冷静に話しあえば大丈夫です。それにマクシミリアン様にそんな
気持ちはないことは分かってくれるはずです』

大変だなぁ。

『セレン。お前の方からもフォローを入れてやってくれ。マクシミ
リアン様は激務から解放されていろんな意味でゆっくりしていたの
だ』

「うん」

そう言って通信は切れたけど…最後の一瞬に映っていたのはシスコ
ンを拗らせてカリスマがカリスマ（笑）になっていたマクシミリア
ン様だった。さっさと復活してくれないかなぁ。

ＳＩＤＥ　シャルロット

「えっと…まずマクシミリアン様は悠々自適な病人生活を送っています。本人曰く長期休暇らしいです」

とりあえずセシリアさんとかにマクシミリアン様の近況を報告するために呼び出した。メルツェルさんからはセシリアさんの友人とかにも話してもいいとか言っていたから連れてきたけど…織斑先生がほっとしているのが印象的だったなぁ。

「やっぱり、ですか。お兄様はただでは起きない方ですから」

「というか、偽装工作って……やっぱ凄いんだなぁ」

織斑君が感心した声をあげる。簡単に言うけどそれが通用するのは政治とかに慣れていない人たちだけ。政治の場に長く居る老獪な人たちとか、若くしてその場に上り詰めた『能力を持つ』人とかには通用しないはず。だから多分この偽装は『マクシミリアンが表立って行動することをやめた』という意味にも取れる。だから、牽制の意味も持っているはず。といっても、ボクがどうこうする話じゃないんだけど。

「そういや兄貴も「どうせ影武者とか用意したんじゃねぇの？」とか電話で言っていたような…」

「しかし、それを実行出来るだけの力を持っているのは事実だな」

王虎さんの妹の鈴音さんと箒さんが話をしているけど…実を言うと織斑先生がボクを見る目が怖い。もしかして婚約者候補とか言うのがバレた？　マクシミリアン様はそんな気はないし、ボクも今のところそんな気は無いんだけど…というか、一応ボクは『人身御供』としてＯＲＣＡに居ることになっているし。勿論、そんな扱いは受けていないけど。

「さっき『様』づけしていたが…ＯＲＣＡに入ったのか？」

「え、ええ。一応…」

ヤバい…疑ってる。そういえばメルツェルさんが言っていたっけ。

『織斑千冬はマクシミリアン様を憎からず思っている。理由？　それは織斑千冬が自分の身を犠牲に弟の保護を言ったのだが、それをマクシミリアン様が袖にしたからだ。それで女のプライドに火がついたのではないかな？』

――って。要するに、「奴を絶対に振り向かせてやる！」ってこと？　大丈夫。メルツェルさんとかにポーカーフェイスのやり方とか教えてもらったから！　予想外の質問をされなければ大丈夫

「あ、そういえば兄貴が「シャルロット・デュノアって女の子がそっちに行くらしいけどマックスの婚約者候補らしいぞ？」って言ってた」

「予想外のところからキター！」

「それはどういう事ですのー！？」

「…詳しく話してもらおうか？」

アワワワ…二人とも目が笑っていないよぉ。ていうか、他の三人避難しているし！

「……そういやセシリアってブラコンだったなぁ」

「……というか、織斑先生も怒っているぞ？」

「あり？　なんかマズった？」

マズってるよー！　鈴音のバカー！　ちっパイ！

「……セシリアー。兄貴曰く、その子結構嬉しがっていたらしいよー？」

「へー……そうですか」

にゃー！　心読まれたー！

第２４話　妹、怒る（後書き）

ということで、宮城から戻ってまいりました。シグマです。やっぱり、テレビで見るのと実際に見るのとでは色々違います。とても良い経験になりました。

さて、話は変わって第２４話です。しばらくはセシリアたちの視点が多くなります。ラウラさんは次回登場かな？

セレンの姉は霞スミカ。よし、これでおｋ。

一応、この小説の終わりどころが作者の中でみえてきました。まぁ、元々宇宙進出を目的に書き始めましたからね。でも、まだ暫く続くという。

それと、ネタ倉庫の方もＩＳ小説を一個ネタ投下したのでよければどうぞ。

次回、シャルロットに忍び寄るブラコンの魔の手！　そして、マクシミリアンはロリコンフラグを折ることができるのか！　乞うご期待！

第２５話　妹、落ち着く

ＳＩＤＥ　王虎

いやー。シャルちゃんがマックスの婚約者候補ってのを鈴に話さなかったほうが良かったかなぁ？　でも、そのほうが面白そうだしなぁ……。ま、いいか。

「王虎さーん。そろそろ休憩終わりますー」

「あ、はーい」

とりあえず、あとで鈴に電話してどうなったか聞いてみよー。

SIDE　一夏

織斑一夏ですが、屋上の空気が最悪です。二人の虎に一匹の子犬が囲まれている。喩えるならそんな感じ。

「いや、一夏。冷静になっている場合ではないと思うのだが……」

箒さん。もう少し現実逃避させてください。あの二人の雰囲気がめっちゃ怖いんだもん！

「まぁ、気持ちはわかるが…ところで鈴は何をしているんだ？」

「動画をとって兄貴に送信。兄貴が「絶対修羅場が起こるから後で見せて！」って言ってたし」

「お前も大概ブラコンだな」

ちなみに俺はシスコンです。でも、千冬姉もそろそろ自分の幸せを見つけてもいいと思い始めた今日この頃。弾にそのことを言ってみたら――――。

『まぁ、お前にも好きな女の子ができたんだ。その分成長したんだろうよ』

という言葉が帰ってきた。ちなみに弾もそんな人が欲しいらしい。同性の俺から見てもすごくいい奴だから心配しなくてもその内できると思うけどなぁ。そう言ったら殴られた。解せぬ。

「とりあえずそろそろなだめたほうがいいんじゃないか？」

あ～。休み時間も終わるしそれもそうか。でも、どうやってなだめようか。こういう時に弾がいれば上手く場を収束させることができるんだろうけどなぁ。

「どうするか…鈴。任せた」

「え？　アタシ！？」

「まぁ、お前が余計に混乱させたせいでもあるし…」

そうだよ。シャルが生まれたての子鹿のように震えているじゃないか。しっかし、セシリアの髪が逆立っているんだけど……物理法則とかどこ行ったんだ？　つーか、そんなことより。

「あの～二人とも。そろそろいいんじゃないでしょうか？」

敬語です。え？　もっと強気で行け？　んじゃあ、聞くが――。

「なんですか？　それよりももう少しこの泥棒猫とお話をしないといけないのです」

「少し待っていろ一夏。なぁに…すぐに終わるさ」

めっちゃいい笑顔で鬼も裸足で逃げ出すような修羅相手に敬語を使うなと？　そう言うのかお前らは。ていうか、セシリアはともかく千冬姉って本気でマクシミリアンさんに惚れてんの？　とりあえず、マクシミリアンさんには今度問いただないといけないな。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「……なんだろうか……すごく…まずい気がするのだが」

私だ。あの後なんとか復活したぞ。何時までもボケキャラでいるのは似合わないからな。

「しかし…ここまで体が弱っていたとは。やはり定期的に休暇は取らなければならんか」

「…閣下の場合はそれだけではないと思いますが」

シスコンだから、とでも言いたいのか？　まぁ、そこは置いておこう。

「それより…工作員が送ってきたこの…ドイツの精鋭部隊の隊長がＩＳ学園に転入というのは？」

ドイツのＩＳ精鋭部隊『黒ウサギ』の隊長が近々ＩＳ学園へと転入するという情報を得たのは数時間前。

「目的は…やはり織斑一夏か？」

「もしくは…セシリア様でしょうねぇ」

メルツェルはため息を吐く。何故か？　それは、ドイツ軍が送ったこの少女に問題がある。

「試験管ベイビーか……大丈夫なのか？　色々と」

「生まれ自体は問題ないようです。ただ…どうも精神的に未熟なようで」

情報では、千冬を崇拝しているらしくそれにより若干のトラブルがありえるそうだ。特に弟である織斑一夏には並々ならぬ敵愾心を持っているらしい。問題を起こすのは確実だ。

「まぁ、こちらとしては問題を起こしてくれたほうが助かるな」

「ご尤もで」

そうすればドイツもこちらに頭が上がらなくなるからな。

「でも、それでセシリア様に被害が行けば？」

「セレンとシャルロットがいるから大丈夫だろう。それに…そうなればなれば で余計にこちらに頭が上がらなくなるだけだ」

このように考えてしまう自分が嫌でもある。あぁ、愛しいセシリア。お前は今何をしているんだ？

ＳＩＤＥ　セシリア

「ぴぃぃぃぃぃ！」

お仕置きしていますが何か？　あ、ちなみに現在放課後です。ええ。ちなみにシャルロットは私と同室でした。え？　元から居た方はどうなったかって？

「……ふむふむ。なるほど…ああいう風に攻めるわけね～。いや～参考になるわ～。さすがセレブ」

なにやらメモっていましたが…あれが俗にいう『同人作家』という奴ですか？　とても顔が生き生きしています。ちなみに、隣にはセレンがいるらしいです。そこにこの方は移動することになるようです。

「さて…お兄様の婚約者候補ということですが…きっちりと説明していただきます」

「あうあうあう。えっと……その……」

言い難い話のようですね。まあ、私も少し暴走しすぎましたね。

「あ。もしかしてアタシがいたら話しづらい？　なら、ちょっと友達のところで書いてくるぜい！　多分、今日は帰って来ないよ～！」

なんというか…勘が鋭いのか、それとも欲望に忠実なのかわからない人ですね。

「さて……お話ししていただけますか？」

「えっと……その……ボクがマクシミリアン様の婚約者候補になっ

たのは……政略結婚のためなんです」

「……そう、ですか」

これは……シャルロットに謝らなければならないようですね。

第２５話　妹、落ち着く（後書き）

ここのセシリアは悪いことをしたらきちんと謝れる子。

さて、このままだと次回でシャルロットの身の上話をするのでしょうが…どうしようか？

第２６話　思い、錯綜する（前書き）

タイトルびみょー

第２６話　思い、錯綜する

ＳＩＤＥ　セシリア

本当に私はまだまだ未熟者のようですね。一時の感情に身を任せて暴走するなんて。でも言い訳させていただくならそのような報告をしてくださらなかったお兄様にも問題があると思うのです。まぁ、それはともかく。

「あの…？」

「ごめんなさい」

「…え？」

「……よく考えれば分かることでしたから」

「あ……えっと……」

本当に私は未熟です。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「――――とまぁ、シャルロット・デュノアに関してはこんなところだな」

『……そうか』

ふむ、千冬から連絡がきてシャルロットに関して詳しく聞かせろと言われたが…一体どうしたんだ？

『いや……年甲斐もなくというか……教師のくせにというか……』

「……まぁ、詳しくは聞かないが」

どうせ変に暴走したのだろう。思うに…千冬も束も精神年齢と肉体

年齢が合致していないように感じるのだが？　シスコン・ブラコンに関しては私も同類なのでそこら辺の言及は避けるが、それを抜きにしても精神的には思春期の少女と変わらんような気がする。千冬に関しては背伸びをしている少女にしか見えない。やはり、人生経験の違いか？　それとも――――まぁ、いいか。しかし、今回は責任が私にもあるため強くは言えない。

「とにかく、彼女に対しては気をかけてやってくれ。こちらでも部下にフォローをさせていたが…『親に売られた』のには変わらんからな」

『ああ』

まったく…いくら愛人の子とはいえ、そして自身の会社を守るためとは言え、子供を売るかね普通。　まぁ、その手段を選ばないハイエナのおかげでフランスを手中に収めることができたから構わんが。

「千冬。私は子供たちを政争の道具にするつもりはない。そしてなにより…子供たちを世界を変えるための道具にするつもりもない」

束は織斑姉弟と自身の妹を使って世界を変えようとしているはずだ。別に構わん。ただ、私のやり方とは違っているだけだ。私は世界を再び変える。しかし、その中心にいるのはセシリアや織斑一夏たちではない。この私だ。世界を変えた責任も、恨みも、全て背負う。

「まぁ、私の言葉などどうでもいい。シャルロットの事、頼むぞ」

『……ああ』

通信を切る間際の顔がなんとも言えんな。まぁ、千冬には悪いがそのような些事にかまっている暇はない。

「レイス。世界はどうだ？」

「パワーバランスは徐々に男女均等になっております。いえ、実質は男性の方が強いですね。元々の軍人としてのノウハウがある分、といったところでしょうか」

……呼んでおいてなんだが、こいつは気配がなさすぎるような気がする。あれか？　名は体を表すを地で行っているのか？　まぁ……いいか。

「しかし、それで再び男尊女卑になれば泥沼だな」

「さすがに同じ轍を踏む事はないでしょう」

「そうだといいがね。しかし、ずっとアヴァロンの中というのも退屈だな。ここはやはり日本に「駄目です」……」

一応、アヴァロンの中に「サナトリウム」という名目で森林公園などを作っているが、やはり外に出たいのだ。引きこもりにはあまり成りたくはないのだよ。

ＳＩＤＥ　千冬

『――私は子供たちを政争の道具にするつもりはない。そしてなにより…子供たちを世界を変えるための道具にするつもりもない』

マクシミリアンが告げた言葉。これを聞いたとき、私は逃げ出した

かった。理由はどうあれ結果として私は自分より歳若い少女、そして弟を政争の道具にしてしまった。どのような理由があろうと、子供を巻き込んだのには変わらない。

マクシミリアンや王虎と会ってからずっと思っていることがある。あの二人は私や束よりもずっと大人だ。

王虎は普段はシスコンのトラブルメーカーで奴が銀幕スターとして有名になる前に会った時も妹絡みで色々あった。しかし、妹が両親の離婚で混乱していたときにたった一人で助けていた。その際に、下手をすれば自分の職を失うところだったらしい。しかし「兄貴が先に生まれてくるのは後に生まれてくる弟・妹を守るためだ。だから全てを失うことになろうとも俺は鈴の為にやるさ」と言ってその後も色々と便宜を図っていたらしい。そして、ＩＳを扱うために入った訓練校では金銭面のサポートを全て引き受けたという。現在だって、マクシミリアンと友誼を結び、その地位を確固たる物にしている。

マクシミリアンは言うに及ばず、イギリスを手中に収めＡＣ、ＶＦといったＩＳとは全く違う新兵器を開発・量産・配備することでドイツ・イタリアを除くヨーロッパの国々、アメリカ、ＩＳの保有数が1機ないしは2機といったアフリカ・中東アジアにも多大な影響力を持ち、そしてその権力を持って妹を完全に守護している。

それに比べて自分はどうか？　政治にも疎くただ『世界最強のＩＳ操縦者』という肩書きしか持っていない。王虎のように妹のために

自分の地位を失う賭けに出ることもなく、マクシミリアンのように、自身の意思を通せるだけの権力も持たない。そして、例外ではあるが束ほどの頭脳もない。言ってしまえば『ＩＳを扱う者』としての側面しか自分にはない。だから、自分の身を犠牲にマクシミリアンに一夏の保護を求めた。

「……結果としてそれは成功した」

世界の大半も、そして一夏自身も気づいてはいないが、一夏とセシリアが接触したため「妹の生活を守る」という名目で一夏を守っている。委員会もそれを理解しているのか以前のような働きかけはしなくなってきた。マクシミリアンは約束を守ってくれたのだ。だから、次は私がと思ったのだが、マクシミリアンはそのようなことを言ってこなかった。恥ずべきことなのだろうが、そのようなことを言われなくて喜んだ。だが、時間が経つにつれ、そして一夏は守られていると分かった瞬間、怖くなった。私は一人になったのではないかと。今まで平気だったのは一夏がいたから。しかし、その一夏も私の手を離れはじめている。それは姉として弟の成長を実感できて嬉しい。でも――――。

「寂しいよ……一人は…嫌だ…」

誰もが私を『ブリュンヒルデ』としてみる。私を「ブリュンヒルデ」として見なかった一夏は自立し始めている。束も「私」を見ているのか怪しい。マクシミリアンは「私」を見てくれていた。これが私の偏見だというのも分かっている。しかし、私は――――。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「閣下。ＩＳ学園に潜入させている工作員よりこのような報告が」

織斑千冬が追い詰められている、か。抜き身の日本刀のように確固たる意思を持っていたかと思っていたのだが…違ったか。日本刀にメッキを施したのを竹光といったか？

「ふむ……まぁ、あちらからなにか言ってこない限りは無視の方向で」

「よろしいので？」

「助けを求められれば動くが、わざわざこちらから助けるほど暇ではない」

セシリアなら別だがな。しかし――――。

「頼れる者がいない状況で成長すれば、こうもなるのかねぇ」

ある意味、今の千冬の姿は私やセシリアの可能性の姿なのかもしれないな。

ＳＩＤＥ　セシリア

「よしよし」

「ぼ、僕はそこまで子供じゃないよ…」

涙目の人に言われたくはないです。しかし、人質ですか。企業人としては会社を存続させるために有効な手を打ったというべきなのでしょうが、親としては最低ですね。

シャルロットから事情を聞いて、私が思ったのは以上のことでした。シャルロットもある程度吹っ切っているのでしょうが、やはり『捨てられた』とも取れるため少し涙目になりました。気に入りませんね。実の娘を『道具』として使うとは。え？　お兄様も似たようなことしているんじゃないかって？　敵対する陣営にかける情けがどこに？

「それで、その…一応マクシミリアン様の命令でセシリアの護衛とかを言われたんだけど」

「護衛、ですか」

多分、お兄様たちの事ですからシャルロットを政争の場から遠ざけましたね？　しかも、ここならばそう簡単に手出しはできない、と。つまり、普通の転校生と何ら変わりはないということです。

「では…シャルロット。私と…いえ、私たちと一緒に楽しい学生生

活を楽しみましょうね？」

「え？」

「文句は言わせません。セレン！　一夏さんたちを呼んできなさい！　歓迎パーティ（小規模）をします！」

「はい！」

「え？　え？」

さぁ、ふざけた父親の事は忘れて楽しみましょう！　せっかく、ここに来たんです。友人もたくさん作らないと損です！

第２６話　思い、錯綜する（後書き）

個人的な偏見ですが、千冬みたいなタイプって強そうに見えて豆腐メンタルという方程式が作者の中にはあります。なので、作者が書く千冬さんは大抵「実は豆腐メンタル」です。ええ。批判が来るのは分かっていますが、感想に書かないでください。凹むから。

竹光の説明は、外国人のマクシミリアンなので適当です。実際は、違うのであしからず。

セシリアはこんな感じになりました。そして、セレンはその忠実なわんこ。

そして、気づいた方もいるかも知れないけれども、再び「マクシミリアン×千冬」のフラグが建っているのだよ！　それを回収するかは分からないけど。

次回は、いよいよドイツの厨二病娘……もとい、ドイツの期待の軍人ラウラの登場ＤＥＡＴＨ！

ＰＳ．はっちゃけたくなったので、ほそぼそと「ＩＳ～三匹が行く～」を書き始めました。このままほそぼそとこっそり書いていきます。

第27話　妹、苦労する

ＳＩＤＥ　セシリア

私です。シャルロットの事は本人と徹夜で話しあって、和解しました。まぁ、一方的に私が暴走していただけですけど。でも、シャルロットとも友人になりこれからより一層頑張ろうと思っていた矢先に――――。

「私は認めない。貴様が教官の弟などと」

「……え？」

これです。ドイツからきた方のようです。あの立ち振る舞いから見て軍人でしょうか？　でも、軍人ならいきなり一夏さんを叩くなどという事はしないはずです。だって、一夏さんの重要性は分かっているはずですから。というか、それが目的とか？　どうせなら使いものにならない様にしようとか？　箒の恋路を応援する私としては何とかしなければなりませんね。ということで――――。

「セレン」

「はい」

「あのラウラ・ボーデヴィッヒについて調べてください」

「御意」

私の『お願い』に疑問を挟まずに動いてくれるセレン。なんというか、お兄様にとってのレイスさんやメルツェルさんのような感じになっています。

さて、お兄様はいっていました。せっかく使うだけの権力があるのだから使わなければ損だと。それに、友人をいきなり叩かれて黙っているほど私は大人じゃありません。

「……この前はもっと大人にならないとって言っていたような」

「シャル？　なにか言いました？」

「なんでもないデス」

それはそれ、これはこれです。でも、一夏さんもなにか言い返して

もいい気がするんですけどね。でも、やはりあのような突然の平手打ちに反応しきれないというのは羨ましいです。私もお兄様に守られていたとは言え、何回か襲われそうになりました。だから、あのような行為をされれば間違いなく暴走します。セレンが。私ですか？　まぁ、驚くくらいでしょう。

「時に一夏さん。織斑先生の調子が悪そうに見えるのですが…心当たりは？」

「…気づいていたのか？　いや…俺も分からないし、気づいた人もいなさそうだから黙っていたんだけど」

弟にすら悟られるほど悩んでいると。ちなみに、私の場合はただ単にそのような心の機微に聡いだけです。お兄様はどうなのかと？お兄様は、私関連なら分かりやすいです。

「それより、あの転入生……もしかして千冬姉関連かな」

「そう考えるのが普通だと思います。一夏さん。出来れば箒や鈴たちと一緒に居たほうがいいかも知れません。相手は軍人らしいですし…」

「……分かった」

これは……なにやら暗雲が立ち込めてきそうです。ですが、これも試練なのかもしれません。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

「……ッ！　セシリアがなにやら格好いいことを言った気がする！」

「ライトノベルを見ながら言っても格好がつきませんよ？」

ＳＩＤＥ　セシリア

なんというか……。ドイツの軍人教育って大丈夫なのかと思ってしまいます。百歩譲って学園生徒たちの錬度の低さに憤るのはよしとしましょう。ただ、軍人と一般人の錬度を比べてもらっては困りますけどね。話がそれました。私が言いたいのは――。

「何すんだ！」

「ふん」

事故、それとも事故を装ったのかは分かりませんが模擬戦でもないのに、不意打ち同然に攻撃を仕掛けるのは――なんですかシャル？　え？　発言からしてわざと？　それって…軍人としてどうなんですか？　セレン。

「三流もいいところです。軍人なら公私の別は付けるべきです。調べた結果、どうやら織斑一夏関係でここに来たようなので…下手に攻撃すれば自身の立場が悪くなることくらい分かっているはずです。もしくは、『それ込み』で送り込まれたか」

邪魔だったから問題を起こすのも想定の範囲内、と？　しかし、セレンに調べさせた結果を見るとあながち間違いではないのかも知れませんね。とりあえず、そこは後でセレンと一緒に確認するとして――。

「そこまでにしておきなさいな」

『ティア』を起動させて、一夏さんにもう一度放ったレールガンを撃ち落とす。『ティア』は何というか、私の思うように動いてくれるようになりました。セレンとはまた別の意味での従者といったところですね。

「セシリア？」

「一夏さん、大丈夫ですか？　とりあえず、売られた喧嘩は買うべきものと買わずにそこら辺に捨て置くものの二種類があるんですよ？　今回は後者です」

「え…あ、うん」

素直な方は好きですよ？　というか……本当にこの子は軍人なのですか？　軍人って、もっとこう……ＯＲＣＡの皆さんみたいに公私の別はしっかりとつけられる方々というイメージがあるのですが……。うぅむ。

「お前たち！　何を騒いでいる！　クラスと名前は！」

「チッ」

「遅いですね」

もう少し早く来てもいいと思うのですけどね。

「遺伝子強化試験体、ですか……どのような能力を？」

「はい。一言で言うならば『戦闘用調整体』です。身体能力や脳内演算の強化などを行いあらゆる兵器の操縦及び戦略などを体得しているようです。早い話がＯＲＣＡ旅団のリンクスたちです」

「なるほど。そして、ＩＳの適合率を上げるためにこの『越界の瞳（ウォーダン・オージェ）』の実験を行い、失敗ですか」

そして、軍内部で落ちこぼれ扱いされて自分の存在意義を消失。その後、教官として現れた織斑先生に鍛えあげられ、ＩＳの部隊長に就任されるまでに強化。結果として織斑先生を尊敬するに至った。いえ、あれはむしろ崇拝ですね。

崇拝するのはいいのですが…どうもそれで思考を止めているように思えるのです。崇拝云々に関しては…セレンがいるので何も言えませんが、ね。

「とりあえず、ボーデヴィッヒが何故ここに送られてきたのかが不明なので…セシリア様は暫くシャルロットと一緒にいてください。私は内偵を進めておきます」

セレンはシャルロットと話して打ち解けたようです。この子ももう少し社交的になってもいいと思うのですけどね。

ボーデヴィッヒさんだけに気を付けていた我が身が憎い。そりゃそうですよ。友人には猫娘がいましたからね。猫って自分の縄張りを荒らされるのが嫌いですものね？　それは起こりますよ。でもね？

鈴さん？

「セシリア！　行くわよ！」

「いえ……あの～私を巻き込まないで欲しいのですが」

「ふん。いいだろう。あの男の前に貴様らで準備運動をしてやる」

感情的に動くことは私たちの立場的にマズイですよ？

「仕方ないですね。とにかく、逃げに徹しますか」

時間を稼げば騒ぎを聞きつけて誰かが来るはずですからね。まぁ…
…何とかなるでしょう。

第２７話　妹、苦労する（後書き）

セシリア視点でいくので結構ばっさりカットしています。

次回は、セシリアと鈴ＶＳラウラです。さて…どうなることか。

追記：マクシミリアンは気を抜きすぎています。現在、アヴァロンの私室でセシリアから送られていた漫画やらアニメやらを見ています。セシリアのお土産だからそりゃあ見ますよ。

第２８話　妹、圧倒する

ＳＩＤＥ　セシリア

ドイツ軍第三世代ＩＳ『シュバルツェア・レーゲン』。ドイツ軍ＩＳ特殊部隊『シュバルツェア・ハーゼ』隊長ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐の愛機。主武装はレールガンやプラズマ手刀など。軍の特殊部隊らしいオールマイティな武装です。

しかし、特筆すべきはＩＳの基本システムであるＰＩＣを発展させた『アクティブ・イナーシャル・キャンセラー』でしょう。『ＡＩＣ』とも呼称されるこのシステムは簡単にいえば『対象の動きを任意に停止させる』もの。一対一の戦闘では反則的な能力を持つシステム。しかし、使用には多大な集中力が必要な上、多人数相手やレーザーなどには効果が薄いのが弱点でもあります。

ちなみに、この情報は先ほど送られてきました。セレンに調べさせたら数十分で送られてきました。さすがは、ＯＲＣＡ旅団の情報網といったところでしょうか？　対処法もすでに考えてあります。でも――。

「嘘……アタシの龍咆が効かない？」

「ふん。所詮はこの程度か……ぬるいな」

さすがは、ドイツ軍特殊部隊の隊長ですね。出来そこないなどと言われていても、元々の素質があるうえに織斑先生の教導を受けています。そう簡単に倒せるなどとは思っていません。

「セシリア、援護して！」

「させるか！」

それは本当に一瞬でした。接近戦を仕掛けようとした鈴さんをワイヤーで拘束し、そのままレールガンを『頭部』に向けて発射。防御したものの鈴さんは頭部に衝撃を受けて脳震盪を起こし気絶。

「おやめなさい！」

「邪魔をするな！」

しかも、この女は追撃を仕掛けようとしていた。私がレーザーライフルで攻撃しなければきっとそうしていた。許せるはずがない。

「ふん。セシリア・オルコットか。後ろから銃を撃つことしかできない臆病者は引っ込んでいろ」

「あら？　軍人ともあろう方が、後方支援の人間を馬鹿にするのですか？　それにしてもドイツの軍人教育は随分と甘いのですね？」

「何？」

こんな女が軍人だと……セレンやエイのような軍人だと思えない。この女はただ自分が気に入らないからと暴れているに過ぎない。

「初めて会った時から思っていました。この女は何だ？と。いきなり一夏さんに手を上げる。つい先日までＩＳを触ることすらなかった少女たちと、訓練を受けてきている自分と比べる。そして、すでに気絶している者にたいして追撃。まるで一流の軍人とは言えませんわね？　それとも…織斑先生からそう教えられたのですか？　だとすれば、織斑先生も三流ですわね」

「貴様ァァァァ「残念ですが、私……怒ってますの」何だと？」

「セシリア・オルコット……参りますわ」

さぁ、踊りましょうか？

ＳＩＤＥ　一夏

「へー。シャルのＩＳって改造されまくっているのか」

「うん。それがただの改造ならいいんだけどね……フフフ」

「……どうした？」

突然、遠い目で笑ったシャルに箒が声をかけるが返ってくるのは乾いた笑い。何があったんだ？

実は、シャルのＩＳ『ラファール・リヴァイヴカスタム？』はＯＲＣＡ旅団技術部の手により改造されており、『とっつき』や『劣化コジマ弾頭』・『パルスレーザー砲』・『グレネード』など採算度

外視で様々な武装を付けている。結果として、現行第三世代をも超える火力を持っている。もっと言うならば、シミュレーションではイギリスのＩＳ部隊を相手にして勝てると出ている。

「知ってる？　オールマイティな戦闘ができるって事は、いろんな武装をつけられて放り出されるってことなんだよ？」

なんだろう…俺の白式は刀一本で不満だったけど、いろんな武装が付いているのも考えものなんだな。そんなことを考えていると、周りが騒がしくなってきた。何だ一体？

「どうしたんだ？」

「あ、篠ノ之さん。いや、なんかアリーナで喧嘩らしいよ！　オルコットさんと転校生が！」

クラスメイトに話を聞くと、アリーナでセシリアとあの転校生ボーデヴィッヒがＩＳを使って戦闘を行なっているらしい。俺達は急いでアリーナに向かった。そして、観客席に入ると――――。

「ティア……いきなさい」

『マカセテヨママ！』

俺との模擬戦よりも素早い動きをみせている『ブルーティアーズ』とそれに翻弄されている転校生の姿だった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

セシリアの『ノブレス・オブリージュ』はイギリスが『ＢＴ兵器』のテスト用に製造したのを一対多・後方射撃支援用にオルコット・インダストリーが改良したＩＳである。篠ノ之束とは別ベクトルのオーバーテクノロジーを有しているオルコット・インダストリーにより改良された機体は、武装こそイギリスが開発した当時の装備だが、それ以外の部分では『ＢＴ兵器制御用学習型ＡＩ』の搭載などにより強化されている。

「ティア、『ブルー・ティアーズ』ロック解除。全力で行きなさい」

『ワカッタ！』

その結果として、試行錯誤な状態の現行第三世代ＩＳの中でも高い完成度を持っている。そして、セシリア自身の能力も射撃に偏重しているとはいえ高い。故に――――。

「ＡＩＣ…脅威ですが、集中力を削るようにすれば問題はありませんね」

「貴様ァ！」

通常の砲台型、リフレクター型、ダガー型のブルー・ティアーズが縦横無尽に動きまわり、ラウラの集中力を削っていく。ラウラが叫んでいた『停止結界』など関係ないとばかりにリフレクターで反射されたレーザーが飛び回り、それを避けたために解除された停止結界の隙を狙うようにダガー型が飛来する。大きく避けようとすれば、セシリアが持つレーザーライフルにより動きが抑制される。

「先程から『貴様』ばかり……もう少し語彙を増やしたらどうですか？」

「ＡＩを使っているくせに…調子に乗るな！」

「あら？　まさか軍人さんにそんなことを言われるとは思いませんでしたわ」

ラウラの嘲りもセシリアにとっては何のこともない。このような発言も聞きあきたもの。そもそも『調子に乗るな』など目の前の少女に言われる筋合いはない。彼女も『自分が強い』と調子にのっているではないか。それに、ＡＩを使っている？　ＡＩを『ティア』をここまで育てるのには、多大な時間と訓練を必要としたのだ。それを知らずに楽をしているなど。

「ボーデヴィッヒさん？　私、そこに至るまでの努力などを計算に入れず、ただ結果だけを見てずるいだの言う人間が嫌いなんです」

セシリアの静かな言葉に同調するかのように飛び回っていたブルー・ティアーズは、レーザーでラウラを囲むような檻を創り上げた。そして、構えるのは収束させたレーザーライフル。

「そして、ただ自分の感情のままに他者を虐げる者が一番嫌いなんですの」

収束されたレーザーライフルは光の壁となってラウラを飲み込んだ。ラウラはレーザーの檻を無理やり抜けたようだが、エネルギー残量も心もとない。ラウラの負けだった。

「あら？　一夏さん、ごきげんよう？」

「え……あ、はい」

そして、丁度こちらを見ていた一夏に挨拶してみるとそんな声が聞こえてきた。

第２８話　妹、圧倒する（後書き）

うちのセッシーに勝てると思ったかぁぁぁぁぁ！

ということで、セシリアさんが勝っちゃいました。まぁ、ぶっちゃけこの時のラウラだとＡＩＣ使うのが前提になっている気がするからなぁ。集中力を削げば坂道転げ落ちるように勝てるさ。

次回は、ラウラの行動によるドイツ軍の動きを書きたいと思います。そりゃあ、問題おこしゃあ、本国に報告されるさ。ところで、ＩＳ学園って各国の駐在員とかいましたっけ？　まぁ、いないならオリ設定として存在させますが。

それと、新作をあげました。今度は大丈夫ですよ？　六割ノリで書いている奴ですから。というか、こっちが主人公の設定的にはっちゃけられないからね。あっちはハッチャケさせるさ。タイトルは「ＩＳインフィニット・ストラトス～三匹が行く～」です。

第２９話　処分決定（前書き）

ぶっちゃけ、軍内部の事情とかは捏造なのでご了承ください。

第２９話　処分決定

セシリアと鈴、ラウラはあの後すぐに会議室に呼び出され、その場でＩＳ学園の教師陣や経営陣などから事情聴取などを受けた。

セシリアと鈴対ラウラの決闘は、三人に授業を除くタッグマッチまでの期間のＩＳ使用禁止及び放課後の自室謹慎（特別な事情があれば考慮）という三人への処罰が下された。これについてセシリアは気にすること無く受け止め、不満そうだった鈴を連れていこうとするがなにか思いついたのか教師たちに向かって一言。

「あ、凰さんですが…放課後に一緒に勉強などをしたいので私の部屋に連れて行ってもかまいませんか？」

セシリアの提案に千冬が乗っかる形で「そのほうが管理もしやすい」と提案したのでそれが認められることになった。

「貴様のせいで…！」

そして、部屋を出たときにラウラがそう言ってセシリアたちを睨みつけてきた。鈴は即座に反応して逆に睨みつけるがセシリアは額に手を当ててため息をついていた。

「はいはい鈴。これ以上問題を起こしても仕方ないでしょう？　これ以上問題を起こせば一夏さんと会えなくなるかも知れませんよ？」

「う……それはいや……」

「はい。いい子ですね～」

「頭を撫でるな～！」

妹をあやすようなセシリアに顔を真赤にして対抗する鈴。傍から見れば確かに姉妹だった。もしかしたら、気難しい猫と飼い主かも知れないが。しかし、微笑んでいたセシリアはラウラの方を振り向くと先程の微笑みがどこかへ行ったかのように冷徹な顔になっていた。

「さて、ボーデヴィッヒさん。貴方がどのような目的でこの学園に来たのかは知りませんが……あまり派手な行動はしないほうが身のためですよ？　軍上層部は一枚岩ではありませんから。貴方が問題を起こせばこれ幸いと貴方を貶める輩もいるのですから」

「――――ッ」

さて、問題を起こしたラウラはどうなることか。

「役立たずの黒ウサギが問題を起こしたようですよ？　私怨で織斑一夏とセシリア・オルコットに喧嘩を売ったようで」

「おぉ怖い怖い。ドイツ軍はいつから一般人に手を上げるようになったのでしょうなぁ？」

「おふざけはそこまでだ」

ここはドイツ軍の会議室。そこには、各分野の将軍やＩＳ部隊の教官、ラウラの所属するＩＳ部隊の副隊長であるクラリッサ大尉などが集まっており、ＩＳ部隊の教官とクラリッサは苦い顔を隠せなかった。それは会議の内容にあった。

「ボーデヴィッヒ少佐は…ドイツ軍の軍人として相応しくないのではないかな？　私は生まれは気にしないが、自制もできない少女をドイツ軍人として認めることはできないね」

会議の内容はＩＳ学園に駐在していたドイツの政務官からの報告について。要するにラウラがとった行動が問題視されたのだ。本来ならば召喚するべきなのだろうが、交代要員を用意することもできないため、現状維持となった。

「全く…女性優位になったのは時勢ゆえと納得出来る。だが…これはＩＳを扱えるのが女性のみという問題以前だ。軍人としてボーデヴィッヒ少佐は未熟すぎる。君はしっかりと教育したのか？　もしそうだと言うなら……もう一度訓練校に入るかい？」

ここにいる将軍たちは、大半が実力でその地位にいる者。それ以外の者でもそれぞれが自分なりに『軍人』という職業に誇りを持っている者たち。故に、今回の事態が許せないのだ。

「お待ちください。ボーデヴィッヒ少佐があなったのは例のＩＳ適合強化計画が失敗に終わった結果の軍内部での言われない風評が原因だと思います」

しかし、そこに待ったをかけるのがＩＳ推進派の女将軍。彼女はＩ

S台頭以前からこの地位にいたのだが、IS台頭による女性軍人の地位向上の旗印にされている経緯もある。

「その後のフォローを怠ったのは君たちではないか？　ISに関しては君たち女性軍人が主導で行うとこの場で宣言していたと記憶している。それなのにこちらに責任を求めないでもらいたい」

「全員静粛に。今は、そこを議論するべきではありません。どのような経緯があろうとボーデヴィッヒ少佐が問題を起こしたのは事実。処分を発表しなければ世界に示しが突きません」

IS学園には各国の駐在員がいる。恐らく、この問題はすでに各国に知られているはず。何かしらの処罰を与えなければ舐められるところの話ではない。ただでさえ、イギリスに借りを作った形になったのだ。これ以上付け入る隙を与えるわけにはいかない。

「私はボーデヴィッヒ少佐には厳罰を与えるべきだと愚考します。女性軍人が多くなったことは構いませんが、正直に言えば彼女たちには『軍人』としての意識が足りていないと思われます。特にISが台頭してから軍に入った者たちがいい例です。それでなくとも我が国はかつてのナチス親衛隊の影響で…」

ISが台頭してから軍に入った女性の中には上官の男性を見下す者もいた。無論、そのような人間は修正したのだが、今度は同期の男性軍人などを侮るなどの問題を起こしているものも多い。

そして、ドイツ軍の負の遺産とも言えるヒットラー。彼が遺した数々の所業はドイツ軍の黒歴史と言ってもいい。

「ふむ。ならば、ボーデヴィッヒ少佐を二階級降格及び、『シュバルツェア・ハーゼ』の隊長を解任。副隊長のクラリッサ大尉を隊長として…ボーデヴィッヒ中尉はどうしますか？　副隊長とするか、それとも再教育の意味も込めて一般隊員として――副隊長で？　了解しました。そしてＩＳ台頭後に軍に入った者たちの再教育が妥当ですかな？」

「待った。ボーデヴィッヒに関しては、それだけでは手緩い。一兵卒に降格させもっと厳しい再教育を行うべきだ。いや、むしろ女尊男卑の思想を持つ軍人は全て再教育すべきだ。奴らの言い分はヒットラーのそれと変わらない！」

「再教育なら、性別関係なしにした方がいいかも知れないな。これで男性軍人に調子づかれても困る」

「少しよろしいでしょうか？」

「ふむ。ミハイル少将。何か？」

「ボーデヴィッヒ中尉の再教育に関してですが…軍籍を一時取り上げ、ＩＳ学園で一般常識を学ばせるのが最適かと。部下に調べさせた結果、彼女は一般常識が欠如している可能性があるとの報告が上がってきました」

「だが「一般常識を学んでいれば今回の件も防げたかも知れません」ふむ」

ミハイル少将の言葉も最もかも知れない。手元にある資料にはそれ関係のことも書かれていた。将軍などの中にはこれをＩＳ推進派への貸しにするのも悪くはないと考え、大半がこれに賛成し、認められた。

次々と決められていく結果。クラリッサはまだ軽過ぎるとも言える処分に内心安堵していた。先ほど、オルコット・インダストリーから「今回のことに関してこちらからは何も要求はしない」と声明が届いていなければ、ラウラの名前が軍籍どころか戸籍から消えていたかも知れない。ラウラが起こした事態はそれほどのものだった。最も、暫くはイギリスに頭は上がらないだろうが。

「大佐。君の部下だったのだ。君が責任をもってこの事をボーデヴィッヒ中尉に伝えたまえ。それと、暫くの間中尉は諜報部のミハイル少将の監視下に入れ、これ以上問題を起こせば……とも」

諜報部のミハイル少将はまだ３０手前だが、かつて存在した諜報機

関『アプヴェーア』を復活させた父親の任命を受け、諜報部のトップに立つ男。今回の事件の情報なども彼が命じて集めている。そして、何よりもドイツ軍ではどの派閥にも所属しない完全中立である。そのため、ラウラの監視なども引き受けることになった。

「了解しました」

こうして会議は終わった。教官とクラリッサはラウラに対してこの事を伝えるためすぐさま部屋を出て行った。その後、ミハイル少将が手元のパネルを操作すると、将官たちの手元のパネルに新たな議題が現れた。

「ボーデヴィッヒ中尉のＩＳにＶＴシステム搭載の疑いあり、か」

「はい。私の部下に調べさせたところ…ハイツマン准将が主導で行っていたようです」

ミハイル少将はそのまま部下に調べさせたというデータを示していく。その全ては彼の部下が集めた情報。

「ふむ…現状ではＩＳ学園に技術者を向かわせることは難しいな」

本来なら技術者をＩＳ学園に向かわせて調査をするべきなのだろう

が、ラウラが起こした事件のせいで学園や委員会からも圧力がかかっている。恐らく、技術者を向かわせる際には通常の倍の誓約書なり検査を受けなければならない。

「ええ。ボーデヴィッヒ中尉の件がありますからね。下手に各国を刺激するのは…といったところでしょう。全く、だから子供が軍にいるのは嫌なんだ」

「ミハイル君。子供の軍人が悪いわけではない。教育を受けていない子供の軍人が悪いのだ」

ミハイル少将は大将にそう窘められて頭を下げた。彼は中立派ではあるが、いくら試験管ベイビーとは言え子供が軍人になるのに反対していた男で、父親の「子供に銃を持たせること程軍人として恥ずべきことはない」という言葉のもとの思想でもある。

「この件はミハイル少将に任せようと思う」

大将がそう告げると座っている将官たちはそれを承認した。承認されたミハイル少将は立ち上がり頭を下げると今後の行動を話し始めた。

「まずはハイツマン准将を拘束するべきだと思います。そして、准将の口からボーデヴィッヒ大尉のＩＳにＶＴシステムが搭載されて

いることが真実となった上でＩＳ学園に働きかける。これが一番ベターかと。一応、学園にその情報は今のうちに流しておきますが信用されるかどうか」

「ふむ。よし、それでいこう。ミハイル少将…頑張りたまえ」

「ハッ！」

これにて会議は本当に終了となった。しかし、問題のハイツマン准将は行方をくらましており、同時にＩＳ特殊部隊『シュバルツェア・ハーゼ』の隊長となったクラリッサ・ハルホーフ大尉よりラウラに対する処分軽減が申請されたため、ハイツマン准将の捕縛を条件にその申請が認められた。コレに関しては、准将の早期捕縛のためにミハイル少将が独断で許可したが、そもそもミハイル少将に全ての権限があるため大した問題にはならなかった。

結果としてラウラの処分は以下のようになった。

ラウラ・ボーデヴィッヒを軍籍より一時除籍。及びＩＳ特殊部隊『シュバルツェア・ハーゼ』隊長を解任。また、毎日ミハイル少将に報告を行うこと。学園のカリキュラム以外でのＩＳ使用禁止及びミハイル少将の許可なしでのドイツ軍人としての権力行使の禁止など。

以上がラウラに下された処分。その他にも、細かい部分で色々あっ

たがとても軽い処分とも言える。そして、翌日よりドイツ軍では再教育が行われることになった。

「私が…軍籍より除籍！？」

『一時、だ』

ラウラは寮の部屋にもどると、本国から通信が来ていることに気づき身なりを整えると通信に出た。そこには、ミハイルとクラリッサがおり、ミハイルの口から処分が言い渡された。

『それと、これ軍法会議が終わった後に元帥から命令されたことだが…『シュバルツェア・ハーゼ』への指揮権が大佐より私に移譲された』

指揮権移譲は、今回の件で『シュバルツェア・ハーゼ』への悪感情が育ったため、ドイツ軍でも汚れ仕事を担う比率が多い諜報部所属にすることで『懲罰部隊』として扱うことでその悪感情を回避させる目的がある。それ以外にも、調べるうちにＶＴシステム搭載以外にも埃が大量に出てきたハイツマン准将捕縛を内密に遂行する必要があったからでもある。

「わ、私は…」

『軍人としてあるべきとされた君には酷かもしれないが、これは命令だ。ＩＳ学園の一生徒として日々を過ごしたまえ』

『作られた』とは決して言わない。ラウラが望んでそうしたわけではないから。処罰すべきはそれを実行した連中。遺伝子操作などかつてのナチスのやり方と大差ない。だからこそ、今もそいつらの内偵を進めている。これ以上ドイツ軍を腐敗させないために。

『それと、毎日就寝前でも構わないので報告を行え。それ以外の軍への通信はハルホーフ大尉と通信のみ許可する』

クラリッサとの通信を許可したのは、部隊の様子やラウラの精神安定のため。最も、これはミハイルの独断でもある。

「了解……しました……」

だが、今のラウラには絶望しかなかった。自分の存在意義が再びなくなったのだ。通信が切れた後もラウラはその場に立ち尽くしていた。

「少将……その……」

クラリッサは通信が切れた後、ミハイルの様子を伺っていた。ラウラへの処分を甘すぎる物に誘導したのはこの男である。だから真意が読めない。

「今回の問題はある意味ドイツ軍の教育が甘かったためでもある。彼女が起こさずともいずれこのような問題は起こっていた。だから、軍内の一斉教育に踏み切らせるように情報を操作した」

つまり、この男は今回の問題はラウラだけの責任ではないと考えているのか？　クラリッサは余計に分からなくなった。自分と近い年でありながら、ドイツ軍の諜報部を取り仕切る男。聞けば彼の父親は第二次世界大戦後のドイツを立て直した一人らしい。だからこそドイツ軍に誇りを持っているのだろう。

「彼女のアフターケアは君に任せる。とにかく、彼女が成長できるようにしてくれ」

「了解です」

本当ならば、すぐにラウラと通信をしたい。しかし、まずは混乱しているという部隊の鎮静に動かなければならない。そう思い、クラリッサはミハイルの部屋を退出していった。

「……彼女たちには悪いが、ドイツ軍の浄化のためにも……ＶＴシステムは発動してもらわなければならない」

ミハイルが机の引き出しから取り出した資料には、ハイツマン准将を始めとする不正を行なっている軍人たちのデータがあった。

「内偵は全て済んだ。後は…ハイツマンの逮捕をきっかけに……」

諜報部は他部署からも嫌われている部署である。だが、ミハイルはそれでも軍の腐敗を粛清する。そのためなら、少女を生け贄にすることも辞さない。ラウラの処分を誘導したのは、せめてもの償いなのか。

第２９話　処分決定（後書き）

まぁ、ラウラの処分はこんな感じになりました。ぶっちゃけ、原作でも降格くらいはあっても良かった気がする。

ちなみに、最後の方の処分軽減はＩＳ推進派への恩売りも兼ねているのでこんな感じです。

こっそり出てきた名前ありのキャラミハイル少将。多分、これからもちょくちょく出てくると思われます。さて、次回はイギリスサイドかな？

追記：とりあえず、いろいろ修正しました。でも、まだなんか変。つーか、これってＩＳだよな？　ハイスピード学園ラブコメだよな？　あるぇー？

第３０話　ちょっとのほほんと

イギリスの王宮にある円卓の会議室。そこには、イギリス首相、イギリス軍の陸海空軍の各司令官及びＩＳ・ＡＣ・ＶＦの司令官、オルコット・インダストリー所属のバルキリー師団・レイヴン師団司令官と総司令メルツェル。そしてマクシミリアンの姿があった。

「さて、各軍のトップに集まってもらったのは先日ＩＳ学園で行われた私闘に関するものです。それと、女王陛下は公務のため来られませんので代理として私が出席させていただきました」

そう言って頭をさげるのは王宮につめている政務官。恐らく、彼がこの会議の進行役だろう。

「さて、ＩＳ学園にいる駐在員からの報告で我が国のＩＳ代表候補生のセシリア・オルコットがドイツ軍のラウラ・ボーデヴィッヒ少佐と私闘を行ったと連絡がありました」

「ふむ…セシリア・オルコットの私闘の理由は？」

マクシミリアンは資料を見ながら質問した。資料にも書かれてはいるが、こうして発言するのは様式美のようなもの。そして、マクシ

ミリアンはこのような場では公私混同はしない。ここはオルコット・インダストリーではないのだ。

「どうも…オルコット・インダストリーより護衛に付かせている者の報告では中国の代表候補生鳳鈴音とボーデヴィッヒ少佐の私闘に巻き込まれる形になったようです。ただし、前後の状況を鑑みるとボーデヴィッヒ少佐が鳳鈴音を挑発し、鳳鈴音と戦闘。その戦闘自体は鳳鈴音の敗北だったようなのですが、気絶した鳳鈴音に追撃を仕掛けたことに怒り、行動したようですね」

メルツェルがディスプレイにセレンからの報告書を映しながら説明を始める。

「ふむ…まぁ、これだけ見ればむしろ褒められるべきでは？　騎士道に則っても友人を守るというのは賞賛に値すると思います。それに――――中国とドイツに貸しができました」

そもそも、この円卓会議はセシリアの行動の処分を決めるものではない。この一件をどう有効活用するかを話し合う会議なのだ。といっても、マクシミリアンのクローズプランの遂行を目的としているため、今更話しあうこともない。

「特にドイツには先ほどオルコット・インダストリーを通して今回の件は水に流すと声明を出しておきました。まぁ…これで暫くはこちらの『お願い』も聞いてくれると思います」

マクシミリアンはそう言って手元の紅茶に口をつけた。そもそも、今回の件は確かに私闘を行ったことは問題に上がったが、ドイツ軍最強とも言えるＩＳ特殊部隊の隊長を一対一で倒したためお咎めなし、それどころかドイツに対して貸しを作ったためご褒美を上げてもいいくらいなのだ。

「しかし…セシリア君も中々強いな。ＡＩを使っているとは言え、ＢＴ兵器をあそこまでコントロールさせるまで育てるとは…兄として鼻高々ではないかな？」

そして、会議が終わりティータイムとなると一気に全員の緊張が解け雑談が始まった。

「そうですね。でも、最近は甘えてくれなくなって寂しいですね」

「うんうん。私の娘も可愛く綺麗になったのだが…彼氏が出来ているのだ！」

「「「「元気だしてください！」」」」

さて、ここにいるのはイギリスの軍事面を取り仕切る男たちなのだが、全員に共通しているのは妹や娘を溺愛している連中なのだ。

「……ここにいる誰か一人でも命令を下せばウェールズの森を焼き払うことができると誰が思うか」

メルツェルはいつの間にか自分の身内自慢に移行している出席者を見ながらそうつぶやいていた。まぁ、締めるときは締めているため構わないのか？　そう思いつつ、紅茶を楽しんでいた。止めもしないためこの男も大概である。

ＳＩＤＥ　一夏

転校生がセシリアと戦った翌日、あの転校生は授業に出席していたけど顔色は悪かった。千冬姉はそれを見て悲しそうな目をしていた。普通なら、仕返しを考えるやつもいると思うけど、転校生の顔色などがあまりにも悪いから誰もが踏み込めない。

「う～ん。どういう事なんだろうな」

「何がだ？」

「あ、箒か。いや、な～んか…俺らの知らないところで色々起きているんだなぁと」

俺らの知らないところで色々起きている。ＩＳの出現、オルコット・インダストリーの台頭、ＡＣ・ＶＦの登場。どれも俺らの知らないところで始まって世界が知っているまでになっている。でも、その中心にいるのは俺や俺の知り合い。偶然なのかな？　っていってもどうせ答えはでないから考えるのはやめておいたほうがいいか。

「しかし、セシリアは強いな…」

「そうだな～。ＡＩＣってすごく強いって言われていたんだけど…」

一応、ここは寮の廊下だぞ？　鈴がセシリアの部屋に行くから着いてきてくれって言われたんだ。何でも、自分一人で部屋を出てはいけないらしい。さすがに、あんな顔色になっている当事者の前でこんな話はしないよ。

それで、ＡＩＣがすごく強いっていうのはシャルに聞いたんだ。ＩＳのシステムであるＰＩＣを発展させたシステムで、範囲内の敵や銃弾の動きを止めるという正直良くわからないシステム。でも、セシリアはそれを破ったらしい。

「レーザーには効果は薄い。でも、だからってそれが有利に働くとは限らないんだよ？」

「「あ、シャル。いたんだ」」

「……君たちって何気にひどいよね」

ごめんなさい。ぶっちゃけると『転入生』って言われると全員ボーデヴィッヒを思い浮かべると思う。いろんな意味で衝撃だったから。だから…シャルは……。

「……影が薄いな～僕」

ゴメンね？　俺からはそれしか言えません。さて、シャルがいつ合流したのかは置いておいて鈴の部屋に着きましたよ……放課後も部屋から出られないって退屈そうだな。俺なら耐えられん。

「よ～す。鈴、迎えに来たぞ～」

「あ、一夏。それに箒たちもいるのね」

ドアをノックして部屋に入ると教本と筆記用具、そしてそれ以上にお菓子などを持っている鈴がいた。お前、どこに何しにいくんだ？

「セシリアの部屋に遊びに」

「……勉強ではないのだな」

箒…多分、セシリアもそう思ってはいないかも知れない。まぁ、休息も必要なんだということで納得しよう。つーか、そこら辺は俺は何も言えない。だって…中学の時も勉強会とか言って即効でゲームしてたから。

「ま、どうせこの面子で駄弁るんだしいいじゃない」

「ま、それもそうだな」

でも、セシリアって部屋で何しているんだ？　というか同年代の女子の部屋って入るの初めてだよな……ちょっと緊張する。そういや、

セシリアって俺のことどう思っているんだろう。まぁ…友達くらいにしか思っていなさそう。あんなお兄さんがいるなら理想も高そうだな。もう少し頑張るか…。

「着いたわね。やっほー、セシリア！　遊びに来たわ……よ」

「いや、勉強会だろう……が」

「あはは。まぁ、鈴らしい……け…ど」

ん？　どうしたんだ？　皆固まって。

「おい、どうしたんだ？　セシリアがいない……のか……」

何故か扉を開けて動かないでいる三人を押しのけて部屋を覗くとそこには――。

「お兄様から褒められました。アーサーも嬉しいですわよね？」

犬のぬいぐるみをギューと抱きしめてベッドの上をころころ転がっている――いつも見る凛とした佇まいなどどこにもないセシリアと。

「ハァハァハァハァ……セシリア様……ハァハァハァハァ」

鼻から鼻血を流しながらビデオカメラでそのセシリアを撮影しているセレンがいたのです。

「よかったですワン……って……あ、あら？」

あ、こっち気づいた。お～顔がどんどん真っ赤になっていく。漫画とかだと首から赤くなるけど現実は全体的に赤くなっていくんだな。え？　現実逃避？　仕方ないだろ。

「も、もしかして……見ていました？」

セシリアの質問に全員で頷く。あ、セシリア震えだした。もしかして――――。

「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

やっぱりねー！　シャルが俺たちを部屋の中に蹴飛ばしてドアを閉めたから音はもれなかった。あとでシャルに問い詰めたら、ただでさえボーデヴィッヒの件で教師陣がピリピリしているからこんなし

ょうもないことで問題を起こさないほうがいいとの判断だった。うん。シャル、ありがとう。

第３０話　ちょっとのほほんと（後書き）

次回は、一夏たちの内面を書けたらいいなぁ。

第３１話　様々な思い

ＳＩＤＥ　鈴

ギャップ萌えってあるじゃない？　不良が実はいい奴だったり、一組の山田先生みたいに童顔だけど巨乳だったりか。え？　何が言いたいのかって？　そりゃあ――――。

「あうあうあうあう」

「えっと……セシリア？　大丈夫だよ……可愛かったよ？」

「ぴぎー！」

布団に頭を突っ込んで必死に隠れようとしているセシリア。そして、心底楽しそうに言葉をかけている笑顔のシャル。普段の『凛としたお姫様』の雰囲気はどこにもないのよ。これってギャップ萌えでしょ？　兄貴が言ってた。

『普段はキリッとした女性が見せる違った一面！　それこそがギャップ萌えである！』

あの頃は分からなかったけど、今なら分かるわ。このセシリア……すっごく苛めたい！

――鈴にいじめっ子フラグが建ちました。特定条件下においていじめっ子となります。

なんか不穏な一文が見えた気がしたけど気にしない。というか、セシリアってこんな表情もするのね。って、やばくないこれ？　一夏がコロリと行くわよ！？　おのれセシリアめ。負けてたまるか！

ＳＩＤＥ　シャル

「クスクス……『お兄様に褒められました～。とっても嬉しいですワン！』」

「ぴぃぃぃぃ！？」

これは……ハマる！　いや、これは正当な復讐なんだよ？　以前、マクシミリアン様関係で弄られたからね。これは正当なんだよ。決して、もう楽しくなってきたわけじゃないんだよ？　本当だよ？

でも、セシリアってこんな一面もあったんだね。やっぱり、僕らと同い年なんだね。普段は年上のように感じるから、そんなことは考えなかったけど。駄目だね。こうやって自分の『セシリア』を押し付けていたら重しになるね。僕はメルツェルさんから護衛と言われているけど、それだけじゃない。友達になりたいんだ。だから――。

「セシリアは可愛いなぁ」

「あうあう」

今は復讐――ゲフンゲフン。親睦を深めるのが一番なんだよ！

ＳＩＤＥ　箒

何というか……この姿を見ると本当に同い年なんだなと思う。私にとってセシリアは常に堂々として、自分の行動に誇りを持っているイメージだった。でも、私の前にいるのは普通の少女だった。いや、私が言うのもおかしいな。

年齢と内面が違っているというならば私も同じか。でも、多分今のセシリアが素だとしても私より大人なのは間違いない。だから、心配でもある。

もし、セシリアが一夏に惚れたら勝ち目はない。

一夏が少なからずセシリアを好いているのは分かる。だから、セシリアが一夏を好きになったら私に勝ち目はないだろう。だから、それまでに私の思いを一夏に伝えることが出来れば勝ち。でも、素直になれない……前途多難だ。

ＳＩＤＥ　一夏

～～どうせ、うだうだヘタレたことを言うので省略～～

ヒドイ！？

ＳＩＤＥ　セレン

さすがはセシリア様。どんな行動も愛らしい。というか、もはや美そのものだ。姉さんたちは理解出来ない様だけどね。そもそもセシリア様は初めて会った時から可愛らしくてそれでいて気高くて～～中略～～ということで、正直に言うならば織斑一夏はセシリア様に相応しくないわけで。というかそもそもが、女心を理解出来ない男は認められない。調べたら小学校から不特定多数の女子に好意を寄せられていたらしいけど、全てその鈍感さでスルー。さらには、男子にも嫌っている人間が居たという。人の心に鈍感な人間などセシリアの傍にはいらない。セシリア様の立つ場所は『優しい』だけの人間がいる場所ではない。セシリア様以外を切り捨てる覚悟のある人間こそ相応しいんだ。

ＳＩＤＥ　ラウラ

何も無い。私にはもう何も無い。なんで？　だって、あの男は教官の威光に泥を塗った。あの男さえいなければ教官は今もあの輝かしい場所にいたはず。なのになんで？　私があのイギリスの女に負けたから？　弱かったから？

――力が欲しいか？

力？　欲しい。だって私が弱かったから少将は私を捨てたんだ。だったら強くなればいいんだ。

――力が欲しければくれてやる

ＳＩＤＥ　ミハイル

「さて、准将。ＶＴシステムは搭載されているのですか？」

「な、なんの事かな？」

ふん。私益を肥やすしか能のないドイツ軍人にあるまじき男がとぼけるだと？

「そうですか。大尉。ご苦労だった、部下を連れてガンルームで待機していなさい」

「で、ですが「これからは我々諜報部の仕事だ」」

さすがに、女に拷問を見せるわけにもいかんだろ？　我ら諜報部はドイツ軍の誇りを守るためならばどのようなことでもする。

「准将。さっさと吐いたほうが身のためですよ？　貴方もまだ…余生を楽しみたいでしょう？」

さぁ、我が父仕込みの拷問術をお見せいたしましょう？

ＳＩＤＥ　イギリス

「メルツェル。マクロスはどの程度完成した？」

「あとはエンジンのみです」

ようやくここまで来たか。かつて人類を外宇宙へと導くきっかけとなり、そして星間戦争の中心となった戦艦マクロス。

「もう少し、か。何時までも狭い地球の中で覇権争いをしている場合ではない。女尊男卑？　人種差別？　そんなもの…狭い地球にい

るからこそ起こる事態だ」

故に、そのような問題は宇宙進出をすれば意味のないことだと教えてやろう。宇宙には国境も何も無い。故に、虐げられれば無限の宇宙に夢を見出し去っていく。

「さあ……クローズプランの最終工程に入ろうか」

第３１話　様々な思い（後書き）

ふう。結構難産だった。

そして、後半二人は色々暗躍している。

次回は、いよいよタッグ戦。予定では、一夏とセシリアがタッグを組む予定。そして、ＶＴシステムが覚醒する！　ということで、次回も宜しく。

ＰＳ．「三匹が行く」の方もよろしくお願いします。

いろんな意味で感想が欲しいです。

第32話　妹、組む

「え？　タッグ戦のパートナー？」

「ええ。というか、知らなかったのですね」

セシリアの可愛い一面が一夏たちに知られた通称「セシリアちゃん事件」から二日後。いよいよ間近に迫ったタッグトーナメント戦。その出場エントリーが始まっているのだが、それに気付かなかった一夏。

「ちなみに、一部では優勝したら織斑一夏と恋人になれるという噂が立っているようです。そうですよね、セレン？」

「はい。出処は不明ですが、すでに一年の間に知れ渡っています」

「……」

一夏に心当たりあり。つい先日、箒と似たようなニュアンスの会話をしていたような気がする。回想するならばこんな感じ。

～～回想～～

「一夏！　トーナメント戦で…私が勝ったら付き合ってくれ」

「いいぜ？」↑トーナメント戦の存在を忘れている男

～～回想終了～～

「（あれか……）」

「まぁ、早いところパートナーを決めておいたほうがいいですわよ？　ほら」

セシリアの指した方向にはこちらの様子を伺っている女子生徒たちがいた。どうやら一夏とタッグを組みたいようである。なぜ、寄ってこないかというと――――。

「なぁ…セシリア。セレンはなんで…ショットガンを持っているんだ？」

「暴徒鎮圧用のゴム弾です。まぁ…色々と事情があるのです」

本来なら、ゴム弾とはいえ銃火器を持ち歩くのは忌避すべきことなのだろうが、良くも悪くもここは治外法権。許可をとればある程度の自由は認められる。まぁ、セシリアがトップスポンサーの妹というのも関係しているのだろうが。

「えっと、じゃあセシリア。一緒に組んでくれないか？　その……あそこは怖い」

「まぁ……鬼気迫っていますしね」

ヘタレた事をいう一夏だが、セシリアはその気持ちがわかるような気がした。目が血走っている女生徒もいるのだ。そりゃあ怖い。

「まぁ…私は構いませんが」

そもそも、セシリアのノブレス・オブリージュは一機で複数を相手にできる性能を持つ。なので、セシリアはまぁ誘われたらその人とくらいにしか考えていない。なので、一夏から誘われても問題はない。

「まぁ…シャルは…箒と組んでいるようですし。では、今日の放課後から特訓しますわよ？」

「お、おう」

セシリアは早速アリーナ使用許可をもらってくると席をたったのだが、セシリアが居なくなったとたんにセレンが一夏に詰め寄る。

「セシリア様に手を出すなら…殺す」

「え？」

「お前は良くも悪くも『ＩＳ』が引き起こす事態の中心にいる。不必要なトラブルはセシリア様を危険にさらす。友人としてならば構わない。だが、もし…セシリア様と恋仲になりたいのならば…自分の姉すらも捨てろ」

セレンは初めて会った時から一夏を敵視していた。自分の立場を理解していない言動や誰にでも優しいという『欠点』はセシリアを第一に考えるセレンにとっては注意しなければならない。しかし、それを理解していないからセレンは一夏を敵視する。

「お前が善人なのは理解している。だが、セシリア様のいる世界は善人なだけでは生きて行けないんだよ」

セレンはそれだけ告げるとセシリアの後を追いその場を離れた。残

された一夏はただ呆然とするしか無かった。

ＳＩＤＥ　セシリア

「さて、とりあえずは一夏さんは習うより慣れろだと思いますので、模擬戦を主にやっていきます」

「おう！」

私は現在アリーナにいます。とりあえずは一夏さんにはある程度遠距離戦に対応してもらわないといけませんね。しかし、だからと言って私相手だとパターン化してしまう。なので、ここは皆さんに協力してもらいましょう。

「といっても、私は近接戦闘は無理なのでシャルと箒にお願いします」

「うん！」

シャルは張り切っていますね。そんなに影が薄いのを気にしているんでしょうか？　とりあえず、一夏さんにはレーザーライフルを渡しておきましょう。

「一夏さん。これを使ってください」

「え？　でも、使えるの――あ、使えた」

……ＩＳの基本的な知識から教えたほうがいいかもしれないですね。まぁ、そこはおいおい教えていくとして、私の『スターライトＭｋ－？』は、以前まで使っていた『スターライトＭｋ－？』の改良型で、レーザーライフルではなくビームライフルです。特徴としては、ビーム粒子を固定することにより槍として扱えることでしょうか？

「とりあえず、タッグ戦まではそれをお貸ししますので使ってください。さすがに、射撃武器がないのはキツイと思いますので」

「セシリアはいいのか？」

「ええ。その代わり、追加パックを使用しますので」

お兄様から送られてきたノブレス・オブリージュの追加パックの一つ『ジェノサイド・ガンナー』は、その名のとおり『広域殲滅用追加パック』です。このパックは別称で『フルアーマード・パック』と呼ばれる物。

「なんか…すごく物々しいというか……何というか」

箒が顔をひきつらせていますが、まあ仕方ないかもしれません。この追加パックの特徴は両肩に搭載されている劣化コジマ粒子砲ですね。一応、フルパワーで撃たない限りはコジマ汚染の心配はないようです。リミッターが掛けられており、５０％の出力しか出せないようなのですが、それでもシールドエネルギーの減衰率が半端じゃないようです。お兄様が珍しく頭を抱えて「なんということだ。ジェラルドよりも凶悪になってしまった」といっていましたが、ジェラルドとはどなたなのでしょうか？

「とりあえず、一夏さん。連携を磨くためにも、一緒に戦いますわよ？」

「お、おう」

相手はシャルと箒。決して楽に勝てるとは思っていません。あ、ちなみに鈴は甲龍が半壊したため今回の行事事態に参加することができません。まぁ、仕方ないかもしれないですね。さて、この『ジェノサイド・ガンナー』がどれだけの威力があるのか試してみましょ

う。

「……ねぇセシリア。ＡＳミサイルはいいよ？　でもさ、その中に劣化コジマ粒子を仕込ませるのは幾ら何でもやり過ぎだと思うんだ」

「避けたと思ったら緑色の粒子がばらまかれて、その粒子のせいでエネルギーが少なくなっていくし、なんか装甲も腐食するし」

シャルと箒の目が怖いです。というか、コジマ粒子ってそこまで応用性が高かったのですか？　この『プライマルアーマー』と『アサルトアーマー』というのもなにやら恐ろしい感じがします。これらはギリギリまで使わないほうがいいかもしれないですね。

ＳＩＤＥ　マクシミリアン

そういえば、『ジェノサイド・ガンナー』は全てコジマ技術で作成された追加パックだというのを忘れていたな。まぁ、セシリアなら大丈夫か。

「さて、マクロスはどうだ？」

「エンジン始動後に動力炉に異常が見られましたので解析中です」

ふむ、やはり簡単にはいかないか。となると…実際に動かしたほうがいいか。

「調整が終了すれば、マクロスを海に『揚げて』実際にデータを取る。トランスフォーメーションはしなくていい」

「了解です」

さて、そろそろ動くとするか……その前に、再度ＩＳ学園に行くか。

ＳＩＤＥ　ミハイル

「それで？　ハイツマンは吐いたか？」

「ええ。電極を刺したら一発でした。ＶＴシステムは確かにボーデヴィッヒ中尉のＩＳに秘密裏に搭載したようです」

ならば、さっさと動くとするか。

「不正を働いた軍人共を一気に粛清する。すぐに実行しろ。そして、ハルフォーフ大尉にＩＳ学園に連絡を入れるように伝えろ」

「了解」

「閣下！　マクシミリアン・オルコットがＩＳ学園に向かったようです！」

「なに？」

なぜ、あの男が？　いや、それよりも…マズイな。ＩＳ学園には爆弾がある。それがあの男に対して爆発すれば今度こそ取り返しがつかん。

「閣下！　ハルホーフ大尉より伝令。ボーデヴィッヒ中尉と連絡が取れないようです！」

「……仕方ない。私もＩＳ学園に向かう。すぐに用意しろ。それと、一応ハルフォーフ大尉も連れて行く」

次から次へと……だが、ドイツ軍を守るためなら……やってやろう。父が復活させた諜報機関を『黒い森（シュバルツバルト）』と呼ばれるまでに育てた私を

舐めるな。

「中佐！　軍内の粛清は任せる。抵抗するならば……それ相応の措置を取れ」

「了解！」

せめて…私が到着するまで何も起こらないでほしいが……無理だろう。

この数時間後、航空機の中に居たミハイルとクラリッサの下にＶＴシステムが発動したという報告が入り、クラリッサはミハイルからの命令によりＩＳにより航空機からＩＳ学園に向かい発進した。

第３２話　妹、組む（後書き）

さて、次回はいよいよＶＴシステム発動編ですね。原作の流れがどこかにいっているような気がするけど、気にせずに進めていきたいと思います。

マクシミリアンがＩＳ学園へ訪問するのは、本格的に動くためセシリアと会うことが難しくなる可能性が出てくるためです。まぁ、ただ単にＩＳ学園でマクシミリアン対ミハイルの腹芸を書きたいだけなんですけどね。

ちなみに、マクシミリアンがＩＳ学園に向かわなくてもミハイルは向かう予定でした。火消しのためですよ。

第３３話　ラウラ・ボーデヴィッヒ

ＳＩＤＥ　セシリア

よく見ればわかったはずでした。自身の全てが無くなって絶望の末に拠り所がなくなった目、それは『かつての私とお兄様の目』でした。

「強くなれば……そうすれば……だから……貴様らを倒せば！」

タッグ戦で私たちと対峙したボーデヴィッヒさんは初めからタッグを組んでいる女子生徒を無視して攻撃を仕掛けてきました。しかし、先日の様に暴走する人間がたった一人で二機のＩＳに勝てるはずもないのです。現に、必死に援護しようとしたパートナーを私に落とされ孤立したところに一夏さんの攻撃を受けてもはや死に体の状態になりました。

「強くなれば…捨てられないんだ。お前らを倒せば……私は『私』に戻れるんだ！」

ボーデヴィッヒさんがボロボロの状態でそう叫ぶとＩＳが変わりました。お兄様が研究させているという液体金属のようにボーデヴィ

ッヒさんを包むと姿が『シュバルツェア・ハーゼ』から『暮桜』に変貌しました。

「嘘だろ……なんで……千冬姉の…」

「どういう事……ですか」

まさかとは思いますが…ＶＴシステムを搭載していたのですか？

ＳＩＤＥ　千冬

ボーデヴィッヒが起こした事件。アレは多分、私のせいなんだろうな。ボーデヴィッヒが私に異常なほどの敬意を持っているのは知っていた。そして、一夏に対して異常な敵意を持っていることも。それを知っているのに私は何もしなかった。ボーデヴィッヒに、一夏に何か一言でも言えばよかったのかも知れない。しかし、しなかった。その結果が、あの事件とドイツ軍内でのボーデヴィッヒの『処罰』だった。

最近になってふと思う。私はなぜここにいるのか？と。最初は、国の要請などもあった。そして、ドイツでの教導の結果自分自身が誰かを導いてみたいという思いが芽生えた。しかし、結果としてわかったのがそのような力などないということ。結局のところ私は『ＩＳ操縦者』でしかないのだ。ドイツ軍からボーデヴィッヒのＩＳにＶＴシステムが搭載されている可能性があると言われても何もしなかった。『あれ』の危険性は知っているはずなのに。

「お、織斑先生！」

「分かっている……すぐに教員たちを招集してくれ」

だから、ボーデヴィッヒの変化に気づいても何も言えない。その結果がこれ。だが、今はそのような事を考えている時ではない。ボーデヴィッヒを無力化しなければ。

「……無力化、か。あぁ、やはり私は『教師』ではないな」

「織斑先生…？」

『すまない。こちらはドイツ軍諜報部隊『シュバルツバルト』指令ミハイル・ケーニッヒ少将だ』

「ふぇ！？」

突然、通信をかけてきたのはドイツ軍の少将だった。

ＳＩＤＥ　ミハイル

「ボーデヴィッヒに関してはこちらに任せてもらいたい。これはドイツ軍の問題だ」

『しかし、ボーデヴィッヒを無力化するにはＩＳが必要だと思うが？』

「少し待ってくれ。ハルフォーフ大尉。現在地は？」

『ＩＳ学園の北西１０キロ地点です。後、五分ほどでＩＳ学園の敷地内に入ります』

早いな。だが、好都合でもある。早めにこの問題は沈静化しなければならない。織斑千冬。悪いが、さっさと決断してもらう。

「聞いたとおりだ。悪いが…ドイツ軍の信号を出しているＩＳが接近してきたら、遮断シールドを解除してもらいたい。ＩＳ委員会にもその旨は伝えてある」

かなりの無茶をしたがな。さすがにＩＳ委員会に無理やり『弱みを作った』のは危ない橋だったが…構わん。

『だが…あれは全盛期の私の動きをトレースしている。幾ら何でも難しいと思う』

『ならば、我々も協力しようか』

通信に割り込んできたのは…マクシミリアン・オルコットだと？どこから情報を手に入れた…いや、恐らくはＩＳ学園内にいるセシリア・オルコットの護衛かイギリスの駐在員か。

『なぁに…ドイツ軍の『黒い森（シュバルツバルト）』に協力してもらいたいのだ。宇宙進出にあたりＥＵの一体化は必要だと思ったのでね？』

マズイな。こちらには以前の負い目がある。こちらが『要請』を聞かないわけにはいかない…だがＥＵを一体化した場合は確実にイギリスが頂点に立ち、早くからイギリスに付いたフランスがナンバー２になる。さらに言えば…確実に軍の再編が起こる。主導権は全てイギリスか。さすがは『海賊国家』だな。

『何か勘違いしているようだが…ＥＵの一体化と言っても他の国を併呑する気はない。ただ単に足並みを揃えてほしいだけだ。別に欧州各国の軍の再編を行うつもりもない』

足並みを揃える。つまりは、イギリス主導の『クローズプラン』に協力しろということか。

『ドイツ軍の諜報部を取り仕切る貴官がドイツ軍を説得してもらえるならば、こちらには歩み寄る準備はある』

ボーデヴィッヒの件もある。さらには、現在の状態もある。ハルフォーフだけでは恐らく無力化はできない。

「返答は…この件が終わってからでいいだろうか？」

『確かに緊急を要する事態だからな。了解した。では…セシリア。ドイツ軍と協力してその『亡霊（ゲシュペンスト）』を無力化しろ』

『了解ですお兄様』

ゲシュペンスト、か。ここぞとばかりに皮肉を言ってくれる。

「……中佐。私だ」

『閣下。どうされました？』

幸いというべきか。軍内の粛清が終わっていれば、この件も通しやすい。どのみち私がどうなるかは分からんか。

「今から送るデータを会議で諮ってくれ。私はこちらの方で動く」

『了解です』

ボーデヴィッヒの身柄もどうするか考えなければならないな。チッ。厄介ごとばかりだ。

ＳＩＤＥ　セシリア

「というわけですので、一夏さんはお下がりください」

私は『大人の事情』で戦ってもどこからも文句は言われませんが、一夏さんはそうもいきませんから。

「なんでだ！？　俺だって戦える。それに…千冬姉の偽物を――」

「……織斑先生の動きをトレースしているあのＩＳが気に入らないだけなら下がっていなさい。あなたには『ＩＳを世界で唯一扱える男子』という肩書きしかありません。私はかつて言ったはずです。貴方の立っている場所は特殊なのだと」

自分の意思を通せる事態などあり得ない。そもそも、ＩＳ学園に織斑先生が無理やり入学されなければ良くて国連の研究機関での軟禁、悪ければどこかの国での非合法な実験の被験体になっていたかもしれないのですから。

「いい加減に自覚しなさい。織斑一夏。この件はすでにＩＳ学園の特殊性をもってしても解決できないのです」

「ドイツ軍諜報部指令ミハイル・ケーニッヒ少将直属ＩＳ特殊部隊『シュバルツェア・ハーゼ』隊長クラリッサ・ハルフォーフ大尉です」

遮断シールドが一瞬解除され、現れたのはドイツ軍人。なるほど。この方が協力者というか主役ですか。

「それでは作戦を決めたいと思うのですが…そちらの武装などは？」

「ハッ。本官のＩＳは全距離対応型です。ただ、今回はＶＴシステムの事もあり近距離用の武装を追加で装備しています」

なるほど。やはり特殊部隊ともなるとそのような編成になりますね。ところで、なんで私に対してそのような…あぁ。『前回の件』の影

響ですか。

「ならば私は遠距離支援に徹しますので、ＩＳ自体の無力化などはお願いします」

「了解しました！」

さて、これでよし。あとは一夏さんなのですが…退きそうにないですね。

「一夏さん。退いてください」

「だけど！」

その性格が羨ましいです。でも、早死するタイプですね。

『一夏、下がれ。これは命令だ』

「千冬姉！」

『この作戦に参加するならば……お前はどこかの国家に所属しなけ

ればならない。だが、そうなれば……お前は所属する国の命令に従わなければならなくなる。今までのように暮らすことは不可能なんだ。頼む。分かってくれ』

『さらに言うならば、日本に所属したとすれば…各国から圧力がかかるな。そうなると…お前の周囲の人間にも迷惑がかかるぞ？』

お兄様。そのような脅しはやめておいたほうがいいと思いますが、この状況では仕方ないですね。

『あまり世界を軽く見ないほうがいい。織斑一夏という人間の周囲の人間。それこそ、中学時代のクラスメイトの現在地なども把握している。そうだろう？　ケーニッヒ少将』

『……否定はしない。それと、織斑一夏と親しい人間には各国の監視がついている。織斑一夏が逃亡したりしないように、な』

「……」

『わかっただろう？　頼む。言う事を聞いてくれ』

「……時間がありません。シャル、一夏さんを引っ張っていってください」

『了解』

「シャル…って、セシリア!?　エネルギーが?」

劣化コジマ粒子でエネルギーを減らしましたが…これで戦えない。

「さて、ハルフォーフ大尉でしたか?　援護はお任せください」

「……申し訳ありません」

そういえば、うさぎって寂しいと死ぬんですよね?　お兄様に調べてもらったら寂しがり屋のうさぎを一人見つけました。それじゃあ、その寂しがり屋を助けるとしましょうか。

ＳＩＤＥ　ラウラ

『これで最強の兵器ができた。奴らは日和っているようだが…ドイツの栄光を取り戻すには必要な措置だ。ビスマルク・ケーニッヒと私は違う。これこそドイツ第三帝国の復活の狼煙になる』

これは……私の生まれたときの記憶……私は『兵器であれ』と作られた。だから私はそうあるようにした。そうすれば『私』の居場所があったから。

『ＩＳだと？　馬鹿な……認められるか！　女しか使えない兵器だと？　そんなモノに私の『兵器』が負けたと？』

ＩＳが生まれたとき、『父』は荒れていた。でも、私は『父』の期待に答えようと頑張った。だって、そうすれば『私』を褒めてくれたから。だから、ＩＳも頑張って乗りこなした。そして、特殊部隊の隊長になった。

『ラウラよ。貴様にはＩＳ適合性向上実験の被験体になってもらう。ドイツのためにな』

『はい』

そして、『越界の瞳（ウォーダン・オージェ）』の実験。でも、私は適合しなかった。『父』は私を捨てた。『私』の居場所がなくなった。

『私が今日から貴様らを鍛える織斑千冬』だ」

教官が現れた。あの人のおかげで私は『私』の居場所を取り戻した。『父』も再び私に目をかけてくれた。

『貴様が織斑一夏か。認めない。お前があの人の弟などと』

私は織斑一夏を憎んでいた。なんで、アイツは『誘拐』されるという『失敗』を犯したのに捨てられていないんだ？　私は『実験』に『失敗』したから捨てられたのに。

『ラウラ。貴様はよくやった。私の娘として相応しい結果を残した』

『ボーデヴィッヒ。お前を鍛えあげてやる。誰にも負けないようにな』

褒められたら嬉しかった。だから、次も頑張ろうと決めた。

『ラウラ！　なぜだ！　貴様はなぜ適合しなかった！？　この役立

たずが！　これではドイツの栄光が……』

怒られたら悲しかった。『父』は『失敗』した私を叩いて怒った。なんで怒られたのか分からないけど。叩かれないように、怒られないように、また褒めてもらえるように頑張った。

……あぁそうか。私は別に織斑一夏とかどうでもいいんだ。

『私』を見てくれる人なら、『私』を褒めてくれる人なら誰でもいいんだ。『父』は私をドイツの栄光を取り戻す『道具』としてみていた。怒っても何が悪いのか教えてくれなかった。教官は『私』を見てくれていた。そして、何が駄目なのか教えてくれた。だから頑張ったのに。教導が終わった後にそのままドイツ軍で引き続き教鞭を取ってくれと言われていたけど、血の繋がった弟を選んだ。分かっている。教官は悪くない。でも、羨ましかった。『失敗』しても捨てられない織斑一夏が。教官に選ばれた織斑一夏が。

寂しいよ…誰も『私』を褒めてくれない。頑張っているのに…頑張って強くなったのに。なんで怒られるの？　中国の代表候補生は倒したよ？　でも、イギリスの代表候補生に負けたから私は要らないの？

――――う

誰？

『聞こえますか隊長！』

クラリッサ？　なんで、ここにいるの？

『待っていてください。今、助けますから！』

なんで？　だって、私はもう要らないんだよ？　もう隊長じゃないんだよ？　捨てられたんだよ？

『ごめんなさい。私がもっと踏み込めば……悔やむのは後にします。とにかくお姉さんに任せてください！　オルコットさん。援護お願いします！』

お姉ちゃん？　クラリッサはお姉ちゃん？

『そうですよ！　お姉ちゃんです！』

本当？　私を捨てたりしない？　褒めてくれるの？　ちゃんと『叱って』くれるの？

『ええ！　いっぱい叱った後にいっぱい甘やかしてあげますから覚悟しておきなさい！　ちょっと、痛いかもしれないけど……我慢して！』

うん。我慢するよ。だから……私を褒めてお姉ちゃん。

第３３話　ラウラ・ボーデヴィッヒ（後書き）

……さて、土下座をするか。焼き土下座？　剣山土下座？　それとも複合？

ラウラはこんな感じになり、クラリッサはお姉ちゃんになりました。アルェー？

そして、次回はこの事件の終端ですが…ぶっちゃけるとシスコンが一人増えます。そして、ラウラは……まぁ、このまま幼女として頑張ると思いますよ？

第３４話　決着（前書き）

サブタイトルがいまいちだなぁ

第３４話　決着

ＳＩＤＥ　クラリッサ

暴走したレーゲンと戦っているときに声を聞いた。誰かに褒めてもらいたくて頑張っている小さな少女の声。

それは隊長の声だった。あの人は誰かに褒めてもらいたくて、誰かに自分を見てもらいたくてそれが空回りしていたのかも知れない。だからその声に呼びかけた。

「待っていてください！　今、助けますから！」

――なんで？　だって、私はもう要らないんだよ？　もう隊長じゃないんだよ？　捨てられたんだよ？

返ってきたのはそんな声。そして理解した。この子は背伸びをしていた子供だって。でも、それは当然のこと。私は知っていた。ミハイル少将から知らされていたはず。

『ラウラ・ボーデヴィッヒはハイツマン准将が主導で進めていた『遺伝子強化実験』の成功体。故に、一般常識が欠如している。『父』

であるハイツマン准将が『兵器であれ』と教育した結果だ』

なのに私は…。

「ごめんなさい。私がもっと踏み込めば……悔やむのは後にします。とにかくお姉さんに任せてください！　オルコットさん。援護お願いします！」

『了解です……ボーデヴィッヒさんは何と？』

「……全部、私たちの不徳の結果です。誰もあの子に何が悪いのか、何がいいのかを教えなかった」

年齢よりも幼い精神。多分、隊長は必死に褒められようと頑張った。その結果、強ければ褒められると思ったのかも知れない。

『だったらそれを教えないといけませんね』

「ええ。これでも私は部隊ではお姉さんだったので！」

さぁ、ラウラ…お姉ちゃんが今行きますよ！

『――――』

「鬱陶しい！　さっさと消えろ亡霊が！」

これが全盛期の教官、か。確かに強い。でも、ただ真似ているだけではね。それに、私だってあの時から成長している。そして何より、負けられない。

「『テンタクラーロッド』展開！」

これが私の『シュバルツェア・ツヴァイク』の固定兵装の一つ。機体名である『黒い枝』の名のとおり枝を模した鞭。イギリスのＢＴ兵器と同じく脳波による制御が必要な物だけど、私には扱える。何故なら『私専用の武器』として開発されたから。

「ラウラ！　ちょっと痛いけど…我慢してください！」

この『テンタクラーロッド』は様々な能力を持っていますが、その中でも群を抜いているのは『電磁パルス発生能力』だと胸をはって言える。この電磁パルスはＩＳの電子機器などを一時的にダウンさせることができるだけの電磁パルスを発生させることができる。これならば――！

「さあ…チェックメイトです！」

『瞬間加速』は確かに脅威ですが、隼が森の中を自由に飛べますか？　この『テンタクラーロッド』により作られた『黒い枝』が生い茂る森から逃げられることは教官のコピーといえども不可能。

「『黒い森』はドイツでは不吉の象徴なんですよ？」

さぁ、今助けますよ。

ＳＩＤＥ　千冬

全てが終わり、ハルフォーフ大尉がボーデヴィッヒを抱えて管制室

に入ってきた。ここにいるのは私、山田君、そして一夏たち。だが、全員が何も言えない。ハルフォーフとオルコット、デュノアは気絶しているボーデヴィッヒの介抱を行っているが、羨ましいな。

「……初めまして。そう言っておこうか？　ドイツの『黒い森』に会えて光栄だ。いや、むしろ『ドイツのヒュッケバイン』と言ったほうがいいか？」

ヒュッケバイン。確か、ドイツ語で不幸を呼ぶ凶鳥だったか？　初対面の人間に何を言うんだこいつは。

「……白々しいな。まぁ、こちらも『騎士王』に会えて光栄だ。それとも…古きよき大英帝国のように『海賊王』と呼んだほうがいいか？」

こいつもか。というか、こっちの場合はあまりマクシミリアンの機嫌を損ねるのは不味いのではないか？

「おやおや。ずいぶんな言い方だ。こちらが優位だということに気づいているか？」

「舐めるなよ？」

「「……フフフフフ」」

この二人の男のせいで管制室の空気が重い。私自身経験は無いのだがこれが『交渉』なんだろうな。いや、何か違う気はするのだが。

「さて、答えを聞こうか？」

「……私が貴様との窓口になる。そして、そちらの『クローズプラン』に協力するという結論が出た」

「手っ取り早い回答は好きだな」

「……この状況では選択肢はなかろう」

「確かにな」

こいつら……せめてそのような話は外でやれ。というか、なんでそのように即答で…いや、もはや決まっていたことを確認しているだけなのか？

「あの…少将。隊長…いえ、中尉の処分は？」

ハルフォーフがボーデヴィッヒを抱きながら口を開く。だが、今回の件は前回の件と合わせてかなりまずい状況になっている。先程のマクシミリアンの言葉をそのまま取るならばドイツはイギリスの下に不本意ながらついたという事になる。そうなった原因であるボーデヴィッヒに矛先が向かないはずがない。だが、何も出来ない。そうする権利が私にはないから。

「本来ならば銃殺刑だ。軍法会議に召還するにあたり軍籍を戻したが、中尉が引き起こした自体により我が国が負ったものは多すぎたからな」

飛び出しそうな一夏を篠ノ之や凰が抑えているが、マズイな。一夏が殴りかかりでもすれば…一気に一夏の立場は悪くなる。それでなくてもこの男は私たちと同じ年でありながらドイツ軍の裏を取り仕切る男。マクシミリアンと同等のやり手がそう簡単に考えを変えるはずもない。

「だが…中尉の先日の件や今回の件は『ハイツマン准将による洗脳の結果』であると調査結果がでた」

なんだと？　つまり…ボーデヴィッヒの犯した罪状をもみ消したのか？　その准将に全ての罪をかぶせたと？

「その結果准将を軍法会議にかけ、罪状などを鑑みてつい先刻極刑

に処された。つまり、ボーデヴィッヒ中尉は『操られた』ため罪状もある程度軽減された。そして、ハルフォーフ大尉」

「ハッ！」

「貴様に新たな命令を与える。本日より、ＩＳ学園に『戦闘教導官』として出向。『未だ洗脳が解けているという確証が持てない』ボーデヴィッヒ中尉の監視を行え」

一日一回の報告を忘れるな、そう言い残してミハイルは管制室を出て行った。それに続くようにマクシミリアンも楽しそうなものを見るような笑顔でミハイルの後を追っていった。一体何が？

ＳＩＤＥ　？？

「ずいぶんと甘い結果だな？」

管制室を出たミハイルを追ってきたマクシミリアンは苦笑しながら

そう告げた。ミハイルは仏頂面のまま口を開いた。

「……ボーデヴィッヒを失うのはドイツ軍としても痛い。それを考えただけの結果だ」

「それにしては…『ラウラ・ボーデヴィッヒを妹として引き取った』ことはどう説明をする？　まぁ、こちらとしては小娘一人くらい『どうでもいい』のだが、個人的な興味で聞きたい」

マクシミリアンはそう言ってカードを切った。ドイツ軍からイギリスに提出された書類には、ラウラをミハイルが『妹』として引き取ったことが書かれていた。無論、それには様々な意向があったのだろうが、そこは書かれていない。

「……」

「娘として引き取るにはしがらみが多すぎる。ハイツマンを『父』として認識している彼女にとってはどうあっても『父』は奴だからな。そもそもハイツマンは今やドイツ軍でも憎悪の対象だ。その『娘』であるラウラに矛先が行く……それを危惧してか？」

先ほど出てきた洗脳という言葉は間違いではなかった。ハイツマンにより『刷り込み』が行われていたのだ。故に、ハイツマンやその派閥の人間の命令には従うようになっていた。幸いだったのは、そ

のほとんどがラウラを『ドイツの栄光を取り戻す道具』としてみていたため『慰み者』として使わなかったことだろうか。

「……ＤＮＡ検査の結果、中尉の卵子提供者は私の母だ」

「ほう？」

ミハイルの告白にマクシミリアンは目をみはった。まさかそのような事態になっていたとは知らなかったから。だが、これはこれで面白そうな結果になると思い口を噤んだ。

「私の母は体が弱かったので、体外受精を行っていた。その際に卵子が流出したらしい」

「つまりは…異父妹ということか？」

「いや……同腹だ。父の精子も使われていた。ハイツマンは私の父に軍の派閥競争で負けている。奴にとって中尉はドイツの栄光を取り戻す道具であると同時に父に対する復讐でもあったのだろうよ。ＶＴシステムの件で尋問していた際にわかったことだ」

「…情が湧いたか？」

ミハイルからはマクシミリアンも少し身構えるほどの殺気が出ていた。ミハイルは両親に対して並々ならぬ敬意を持っていたという。それを汚されたのだ。こうもなろう。

「生まれはどうあれ…私の父と母から生まれた私の妹だ。両親はどのような状況であっても『家族』を守れと常々言っていた」

「（…ハイツマンはどのような末路を迎えたのだろうな）」

極刑になったとはいえ、情報を吐かせる際に拷問を仕掛けたはず。その時の苛烈さはどのようなものなのだろうか。とりあえず、マクシミリアンは心のなかで十字を切っておいた。別にクリスチャンではないが。

「ふむ。だが、それなら兄として会ったらどうだ？」

「……今更だ。そもそも『黒い森』を受け継いだ際に親族とは決別した」

諜報部というものは他部署からも恨まれやすいし、他国からも同様。そのため、ミハイルは情報操作により自分に親族はおらず『ケーニッヒ』という姓も一致しているのは偶然であるように操作したのだ。

「別に今の情勢なら問題はないと思うし、そもそもこちらとの窓口兼交渉役であるお前の機嫌を損ねる奴はいないと思うが…ん？」

マクシミリアンが向けた視線の先には、クラリッサやラウラを始めとする『先程まで管制室にいた面子』がいた。

「（ふむ……なにやら面白そうな予感）」

マクシミリアンの予想通りクラリッサと手をつないでいたラウラが呟いた。

「お兄ちゃん？」

「……」

どうも復活してから若干幼児退行が起こっているらしいラウラ。今だってクラリッサと手をつなぐという先日まではあり得なかった光景がある。

「……私に妹などいない」

「で、でも…」

そもそも精神的に幼いラウラにとって先程の話は聞き逃せないものだった。ラウラが一夏に嫉妬したのにも血の繋がった家族がいるという事が原因でもあったから。だから、確かめたい。目の前にいる人が自分の実の兄なのかを。

「……ミハイル。妹の望みを叶えるのも兄としての勤めだと思うが？」

「……私に妹などいない」

お節介からマクシミリアンがミハイルにそう進言するが、ミハイルは頑なに拒否する。

「いいじゃないか。そもそも、今のお前ならば…危害を加えようとする連中を返り討ちにすることくらい楽だろう」

マクシミリアンがここまでする理由は、ラウラがかつてのセシリアと同じ目をしているからだ。両親を亡くして不安だったセシリアと今のラウラを重ねているからでもある。それに、先程も言ったがもはやドイツ軍にミハイルの機嫌を損ねる輩はいない。ただでさえ、一連の騒動でイギリスに負い目があるドイツ。そして、裏工作によりミハイルを窓口に指名し、それ以外の人間は信用しないと女王陛

下の名のもとに宣言したのだ。つまりドイツの生命線であるミハイルの機嫌を損ねる人間はいないだろう。

「お兄ちゃん…？」

不安そうにミハイルを見上げるラウラ。それを見下ろしていたミハイルは眉を少しひそめると――――。

「……勝手にしろ」

ミハイルはそれだけ言い残して歩き出した。しかし、少し離れたときに立ち止まり部下にヘリの用意をさせると一言。

「……あまり会ってやれんが……息災でな。ハルフォーフ…ラウラを頼む」

「お兄ちゃん！」

「了解です」

ミハイルの言葉にラウラは顔を輝かせて大きな返事をした。クラリッサも敬礼で応えた。

「（フフフ。仲間が増えた）」

「お兄様……何か変なことを考えていませんか？」

「いやいや。あの男も不器用だなぁと思ってな」

『仲間』を増やすことに成功したマクシミリアン。セシリアのジト目を頑張って無視していた。

結果としてラウラはＩＳを取り上げられたが、ＩＳ学園で一般常識などを学ぶことになった。そして、今までの反動なのか言動が幼くなったのだが――。

「えっと…」

「可愛いなぁ…」

「あぅ」

あんまり問題はなかった。

「なんだろう。納得行かない様な」

「一夏さん。私たちにはそこら辺に入り込む権利はありませんわ」

蚊帳の外に置かれていた一夏たちはそう言ってラウラを見守っていた。そして、意外にも鈴がラウラを構うという自体に発展していた。どうやら、何かを刺激されたらしい。

「そうか。中尉は元気か」

『はい。それと…少将。プライベート通信なので名前でも構わないと思いますが』

「けじめだ」

クラリッサからの報告をミハイルはコーヒーを飲みながら聞いていたのだが、クラリッサから一枚の紙を見せられると固まった。そこには、ラウラが書いたと思わしき一枚の絵があった。そこに書かれているのは拙いながらもミハイルの似顔絵だった。

『その…中尉が「お兄ちゃんに見せる」といって書いたものなのですが』

「……」

クラリッサは恐る恐るミハイルを見る。そこには、嬉しいのだがどうやって表現すればいいか迷っている一人の兄がいた。

『（……えっと……もしかして少将って意外にも？）』

いつも鉄面皮の顔しかしらないクラリッサにとってはとても新鮮なものだった。

「……大尉。ラウラをくれぐれも頼む。それと……その……その絵を……送ってもらいたい」

『了解です』

クラリッサはマクシミリアンから言われていた「ミハイルは不器用な兄」という言葉を思い出していた。そして、そんなミハイルを見ると可愛いとも思える。

『少将。ラウラのことはお任せください。それと、ラウラが甘えてきたらちゃんと応えてくださいね？』

「……努力しよう」

『（……うぅむ。そろそろ彼氏欲しいと思っていたけど、少将狙ってみようかしら？）』

クラリッサ。名実ともにラウラの『姉』になる準備を始めた。

「王虎。仲間が増えたようだ」

「シスコンの？　誰よ？」

「ドイツの『黒い森』だ」

「マジか！　よし、今度妹談義に誘うぞ！」

シスコン同盟にミハイルが加入する日も近い？

第３４話　決着（後書き）

クラリッサの機体は「黒い枝」なのでテンタクラーロッドなどの鞭？系を主武装にしてみました。一応、元ネタのラフレシアの奴よりも攻撃力は上がっています。
クラリッサが遺伝子強化体かは知りませんが、ナノマシン移植者なので制御は結構できるということで。

ということで、ラウラの兄にミハイルがなりました。まぁ、ラウラは試験管ベビーなので必然的に精子・卵子提供者が必要だろうとこうしました。
そして、原作ラウラの位置にクラリッサが入ることになりました。ラウラは、多分このまま幼女要員として頑張ってくれるでしょう。

さて、次は福音事件ですが……まぁ、そろそろマクロスを・・・

第３５話　裏交渉

「一つ聞きたい。なぜ、私がＩＳ学園にいる？　私は交渉事と聞いていたのだが？」

「なぁに…仕事の話はある。だが、その前にリラックスしても罰は当たらんよ」

ここは日本のＩＳ学園の校門。そこに三人の男が立っていた。マクシミリアン、王虎、ミハイルである。ミハイルは当初は『クローズプラン』についての打ち合わせという名目でイギリスに向かったのだが、マクシミリアンに日本でゆっくりと話そうということでここまで連れてこられた。まぁ、軍の事務局からも有給消化をせっつかれていたのでちょうどいいといえばそうなのだが。それに、マクシミリアンも仕事はしっかりとするがその前の休憩を取っておきたいという思惑がある。

「まぁまぁ。いいじゃないか。今日は授業参観だろ？」

ＩＳ学園の授業内容を公表する目的で開かれている授業参観。招待状がなければ入れないが、それでも子供がどのような勉強をしているのかを知るにはいい機会である。

「だから私はハルフォーフからの報告だけで」

「でも、ラウラちゃんから届いたんだろ？　行くつもりはなかったのにしっかりと招待状は持っているって…」

王虎の指摘通り、ミハイルの手にはラウラからの招待状があった。確かに、マクシミリアンが日本に連れてこなければいくつもりはなかった。だが、持っているということは行きたかったのだろう。

「ミハイル。妹がいる先達としてアドバイスだが…素直になったほうがいいぞ？」

「そうそう。そのほうがラウラちゃんも喜ぶって」

「……そう、か」

シスコン二人の説得に折れかけているミハイル。まだ覚醒までは遠いようである。

「ふむ。やはりＩＳに限らず、この学園の教育水準は高いな」

「……王虎はどうした？」

授業を見ている保護者に混じり教室の隅で授業を観ているマクシミリアンとミハイル。小声で会話しながらもちゃんと授業を評価している当たり侮れない。

「王虎は妹が隣の組だからな。そっちにいっている」

「…そうか」

先程から壁の向こうからなにやら騒がしい声が聞こえているが、華麗にスルー。どうせ王虎あたりが大騒ぎしているのだろう。というか、あの男は世界的に有名な映画スターなのに素顔で動いているがいいのだろうか？

「さて、ＩＳの模擬戦を見ているが…ミハイル。お前はどうやって攻略する？」

「情報操作により罠にかけた後一気に殲滅。もしくは、人質をとり取引というところか」

「まぁ、確かに有効だわな。それがいいか悪いかは置いておいて」

何気に恐ろしいことを話している三人。ちなみに、この三人の中で一番恐ろしいのは誰かというならばミハイルだろう。マクシミリアンと王虎はその知名度からあまり『非道』な事はできない。しかし、ミハイルは『諜報部』という秘匿性などから様々な手段をとることができる。だからこそ親類縁者と決別したらしいのだが。

「それよりも…私はあの織斑一夏という少年が気になる。まず、錬度が低い」

ミハイルの目線の先には箒と試合を行なっている一夏がいた。ミハ

イル曰く「直線的すぎる攻撃」「フェイントもなにもあったものではない」との事。

「ふむ。確かに…。王虎、お前はどう思う？」

「正直に言うなら…鈴が選んだなら別に構わないんだが……それでもなぁ」

自分を倒すまでとは行かないまでも、という感じなのだろう。

「ふむ。ならば、鍛えるか？　セシリアにもいい刺激になるかも知れん」

マクシミリアンも一夏が『強く』なればセシリアもいい刺激を受けると考えたのだが、ミハイルはあまり乗り気ではない。

「……私はそのような暇はない。やるなら勝手にやれ」

ミハイルは軍内の再教育の指揮をとっているため、そのような暇はないとのこと。それに教育ならクラリッサがいるためそちらに任せるらしい。

「そういえば、クラリッサ女史は部隊長ではなかったか？　それが本国にいなくて大丈夫なのか？」

マクシミリアンはある意味で象徴的な存在のため自由にしているし、すでに『クローズプラン』はマクシミリアンがいなくても進むようになっている。そのため、このようなことができるのだが、クラリッサのように隊長ならばそのようなこともできないのでは？　そう思ったが、そもそもドイツ軍全体が再教育中のためクラリッサの部下のその再教育プログラムを受けている。

「ハルフォーフは、趣味に走る傾向があるが軍人としては合格点だ。だから、ボーデヴィッヒの監視に回した」

「普通はそこで癒着などを疑われるのだが…そのような事を考える暇もなかったということか？」

「そもそも私が所属している派閥が上層部を牛耳っているからな。対抗派閥は粛清で大半が消えた」

要するにドイツは一頭体勢になったということなのか？　まぁ、それならそれで『お願い』しやすいことなのでマクシミリアンはそれ以上何かを言うことはなかった。

「まぁ、織斑一夏をどうするかは今は置いておくとして……『お話』

をしよう」

「ようやくか」

「俺もいていいのかい？」

「別に構わんぞ？　まぁ、周囲の警戒はしてもらうが」

マクシミリアンが指を鳴らすとどこからともなく現れたチェルシーがマクシミリアンにかばんを手渡した。

「ご苦労。チェルシー、暫く下がっていろ……そうだな。久しぶりにセシリアと話でもしてこい」

「はい。では、失礼いたします」

チェルシーはそれだけ告げられると再び姿を消した。王虎が周囲を警戒してもチェルシーの気配はどこにもない。相変わらず忠実なメイドである。

「で？」

ミハイルは懐から取り出した葉巻の先端をナイフで切るとライターで火をつけ煙を吐き出した。

「まぁ、見てもらえれば早い。ドイツにとっても悪い話ではない。すでに、アメリカも製造に着手している。アフリカと中東はそれぞれ連合を組み製造中だ」

渡されたのは、すでにイギリスが完成させた『マクロス級』や『アームド級』など宇宙戦艦のデータとそれらの『宣伝』の計画が書かれた書類。

「……『クローズプラン』の最終目的である超長距離宇宙移民船の情報、か」

「そう。そこに書かれていることが『クローズプラン』の目的だ。宇宙移民船による外宇宙への進出。それこそが我が目的」

「それが『超長距離宇宙移民計画』……『クローズプラン』か」

マクシミリアンが提唱し進めている『クローズプラン』は、一般にはＶＦシリーズやＡＣシリーズを運用し、男女格差を無くし宇宙進出を実現しようとする計画とみなされている。しかし、各国上層部や一部の識者などは気づいている。マクシミリアンが本拠イギリス

の海底で『何か』を作っていることを。そして、先日から少しずつ情報が『流出』しはじめていた。

曰く、それは巨大なロボットである。

曰く、それは巨大な戦艦である。

など一見すれば眉唾ものだが、一方でＶＦシリーズやＡＣシリーズを完成させているオルコット・インダストリーならばやりかねないという意見もある。だからこそ、『クローズプラン』の真の内容を知ろうと躍起になっている。

「……人形に変形可能な全長約１，２００Ｍの宇宙戦艦、か。世界各国の宇宙開発事業団を抱き込んでいるから恐らく宇宙戦艦を作っているとは思っていたが…ここまでの巨大戦艦は必要なのか？」

さすがにここまでの巨大な宇宙戦艦を作っているとは思わなかったようで、マクシミリアンにそう告げるが、マクシミリアンはくつくつと笑うだけ。

「例えば、全長１０Ｍの巨人族がいたり、他者の肉体を乗っ取る種族、宇宙生物など…宇宙は私たちの想像を越える存在がいるはずだ。それらへの備えは必要だろう？」

「……ずいぶんと具体的だな。貴様……何者だ？」

「さぁ？　私は私だ。それに……その言葉は聞きあきた」

オルコット・インダストリーを掌握したとき、イギリスを掌握したとき、ＶＦシリーズやＡＣシリーズの根幹システムなどを発表したとき、そのような言葉をつねづね言われている。

「ドイツには悪いが…イギリスの下についてもらう。ヨーロッパは統一させてもらうぞ？　よもや『嫌だ』とは言わんな？」

「……私は軍人だ。政治には着手しない」

「分かっているさ。すでにヨーロッパ各国に話は通している。私がいいたいのはドイツ軍の技術屋を借りたいということだ。まあ、明日にでもドイツ政府から通達が来るのではないか？」

ミハイルはただ無表情にマクシミリアンを見据える。ミハイル自身もその仕事柄様々な人間を見てきたが、それでもマクシミリアンは異常だった。

「貴様は…何者だ？」

「……ふぅ。どう聞かれようと私だとしか言いようがないのだがな？」

「貴様は歪だ。ＡＣシリーズのデータはいいとしよう。戦車などの機動兵器をパーツごとに分けることで整備性や汎用性を得ようとしたのはかつての大戦でも考えられていたからな。だが、ＶＦシリーズとこのマクロス級は違う。ＩＳとは全く違う別系統の技術だ。それを貴様が「それは篠ノ之束にも言えると思うがね？」……」

「ＩＳを作り上げた彼女にもその言葉は当てはまるがね？」

もし、マクシミリアンの技術の出処を不審に思うならば束も同様。むしろ『オルコットの鬼才』という前評判があったマクシミリアンよりも無名の存在だった束のほうが不審に思われていたのだ。

「それと……そちらのコネを使ってこの情報を不自然に思われないように『ハッキングされて』欲しい」

「……太平洋上でのマクロス級の運用試験。これを流すとどうなるか分かっているのか？」

「ああ。亡国機業や反抗勢力を潰す、または勢力を削ぐにはもって

こいだろう？」

自作自演と言えなくもないが、マクシミリアンは直接関与はしていないし『ハッキングされた』のはただ単に警備が甘かっただけ。そして、そもそもドイツはイギリスの『お願い』の結果なので被害はそこまでない。

「まぁ、仕方ないな。ドイツは軍の再編などで忙しいからな」

ミハイルはこの裏工作が書かれている書類に今だ火が付いている葉巻を落として書類を燃やした。

「おっと葉巻をうっかり落としてしまった」

「それは行けないな。最近は喫煙者も決められた場所でしか吸ってはならないんだ。気をつけたまえ」

白々しいにもほどがある会話。だが、ミハイルは基本的にこのように『会話』をする際にはどこであろうと葉巻を吸う。見られては不味い書類などをすぐに焼却するために。

「（……こいつら怖い）」

一人蚊帳の外の王虎は遠い目だった。

第３５話　裏交渉（後書き）

時間がかかったなぁ。多分、更新スピードは落ちると思います。

とりあえず、ちゃくちゃくと『お披露目』が計画されています。そろそろ、ＯＲＣＡ側に焦点を持っていくつもりです。

ところで、ＡＣ５買った方いらっしゃいます？　作者は金銭的・時間的な意味で購入していませんが…。

第３６話　一夏の弟子入り志願

マクシミリアンたちが『お話』をしている一方で、学園の食堂で会話に花を咲かせている一団が居た。

「チェルシー！」

「お久しぶりですお嬢様」

マクシミリアンに暇を貰ったのでセシリアたちに会いに来たようだ。ここにはいつものメンバーにクラリッサがいる。すると、チェルシーとクラリッサが見つめ合った。

「「……」」

そして、がっしりと握手を交わした。どうやらなにか共感するものがあったらしい。

「ところでそちらの娘は？」

チェルシーはふとクラリッサの横に座っている銀髪の少女が気になった。確か、『例の子供』だったはず。

「えっと……お嬢様。これは……」

写真では気の強そうな少女だったが、クラリッサの横でオムライスを食べているのはまるで見た目相応の幼女。

「ええと……まぁ、そういう事ですわ」

チェルシーは『できる女』なので詳しいことは聞かないし聞くべき地位でもない。それに、仮に聞けるとしてもここでは聞かない。ラウラの件はそれこそヨーロッパの政変の中心になっている。

「うん？　なんだ、皆揃っているな」

「あ、お兄様」

そして、現れたのは兄貴三人組。尤も、ミハイルは居心地が悪そうにしていた。彼は常に軍人であれと育てられていた上に、これまでの役職が役職なので青春真っ盛りで平和なＩＳ学園はすごく居心地が悪いのだ。

「……」

「おい。ここは禁煙だぞ？」

懐から葉巻を取り出すが、すぐに王虎に取り上げられる。相変わらずの鉄面皮だがどこか困っているようにも思える。それを見て一番唖然としているのが一夏。ミハイルは先のラウラの件でとても厳しい人間だと思っていたのだが…。

「（え？　この人……そんなに悪い人じゃない？）」

一夏はそう見たが、実際は公私混同をマクシミリアン以上にしないだけである。どうやら『お話』は終わったので今はプライベートらしい。

「しかし、やはり学校の独特な空気はいいものだ。ちなみに、お前らはどのような学生時代を過ごしていた？」

いつの間にかセシリアの隣で紅茶を嗜んでいるマクシミリアンは王虎たちに話を振るが、返ってきた答えはマクシミリアンが望んでいたようなものではなかった。

「え？　俺はひたすらエキストラのバイトと拳法道場に通っていて、中学卒業後にはすぐにプロダクションに入ったから……日本でいう『中卒』だぞ？　一応、高卒認定試験は受かったし、さすがに鈴の兄貴が馬鹿だと格好が付かないからオックスフォードだっけ？　そこの大学に通って卒業したけど」

王虎はまぁ、ある意味で青春時代を謳歌していた。ただ、妹の為に大学に行く辺りシスコンだろう。一方のミハイルは――。

「……義務教育を終えたら軍学校に入った。そこからはひたすら……といったところか」

青春どころかひたすら軍人になるために生きてきたらしい。マクシミリアンは不満げだが、マクシミリアンもそんなにいい学園生活を送ってきたわけではない。だから他人がどう学生生活を送ってきたのかに興味が有るのだ。

「うぅむ。若いうちから成功すると青春できんな」

「自分を成功者だと豪語するマックスはスゲェよ」

「人の先頭に立つには傲慢なまでの自信も必要だからな。まぁ、あくまで心構えだがな」

くつくつと笑うそのさまはまさに『王』というべきだろう。そのようなある意味男のあこがれの姿であるマクシミリアンに近づく少年が一人。一夏である。

「あ、あの……マクシミリアンさん。俺を……鍛えてください！」

「ん？　構わんぞ」

「え？」

思春期の男は自分よりも強い男に憧れるという。だから、一夏はマクシミリアンに特訓を頼んだのだが、即答されたので呆気に取られた。しかも、ＯＫである。

「折角だ。お前らも参加するか？」

「よし。やっぱ男に生まれたからには女を守れるくらいには鍛えあげないとな！」

「……そもそもこの小僧が上手く動けばラウラの件もどうにかなったかも知れんな」

「え？　え？」

いつの間にか王虎に頭を鷲掴みにされた一夏はそのまま引きずられていった。なんかミハイルがシスコン覚醒しているような…。

「ま、待て！　一夏を連れて行くとなると「すでにＩＳ委員会に話は通した」」

そもそもＩＳ委員会を構成しているのは、ＩＳを使って女性優位に世界を持って行こうとか、今まで虐げられていた女性に陽の目をなどという思考ではない。ぶっちゃけるとＩＳで得られる利権を欲しがる者たち。なので、ＩＳで得られる利権よりももっと『ウマイ話』に食いつくのも自然なこと。

「（ＩＳ優位が崩れた後の地位を保証するというだけで了承するとは…まぁ、先を見る目はあるか）」

各国の感情的になりやすい連中よりも長生きはしそうである。まぁ、そのような裏取引のおかげで『マクシミリアンの監視下に限り』織斑一夏という少年は自由気侭に世界を動ける。だが、それを一夏たちは知らない。しかし、それでいいのかも知れない。まだ『世の中』を知らない子供には教える必要もない。

「えっと…」

一夏は一夏で絶賛混乱中。しかも、このままだと自分はＩＳ学園を離れる事になりそう。友人たちと離れるのはあまりしたくはないのだが――。

「……マクシミリアン。別に鍛えるくらいならここでもできるだろう？　わざわざ各国を刺激しなくてもいいのではないか？　下手に反抗勢力に動かれてはまずいぞ」

一夏の内心を察知したのかミハイルはマクシミリアンにそう進言してみた。ただし、最後の方は誰にも聞こえないような音量で言ったが。しかし、マクシミリアンは――。

「フッ。望むところだ。むしろ、そのほうがこちらとしてはいいのだがね」

むしろ反抗勢力が動いてくれたほうが後顧の憂いを絶つ意味でも歓迎すると告げた。そろそろＯＲＣＡ旅団の全員が戦いたくてうずうずしているのだ。出来ればそこそこ大きな戦闘になってくれるとありがたい。そこは亡国機業や反抗勢力の手腕に期待することにしよう。

「では、ここで鍛えるか。とりあえず、エイと真改を呼べば大丈夫

か。チェルシー」

「こちらです」

チェルシーから通信端末を受け取るとその場で通信をつないだ。通信を受け取ったのはメルツェル。映像の向こう側ではステルス機に手足が生えたような機体がアリーナのような場所を動き回っていたが、すぐにそれもメルツェルがシャッターを下ろしたので見えなくなった。

『失礼。丁度テスト中でしたので。ところで何用でしょうか？』

「エイと真改をＩＳ学園に派遣してもらう。エイには『オーメル・ライール』を持ってくるように伝えろ」

『了解です。では、今日の午後にはそちらに着くと思いますので』

通信を切ったマクシミリアンは両手を広げて一夏に向き直った。コートが広がり、尚且つ王虎が後ろでライトを使って演出しているためどこぞのラスボスっぽい。

「さぁ、織斑一夏。ミサイルの扱いに関してはイギリス一のエイ・プールと、剣撃戦闘では旅団トップクラスの井上真改。この二人の

特訓を受けて君は生きていられるか？」

「え？「がんばれよ？」王虎さん？　なんでそんなに穏やかな顔なんですか？　そして、ミハイルさん。なんで十字を切っているのですか？」

「……まぁ、お前ならラウラの良い友人になれると思っていたが残念だ。まぁ、ラウラが毒牙にかからなかっただけいいとしよう」

王虎は実際に見て戦っているので分かる。ミハイルは情報で知っている。だから、一夏の冥福を祈ったのだ。ミハイルは段々とシスコンに覚醒しているようだ。

「安心しろ。生かさず殺さずは我らの得意技だ」

「技じゃねー！」

一夏の明日はどっちだ？

ちなみに、放って置かれた女性陣は――――。

「あ、この紅茶美味しい」

「フフッ。チェルシーの淹れてくれるお茶は美味しいのですよ？」

「光栄です」

「ムムム。チェルシー。やはり男は胃袋で掴むのがいいのですか？」

「ええ。それはもう！」

「ヒートアップしているね……」

「わ、私も教えてくれ！　一夏が惚れるくらいの！」

「負けるか！　アタシにも教えて！」

「……媚薬を使えばいいと思う」

「ラウラ。だめだよそれは」

女子会をしていた。ちなみにラウラは元々が軍人教育しかされておらず一般常識には疎いため中々えぐいことを普通に言う。ラウラの変化を知ったドイツ軍などにはむしろそれがいい！と言う連中もいたのだが、何故か神隠しにあっている。噂では諜報部が動いているとか何とか。

第３６話　一夏の弟子入り志願（後書き）

一夏の強化が始まります。最初はエイではなく有澤にしようと思ったけど、あいつはやばいからやめておいたのです。とりあえず、ミサイル避けよう一夏。

第37話　一夏、特訓する

拝啓、親愛なる千冬姉へ。正直、千冬姉がＩＳ学園に勤めているにはびっくりしました。でも、よく考えれば俺を育てるための資金など普通にＯＬなどでは稼げない金額だったのを思い出しました。だから、少しでも千冬姉の助けになるように藍越学園を受験しました。まぁ、結果としてＩＳ学園に入ることになりましたが、箒や鈴との再開やセシリアとの出会いで少しだけ成長できたのではないかと思います。シャルやラウラとも仲良くなれたのでもっと強くなりたいと思います。でも――。

「呆けている暇はないですよ？　さっさと動いてください」

「……隙あり」

「ウワァァァァ！」

誘導式ミサイルの雨とＩＳ用近接ブレードを生身で振り回しながらこっちに近づいてくる男の人からどうやって逃げればいいのでしょう？

「……すごい弾幕だな」

一夏に殺到するミサイルの雨は周りから見ているだけでも２０発くらい。これを避けている一夏は凄いのだろうが、ミサイルの発射間隔などを考えると手加減しているようにも思える。

「まぁミサイルの扱いに関してはエイさんはイギリス一ですから」

一口に「ＩＳ操縦者」と云えども得意な分野などがある。例えば、千冬はモンド・グロッソで優勝しているため全ての分野において高い水準を誇っているが、一番得意といえば高機動近接戦闘だろう。だが、それ以外の分野なら千冬以上の者もいる。エイも一応その一人。ミサイル部門ではイギリスでは敵うものはいない。

「まぁ、多種多様なミサイルを扱うのは私でも難しい」

そもそも千冬は正直に言うならば銃火器は苦手だし、細かいことを考えるのも好きではない。モンド・グロッソでも銃火器を持った相手の懐に入り込み一太刀というのが基本戦法だったから。

そしてミサイルもただ撃てばいいというものでもない。速度、弾頭など多種多様。それらを適切に使うにはやはり修練を積む必要がある。エイはミサイルを使わせれば世界トップクラスだろう。

「まぁ、有澤を呼ぶつもりだったがさすがに東京ドーム程の広さの草原を荒地に変えるほどの面制圧能力はやめておこうと」

「有澤とは…有澤重工か？　まぁ、あそこならそれも可能か」

ミハイルは諜報部だから知っていた。有澤重工の『変態加減』を。作る武装は全て実弾。そして、最も力を入れているのはグレネード。噂では有澤重工が開発したＡＣ『雷電』は超大型グレネードキャノンを装備しているらしく、その威力はクラスター爆弾数発分に匹敵するとか。

「……マクシミリアン。お前の部下は一体…？」

ミハイルの話を聞くと千冬は改めてマクシミリアンの底の知れなさを思い知る。有澤重工は日本の企業ということで千冬も話は聞いていた。だが、そこまでとは思っていなかった。

「まぁ、特訓はエイたちに任せておけば問題はあるまい。少し散歩に出るか…ミハイルたちも来るか？」

「俺はパス！　折角だから、一夏に太極拳をさせようかと。あれって結構筋肉使うからな」

「……俺は「閣下はこちらですよ～」……だそうだ」

王虎はミサイルの雨の中で真改とつばぜり合いを行っている一夏を見ながらそう告げる。どうやら一夏はこの後太極拳をするらしい。

ミハイルはラウラとクラリッサに連れられて食堂へ向かった。ミハイルはマクシミリアン以上に自由がきかない。だから、会えるときにたっぷり甘えさせてやってほしいとクラリッサに言われたのだ。そもそもがストレスなどの溜まりやすい仕事柄のためプライベートは趣味を目一杯楽しむ気質の上某シスコン兄貴たちに影響され始めているため素直に従った。

「ふむ…ならば、一人で行くとするか…いや、さすがにまずいか」

そんなことを考えていると、千冬が付いて行くと言った。どうやら、監視の意味合いもあるようだ。

「ウォォォォォ！」

「……直線的。故に……見切りやすい」

白式で瞬間加速を使いエイに迫ろうとする一夏。しかし、それは真改により阻まれる。真改が装着しているのは『ＥＸギア』と呼ばれる電力駆動型のアシストスーツ。ＩＳ程の加速性もなければイメージインターフェースも存在しない。しかし、それでも使い手次第でＩＳに迫る能力を持つ。

「くそっ！」

一夏は先にミサイルをばらまいているエイの『オーメル・ライール』を落とそうとするが真改により阻まれる。瞬間加速で通り抜けようとしても狙ったようにミサイルが降り注ぎ足を止められ、真改が追いつく。故に一夏はエネルギーだけ消耗する。真改と斬り合っても

真改のほうが強い。

「こんなところで負けられるか！　俺は強くなるんだ……皆を守るために！　もう、蚊帳の外に置かれているのは嫌なんだよ！」

自分が誘拐されたとき、アンノウンＩＳが乱入してきたとき、そして先日のラウラの暴走事件のとき、全て一夏は蚊帳の外だった。関わってはいるが、解決したのは全て別の人間。だから強くなりたい。もう守られるだけは嫌だ。一夏はそう叫んだ。

「……未熟」

しかし、真改は一夏を切り捨てる。逆刃刀だったため打撲だけですんでいるが、一夏にしてみれば手加減されたようにしか思えない。

「俺は……俺は――――ッ」

「焦っては駄目です」

地面にたたき落とされ哭く一夏。それを見下ろしていたエイは優しく諭す。

「そもそも貴方たち子どもがこのような戦力を持つ事が間違っている。でも貴方は、貴方たちはそれを選んだ。それは貴方のように『強くなりたい』という思いからでしょう。なら、だからこそ焦らずにゆっくりと強くなっていけばいいのです。織斑千冬も、クラリッサ・ハルフォーフも、そして今現在ＩＳを扱っている軍人たちも誰もが最初は弱かったから」

誰しも初めから最強だったわけではない。あの千冬でさえ第一回モンド・グロッソにおいて何回か負けている。それは、ＯＲＣＡ旅団のセレン・ヘイズだったり、アメリカのトリガーハッピーだったり様々な人間に負けた。いくら束のサポートが合ったとしても、いくら剣術を習っていたと言っても、マクシミリアンの目的のために自ら強化手術を受け己を鍛え続けていたセレンや母国を守るために軍人となった者たちのほうが実際の戦闘は慣れていた。だから千冬は負けてもそれを糧としてきた。だからこそ優勝したのだ。だからこその『ブリュンヒルデ』。

「……弱肉強食」

「まぁ、真改の言葉は極論ですが…強くなりたいと思うならそれこそ泥水を啜ってでも全てを糧としなさい。負けたのなら何故負けたのかを研究しなさい。相手が強いなら何故強いのかを、付け入る隙を知りなさい。嘆くだけなら誰でもできます。勝ったとしても何故勝てたのかを研究しなさい。貴方のお姉さんもそうしていましたよ？」

エイは負けようが勝とうが全てを糧にしろという。それは千冬も誰もかれもが行ってきた。特に千冬はそれが顕著だった。頼れるものは自分だけ。だから誰よりも強くなければならない。勝てても何故勝てたのかを研究していた。辛勝や負けた場合はより一層。

「とりあえず、今日はここまでです。友人たちと一生懸命勉強してください。そうすれば自ずと強くなりますよ」

「……分かりました。でも…真改さん。後で戦ってください」

「……承知」

「千冬もやっていた」この言葉が聞いたのか落ち着いた一夏は白式を待機状態に戻し、立ち上がると真改に後で剣で戦って欲しいと告げた。体を動かすのはストレス発散にもなるため真改は快く引き受けた。そして、一夏はエイに向き直った。

「ありがとうございます。なんか……視野が広がった気がします」

「それはなによりです」

エイは微笑むと右手を差し出した。一夏も一歩踏み出して握手に応じようとしたが、その際に石に躓いてしまい、エイに胸に倒れこん

でしまった。

「あら……」

「い、いや！　これは違うんです！」

エイの豊満な胸に飛び込んだ一夏は慌てて跳び退き、尻餅をついてしまう。エイは苦笑しながら頬をかき、真改は遠くをみている。一夏だけが慌てているのが実に滑稽である。

「駄目ですよ？　一応、私には好きな人がいるんですから」

「違います！　そう言うことではなく「いいいいいいちいいいいいかぁぁぁぁぁぁ！」げっ！　王虎さん！？」

土埃を挙げて走ってくるのは王虎。

「ラッキースケベする余裕があるとはなぁ！　それじゃあ、俺と鬼ごっこをしようか！　捕まったらポロリ（命的な意味で）があるけどなぁ！」

「うわあああああ！？」

一夏はすぐさま逃げるが王虎が追いかけているため恐らくすぐ捕まるだろう。

「締まりませんね」

「……未熟」

とりあえず、暴走しそうな二人の少女を抑えるために走りだす二人だった。

第３７話　一夏、特訓する（後書き）

最後が締まらないのはお約束。

真改が装備している「ＥＸギア」はマクロスＦのやつにアーマードコアの技術をいくつか搭載しているものです。

第３８話　悪夢の胎動（前書き）

今回は最後のほうで皆が大好き？なあの兵器が少しだけでてきます。

あれですよ。変態兵器のあれですよ。

第３８話　悪夢の胎動

家族というものはそれこそ多種多様。傍から見れば親子にしか見えない男女が実は夫婦だったり、すごくネガティブな男性の世話をやく女性もいるし、気弱な父親を励ます娘もいれば、母親をすごく大事にする息子もいる。まぁ、何が言いたいかというと結局のところ本人たちが納得しているならばいいのだ。

「……」

「えっと……その……」

食堂は異様な空気に包まれていた。最近噂になっている銀髪幼女ラウラの向かい側には同じく銀髪の精悍な男が仏頂面で座っている。そして、ラウラの側に座って眉間を抑えているのは最近、戦闘教導官として赴任してきたドイツ軍人のクラリッサ先生。一体三人はどのような関係なのだろうか。その時、新聞部の黛薫子の呟きが遠巻きに見ていた者たちの耳に聞こえた。

「もしかして、ラウラちゃんってクラリッサとあの男の人の子供？」

そういえば銀髪はあの男の人と似ているし、ラウラはクラリッサに

なついている。つまりはやっと見つけたから認知しろゴラァ！と、そういう事か？　そう誰もが思ったが――。

「閣下…久しぶりに妹に会うのに何時までもむっつりしていちゃ駄目ですよ？」

クラリッサがそう切り出したことでその考えも消えた。つまり、あの男はクラリッサ先生の上官でラウラの兄なんだと。

「もしかして……接し方が分からないとか？」

クラリッサがそう言うとミハイルは顔を背けた。図星のようである。クラリッサは溜息をつくとラウラを抱き寄せた。

「いいですか閣下？　ラウラは今まで一人だったんですからいっぱい甘えさせないと駄目なんです。そして、ラウラが一番甘えたがっているのは閣下なんです」

「……それは分かる。だが…あいにくとそのような経験はない」

まぁ、軍人でしかも諜報部ともなればそんな経験はない。潜入捜査などで子供と触れ合うこともあるだろうが、そこには女性や一見すればお調子者の人間が向かわされる。ミハイルが『アプヴェーア』

の総隊長になり部隊名を『黒い森』に改めるまではミハイルも一般隊員として任務に赴いていた。ミハイルが担当していたのはドコゾの要人の家にもぐりこんで、そこのメイドなどを垂らしこんでの情報収集や暗殺である。決して子供と触れ合うような任務はなかった。

「ならこれを読んでください！　これに兄妹のふれあい方が載っています！」

「……」

クラリッサが出した本は簡単にいえば超ブラコン兄貴が活躍する漫画である。正直、妹との接し方が分からない兄に見せるものではない。

「えっと…お兄ちゃん？」

「少し待て…とりあえず読む」

汚染開始？

海が見える公園があるＩＳ学園。これもスポンサーがオルコット・インダストリーのため色々とモニターとして設備投資をしているからでもある。そこの一角にある喫煙スペースでマクシミリアンはタバコを吹かしていた。

「タバコを吸うのだな」

「私は太く短くが信条だ。どうせ人間いつ死ぬか分からんからな。それにこれは普通のタバコではない」

「薬用タバコという奴か？」

「そんなものだな」

ちなみにマクシミリアンが吸っているのはタバコには変わりはないのだが、使っているのはコジマ粒子をある程度浄化することのできる葉っぱである。どうやら研究中やアンサングの調整により予想以上にコジマ漬けになっているようである。ちなみにこの特製タバコはＯＲＣＡ旅団の全員に配られており意外にも好評である。

「しかし…織斑一夏も少しは強くなっているようで何よりだ」

理由はどうあれ向上心を持った事は評価する。マクシミリアンはそう告げた。

「しかし、お前は不満なようだな。家族を大事にするのは結構だが…あまりそれに囚われすぎるのもよくないぞ？」

「貴様が言うか？」

千冬はマクシミリアンもそうではないかと言うが、マクシミリアンは首を振った。

「セシリアは大事だ。だが…セシリアには親代わりとしてチェルシーがいる。本国には友人もいる。そして、ここでも友人ができた」

どこか遠くを見るような目で空を見上げるマクシミリアン。

「恐らく、私がもし仮に消えたとしても……塞ぎこむかも知れんが、必ず立ち直ってくれる」

「どういう事だ？　貴様が言っていた宇宙進出の障害があるというのか？」

それはまるで死ぬことが分かっているかのような言葉。千冬は未だにマクシミリアンの底を知らない。

「少々厄介なことになってな。下手をすれば…死ぬかも知れないな」

マクシミリアンの脳裏に思い浮かぶのは、自身を襲撃してきた両親の仇。もはや自分の名前や記憶を失い『マクシミリアンを殺す』という執念だけで動いているはずの機械人形。

「千冬。もし…何かあればセシリアに気をかけてやってくれ」

マクシミリアンはそう言い残し去ろうとしたのだが、その腕を掴みこの場に止めようとする千冬。その目はマクシミリアンを睨みつけている。

「待て…全て話してもらう」

今までなら理解できずにそのまま逃がしていた。でも、今回は違う。

「初めて会った時からお前は同い年とは思えないほどに達観して笑っていた。束のように限られた人間しか認識しないわけではない。お前は……何だ？」

千冬の睨みを受けてもマクシミリアンは千冬が言う『達観した笑い』を崩さない。千冬はそれが気に入らない。

「ふむ……そうだな。なら……知りたいか？　私の全てを」

「……聞かせてもらう」

千冬は歩き出したマクシミリアンの後を追いベンチに座った。マクシミリアンが指を鳴らすとどこからか執事服の男が現れた。

「レイス。誰も近づけるな」

「了解いたしました」

千冬が初めて見るマクシミリアンの付き人。千冬が見ていたのはあのメイドだった。しかし、マクシミリアンの声色などを見るとあの執事に信を置いているのが分かる。

「チェルシーは元はセシリア付きだ。先ほどのレイスは私の影武者も担当している。さてと…どこから話すか。誰にも話さなかったから難しいな」

千冬は知らずのうちに口の端を釣り上げていた。だれも――――妹であるセシリアでさえも知らないマクシミリアンの内面を知れるということに。

「よく話す気になったな？」

「チェルシーたちに話しても意味はない。彼ら彼女らと私は主従だからな。私が真実だといえば真実と答える。それではつまらない」

その点千冬は信じるとしても最初は疑うだろう。信じてもらいたいが、素直に肯定して欲しくはない。マクシミリアンの心情としてはそのようなところ。結構、難しいものである。

それはどこかの研究所らしき場所。

「しかし…これが『イレギュラー』か。確保できたのは幸いだな」

そこに居たのは男。火のついたタバコを咥えながら一体の機械人形を見据える。それはかつてマクシミリアンを襲撃したＩＳ『イレギュラー』の頭部ユニット。かつてマクシミリアンを襲撃し、逃げおおせた『イレギュラー』はあるルートを通り亡国機業に流れていた。

「スコールもオータムも……何だかんだ言って手段を選ぶからな。所詮は女よ」

男は亡国機業の構成員で、スコールの同期だった。しかし、亡国機業の指針をも無視する行動故に危険視されている存在。

「さて……エム。ご苦労だったな…何ならこれから行うことを見るか？」

男が声をかけたのは部屋の隅でこちらを睨む千冬に似た少女。彼女も亡国機業のエージェント。コードネームは『エム』。本来は、この男の命令を聞く必要はないが聞かなければ体に埋め込まれたナノマシンのせいで死んでしまう。これもこの男がかってに埋め込んだ物。スコールたちも知っているが、精精裏切り防止用としか思っていない。

「スコールもオータムもなぁ……俺の考えに気づかないならそこまでの存在だ。所詮女は上辺しか見られない生き物よ」

男はそう言いながら『イレギュラー』の頭部ユニットからデータを吸い始める。そこには本来有り得ないはずのデータが存在した。

「ほう？　ソルディオスねぇ？」

それはこの世界ではマクシミリアンしか持っていないはずのデータ。それはかつて数多のリンクスを屠ってきた最凶最悪の兵器。それが何故ここに存在するかは分からない。だが、現実にこの男に渡った。

「まずはコジマ技術を奪うか。エム……行け。最悪、粒子の製造法でも構わん」

「……貴様はいつか殺す」

「クックック。この『イレギュラー』による計画の結果を見てからならば好きなようにすればいい」

エムは血が出るほど唇を噛みしめると足早にその場を去っていった。残された男は『イレギュラー』の頭部ユニットを見ながら話しかける。

「なぁ？　お前はどうしたい？　全てを殺すか？　それとも支配するか？」

男の呼びかけに『イレギュラー』は電子パネルに自らの思いを表した。

『――――イレギュラー――――消ス――――マクシミリアン――――復讐――――復讐復讐復讐

讐復讐書復讐書復讐書

者とされている男。

世界は再び混乱へと向かう。

第３８話　悪夢の胎動（後書き）

クラリッサおねーさんの彼氏ＧＥＴ作戦？　まぁ、この兄妹は程度はあれ恋愛関係などにはほとほと不器用なので。

そして、マクシミリアンと千冬はなんか……こんな感じ。うぅむ。

そして、最後はみんな大好き空飛ぶまんじゅ……では無くソルディオス・オービットです。ソルディオスにするかはまだ未定。パルヴァライザーにしようかと思ったけど見た目のインパクトでこっちにしました。パルヴァライザーも怖いけどね。

第３９話　決着と表面化

――――前世の記憶がある、そう言ったらどうする？

マクシミリアンが話したのは、自分にはマクシミリアン・オルコット以外の記憶がある。それは、アーマードコアを駆って殺し合いをしていたものやバルキリーに乗り宇宙生物と戦っていたもの。それ以外にも様々な『自分の記憶』がある。そして、バルキリーやアーマードコアの技術はその記憶から作った物らしい。

普通なら病院を紹介されるところだが、マクシミリアンの年に似合わぬ達観した言動と技術・カリスマ性などが『前世の記憶由来』だとするならば納得できた。

「なまじその記憶を持っているからこそ…現状が我慢ならん。片方がもう片方を奴隷のごとく扱うのは人類という種を衰退させるだけだ。ＩＳ委員会も、一般人もそれを理解していない。アメリカの南北戦争しかり、世界各地の紛争しかりだ」

そして、あのコジマ粒子により汚染された世界も同様。企業などが覇権を握り、民間人は奴隷のごとくクレイドルに押し込められていた。そういえば、あの世界での『クローズプラン』はどうなったのだろうか。あの散弾使いのリンクスは自分の道を見つけたのか。ま

ぁ、どちらにしろあの世界でのセレンと仲良くやっていることだろう。

「だから…世界を再び変えるのか？」

思考に沈んでいたマクシミリアンが我に返ると千冬がこちらを見ていた。

「ああ。だが、ＩＳの時のようにはしない。そのために宇宙進出という道を作った」

そもそも今現在の女尊男卑になったのは人類の居場所が地球しか存在しないから。狭い地球での覇権争いの結果とも言える。ならば人類の居場所を宇宙に広げれば――――。

「だが…そこに私がいるかは分からない」

「……何故だ」

確かに、そこまでお膳立てがすんでいるならばマクシミリアンが居なくなっても解決する者がいるだろう。だが、だからと言ってマクシミリアンがいなくていいわけではない。

「決着をつけねばならない。これは…私がしなければならん」

「決着？」

「私の両親を殺し、そして私を襲撃してきた『イレギュラー』をな」

あの日以来姿をみせていない『ナインボールもどき』は必ず自分の前に現れる。恐らく自らを強化して。それはパルヴァライザーもどきになりかけている。『ナインボール』でもあり『パルヴァライザー』でもある兵器。

「死ぬ気なのか？」

「さてな？　死ぬつもりはないが……もし『イレギュラー』が進化していたら…わからんな」

例え中身が小物であろうとも完全に自己崩壊を起こしていれば暴走するだろう。例えＩＳの『意識』とやらがあっても影響をうけている可能性もある。どちらにしろ厄介な存在には代わりない。だが――。

「だが、欧州を引き込んだ。そして、すでにバルキリーやアーマー

ドコアは公表されている。もはや私が死のうとも止まらん」

メルツェルとレイスにはたとえ自分が死んでも計画を続行させるように告げている。メルツェルには計画の成就を、レイスには自分が死んだ場合の『マクシミリアン』として行動するように。

「ドイツにしても、若干の強硬手段ではあったが…ミハイルという協力者を得ることで動きやすくなった。アメリカもアフリカも同様」

すでに各国にＶＦ―１やアルジーヌ。またはそれらの発展機などを販売しており、すでにオルコット・インダストリーではＶＦ―１７がロールアウトされており、ＹＦ―１９とＹＦ―２１がテスト中である。さすがにＡＣシリーズはコジマ技術の独占の関係もあり、ノーマルＡＣに量産が限られているが。

「心配するな。お前たちのフォローも命令している。私が死んだからといって契約を反故することはしないさ」

話は終わりというように夏も近いというのにコートを翻してその場を去ろうとするマクシミリアン。だが、その動きは千冬がマクシミリアンに抱きついたことで止まった。

「……意外だな。こう言っては何だが……このようなことをするとは思わなかった」

「……お前の前では虚勢を張るのも、な」

千冬は言ってしまえば『小娘』だ。腹芸も苦手ならば、セシリアたちのように『お嬢様』や『軍人』としての自覚があるわけでもない。エイのように『閣下のためならば命を捨てる』という覚悟もない。すべてが中途半端と言ってもいい。マクシミリアンに言わせれば「元々そのような教育を受けていないのに何を言っている？」というところ。

「虚勢もなにも…お前は世界最強のＩＳ操縦者だろう？　それは事実ではないか？」

「私はただ束に『認識』されていただけだ。認識されていなければここにはいない」

「……ネガティブすぎるのもどうかと思うぞ？」

そこまで言うのはマクシミリアンも眉をひそめる。それでは、千冬にモンド・グロッソなどで負けていた連中は何だというのか？　本当に認識されていただけでこの場にいるというならば、それは負けていった連中に大変失礼なことではないか？

「お前が言うか？　私を『ちっぽけな存在』にしたお前が」

「……聞こうか？」

マクシミリアンを見上げる千冬の目は昏い。

「いいよな…お前はさ。束みたいに全世界を敵にしなくても世界を変えられるだけの力を持って……」

束は世界を敵に回してもそれを圧倒するだけの力がある。マクシミリアンはそもそも自身の味方が多い。

「私にはいない。いや、いるけども……結局私は『個人』だよ」

そして、その仲間も自分の全てを捨ててでも助けてくれるだろうか？　マクシミリアンの部下――それもＯＲＣＡ旅団の幹部たちはそうするだろう。束がどうかは分からないが、協力者はいるだろう。独占できるなら世界を敵に回すことも構わない連中もいるだろう。だが、自分にはいない。ＩＳが強いだけの、それ以外に特筆すべきものがない存在。

「だから…束と一緒にＩＳを世界に知らしめようとした。親がいない私たちが…一夏が住みやすい世界にできると思ったから束に協力

した」

「……悲劇のヒロインを気取るか？　世界はお前たちを中心に回っているわけではない。そもそも私とて親はいない」

親がいない子供など孤児院に行けばごまんといる。孤児院に行かなかったのは恐らく弟と離れたくなかったとかそこら辺の事情だろう。

「そんなつもりはなかった。一夏を守るにはどうすればいいか。だったら強くなればいい。そう思って束に協力した」

「姉弟愛か…感動的だな。だが、無意味だったな」

「ああ。結局、住みにくい世界になった。確かに、女性優位になったから『私』の発言権は大きくなった。でも、その代わりに『一夏』たちが弱くなった」

千冬は過ごしやすくはなったが、一夏は過ごしにくくなった。

「そして…私はＩＳに縛られた。守りたいはずだった一夏の傍にいることも出来ずに…そして、あの事件が起こった」

あの事件とは恐らくは『織斑一夏誘拐事件』。詳細は各国上層部だけに回されたが、あれは確か某国による織斑千冬二連覇を阻止するための策だったはず。もっとも、それを支持した者は粛清されたらしい。

「そして…一夏を救出する協力をした見返りにドイツ軍での教導をして……また一夏と離れてしまった」

「（……マッチポンプもいいところだな）」

マクシミリアンの心のなかのボヤキで主犯が分かってしまったが、マクシミリアンなどの各国上層部に名を連ねている者が知っていて、問題にしていないのは裏取引があったからである。だが、それを大半の人間は知らない。

「もう……疲れた。流されるだけなのは、な」

そして、その『事実』を知らない一人だからこそ千冬は磨耗していった。弟を守りたかったはずなのに、弟とは離れてしまった。そして、原因は分からないがようやく弟の傍にいることができて守れると思ったら――。

「一夏の周りにはたくさんの仲間が居た。そして……あいつはもう私の助力が必要ないほどに成長していた」

例えば、箒と鈴。精神的に未熟な部分が多いが、一夏を気にかけている。

例えば、セシリア。セシリアは一夏の目標として君臨している。

「……どうすればいいのか分からない」

「燃え尽き症候群という奴か？　くだらんな。そこまで生きていないだろうに。要するに、お前にも弟離れの時期が来たということだ。それは一夏も同様だ」

何時までも姉弟一緒などという事例はそれこそ数えるほどしか無い。

「もし何も分からないのなら……『こちら側』に来るか？　無論、一夏たちの安全も保障しよう。なんだったら…結婚でもしようか？」

「なに？」

「いや…予想以上に結婚の申し込みが多くてね。私としても面倒なのだよ。まぁ、打算がないとは言わないし、政略結婚だということも認めよう。だが……面倒な連中を黙らせるのには色々とインパク

トがなければならない」

マクシミリアン自身は血統や出自は気にしないが、そこはやはり欧州貴族。そう考えると一気に候補が居なくなる。王女殿下より娘を降嫁させてもよいとも言われたのだが、マクシミリアンとしては不測の事態などがないと限らないので丁重にお断りしておいた。

「……私と結婚したとして…お前にメリットがあるとは思えん」

「敵対状態のＩＳ陣営の士気低下、及びそれに伴う『平和的な』技術提携などだな」

あとは色々と面倒な部分。例えば、男女パワーバランスの調整や法律関係の見直しなど。

「だが、これは誓おう。もし、この手をとってくれるのならば……私が全力を持ってお前たちを守ろう」

そう言ってマクシミリアンは右手を差し出す。千冬はすぐに手をとろうとする自分を抑えつけた。目の前のマクシミリアンにはなんとも無力感を思い知らされてきた。だというのにマクシミリアンはこうして手を差し伸べる。一夏が姉離れをし始めたため、自分の『芯』が折れかけていた千冬にはすがるしかなかった。

「……愛してくれるのか？　『私』を見てくれるか？」

「それはおいおいだな」

それとお前の事は一個人として見てきたつもりだが？と続けたマクシミリアンの手を千冬はとった。

「……ほう？」

「どうされました閣下？」

食堂でラウラを膝に乗せながらクラリッサの話を聞いていたミハイルが懐から端末を取り出し、中に書かれていたデータを見ると一瞬仕事の顔になった。

「いや……他愛のないことだ」

クラリッサになんでもないと告げ端末を懐に戻すとラウラの頭を撫でる。ラウラも気持よさそうに目を細めているが、クラリッサは内心気が気出なかった。端末にあった名前を一瞬見たから。

『元ナチス人体実験成功体『ラーゼライ』の捜索結果について』

ラーゼライという男は言ってしまえば『ナチスの申し子』である。かつてドイツが推し進めていた人体実験。表には出ていないが唯一の成功体にして現在も世界に潜んでいるというナチス残党にとっては旗頭にもなる存在。ただし、その本性はナチスのように過激な選民思想などは持っていないが『狂乱』という名前の意味に相応しいだけの狂人でもあり、ラウラの遺伝子強化実験にも参加していたらしいが、すぐに行方をくらませていた。ドイツ軍で飼い殺しにしていた男だけあって、逃げた直後から捜索は続けられていたのだが、ようやくしっぽを見せた。

「（……すでに部下が5人死んでいる。最悪……私がケリを付けるか）」

ミハイルがここまでこだわるのはやはりラウラが関係しているからでもある。それに、ラーゼライの件に関しては『黒い森』のみで対処するつもりである。これ以上ドイツの不手際を見せるわけにもいかない。

「（ラウラはクラリッサに任せれば問題はない。私は私の仕事をするだけだ）」

外見は妹を甘やかす兄、しかしその内面はどこまでも冷徹な諜報機関の隊長。ミハイルもまた決断していた。

「……嫌な風だなぁ」

「……王虎さん？」

足元で尻餅を付いている一夏が見上げるのは、先ほど自分を負かしたまま空をみあげている王虎。

太極拳を教えてもらった後、互いに竹刀を持っての打ち合いになったのだが、やはり地力の差などで王虎が勝った。だというのに、王虎は空を見上げて眉をひそめている。周りで見ていた箒たちも訝しげに王虎を見ている。

「兄貴？」

「いや、なんでもない。よぉし……次は生身での殴り合いに行こうか？」

「お断りします！」

それらの視線に気づいたのかおどける王虎はいつもの王虎だった。

「（ま、あいつらが何かするなら俺は俺のやり方でこいつらを守るか）」

どんよりと曇り始めた空を見ながら王虎はそう決意した。

「……ラーゼライ。コジマ粒子のサンプルだ」

「よく見つけられたな？」

「……裏ルートで劣化コジマ弾頭を入手した」

そして、某国の山中にある研究所でもまた動き出そうとしていた。コジマ粒子のサンプルを受け取ったラーゼライはそのままコジマ粒子を解析し始め、十分後にはソルディオスを動かすだけの粒子量を確保していた。これがナチスの実験成功体の実力、エムはそう思いながら大きく息を吐いた。

「クックック。これでソルディオスが作れるな。あぁ、エム。ご苦労だった――――」

そして、今までは動かない鉄くずだったソルディオスにコジマ粒子を搭載したことで油断していたラーゼライのねぎらいの言葉が途切れた。ラーゼライが自身の体を見下ろすとＩＳ用のブレードが胸を貫いていた。

「死ね」

エムは憎悪を込めた呪詛を吐いた。しかし――。

「甘いなぁ……お前は――いや、スコールもオータムも人を見下しておきながら人を知らなすぎるなぁ！」

「え――」

ラーゼライの顔が１８０度回転して自分を見た。そこに浮かんでいたのは純粋な笑い。次の瞬間、エムは吹き飛ばされた。ＩＳを纏っていないと言っても鍛えられた体がそう簡単に吹き飛ぶはずはない。そう思ってラーゼライを見るとそこには――。

「まさかとは思うが……『自分の体を改造しない』とでも思っていたのか？」

そこにはＩＳらしきものがあった。そして、そのＩＳらしきものはエムに剣を突き立てていた。

「『イレギュラー』の頭部ユニットを俺の体に移植…そして、『俺たち』は生まれ変わった。さぁ、戦争の始まりだ！」

「――――ッ」

エムはブレードが胸を刺す寸前で逃げることができた。そして、向かうは亡国機業ではなくイギリス。恐らくコジマ技術では世界最高峰。

「あれは……駄目だ。あれは…」

自業自得なのかもしれない。でも、エムはあれの存在を許容できなかった。あの男は危険過ぎる。脳裏に浮かぶのはラーゼライが変貌した姿。

それは、イレギュラーを殲滅する存在の進化系『ナインボールセラフ』だった。

第３９話　決着と表面化（後書き）

散弾使いのリンクスは作者の装備です。作者は散弾・鳥足・グレネードさえあれば動きます。

マクシミリアンと千冬の関係は「半分政略結婚、半分は恋愛」です。若干政略結婚のほうが高いかも。まぁ、ラブコメとかがみたいならば後で番外編でも書きましょう。ラブコメが書ければね。

さて、多分分かる方もいると思います……マクシミリアンとミハイルに死亡フラグが立っていることを。これが折れるかどうかはこの後の展開次第。

第４０話　消える男

その報告がマクシミリアンに届けられたのは丁度千冬と話している時だった。

『亡国機業にコジマ粒子のサンプルが奪われた。しかし、数時間後に奪った主犯が投降してきた』

そのような報告がメルツェルより知らされた。そして、詳しい話を聞くと色々と危険な状態であることが分かった。

「動くか」

珍しく顔を険しくしたマクシミリアンに戸惑いながらもどうしたと聞く千冬。返ってきたのは色々とまずいことになったという言葉。そのまま二人で食堂にいるであろうミハイルの下へと走った。

「ミハイル。ラーゼライ、という男を知っているか？」

食堂に居たミハイルにその言葉を告げるとミハイルはラウラをクラリッサに預けるとマクシミリアンだけを連れて食堂を後にした。理

解出来ないのは千冬やクラリッサ。ただ、二人の様子からただごとではないことは理解した。

「どこでその名前を聞いた？」

「部下からだ。数時間前に海底にあるコジマ粒子貯蔵庫より数グラムの粒子が奪われたらしい。まぁ、迎撃はしたらしいが…何分海底ということもあり、な。そして、数分前に重症を負った強奪犯が投降してきたらしいが…その際に「ラーゼライが暴走している」と言っていたらしい。確か…ドイツ語だったと思ってな？」

「スマンが本国に戻る。暫くは連絡がとれん。何かあればクラリッサに言え。それだけの権限は与えておく」

ミハイルはそれだけ言い残すと歩き出した。マクシミリアンはその後姿を見据えながらメルツェルに通信を開いた。

「私だ。マクロスは何隻出来上がっている？」

『現状では一隻です。テストなしで運用するならばクォーター級が五隻ほど』

本来ならば『ＥＤＦ－１マクロス』の後は記憶に従い徐々にバトル級を製造していくつもりだった。しかし、コスト面や運用方法を考えた際にクォーター級を製造したほうがいいためそちらの方の量産を進めているのが現状。

「ならば…ＯＲＣＡ旅団を本格的に動かす。レイヴン師団、スカル師団共に出撃準備を整えておけ」

『戦争ですか？』

メルツェルの言葉にマクシミリアンは口の端を釣り上げた。

「ああ。しかも……とびきりの、な」

ミハイルの行動からラーゼライという男がどれだけ危険なのかは分かる。そして、コジマ粒子だけではなく『イレギュラー』と名付けられたあのＩＳも所有しているという。ならば、大規模な行動を起こすだろう。

「……被害は最小限にしなければ、な」

せめて太平洋上などの被害が少ない場所に引き摺り出さなければならない。そのような事を考えながらマクシミリアンは食堂へと戻っていった。

「中佐、私だ」

『総隊長。どうされました？　被害報告でしたら、追加で二人』

ミハイルはまた部下が二人死亡したことに息を吐いた。現在『黒い森』は故ハイツマンから得た情報を整理した結果、かなりの金がラーゼライを始めとするナチス残党に流れていたためその処理に動いているのだが、やはりというべきかよくて相打ち、悪ければ返り討ちにあってすでに１０人以上の部下が死んでいる。

「ラーゼライの居場所がある程度分かった。奴は現在、太平洋の無人島に潜伏しているらしい。近いうちに襲撃をかける」

それはマクシミリアンが齎した情報。投降してきた工作員はラーゼライがハワイに近い無人島にいると告げたらしい。

「その他のナチス残党はどうなっている？」

『現在、ビルガー小隊とファルケン小隊が担当している連中でハイツマンが支援していたナチス残党は全て処理したことになります。その他は…やはり分かりません』

恐らくまだナチス残党は世界中に潜伏しているようだが、ハイツマンが援助していたのはどれも構成員が多い残党組織。恐らくは、これで大半の芽は潰せた。

「……それで構わん。参謀本部に伝令を。現時刻を持ち、ＩＳ特殊部隊『シュバルツェア・ハーゼ』の指揮権を返上。それに伴い『黒い森』は全兵力を持ちラーゼライを処理する、と」

『了解』

ミハイルは懐から以前自分とラウラとクラリッサで撮った写真を暫

く見るとそれを仕舞い歩き出した。

「……ドイツの負の遺産は……俺が潰す」

それはドイツの為だけではない。すでに世界は再びかわろうとしている。その時のために負の遺産は無いほうがいい。すでに部下が死亡していることから自分も死ぬことになるだろう。だが軍の再教育に伴い諜報機関も新たに作られている。後顧の憂いはない。

「……ナチスは負けたのだ。何時までも……過去にすがることなぞ……あってはならん」

ラウラたちには会わない。後で参謀本部から通達が届く。それだけでいい。プライベートで使う携帯も握りつぶした。

「閣下！　先ほど軍から閣下の指揮下より外れろという通達が――」

ミハイルが色々と考えているうちにクラリッサの方に命令が下ったらしく、彼女は慌ただしくミハイルに駆け寄ってきた。ラウラは食堂で友人と一緒にいるのだろう。

「命令通りだ。『シュバルツェア・ハーゼ』は現時刻を持ち、参謀

本部預りになる」

「でも、何故…まさか『ラーゼライ』の件ですか？」

「……そこまで知っているならばいいか。そうだ。ラーゼライの確保のために『黒い森』は全隊員で任務に入る」

ラーゼライの件はすでにドイツ軍の尉官以上ならば知らされている。クラリッサはそれなら自分たちＩＳ部隊も投入してくれれば危険は少ない。ドイツ軍で最も危険な存在と言われている男でも、自分たちならば――。

「…発見次第殺せるか？　例え、奴がどのような状況でも。例え…子供を……ラウラと同じような人質をその手に抱いていようとだ」

「え？」

「ラーゼライは危険過ぎる。言いたくはないが……人質を取っているならば人質ごと殺す」

マクシミリアンからの情報で下手をすれば地球規模の行動を起こす可能性が高い。ならば、例え人質をとっていようと人質ごと殺す。ミハイルはそう決めていた。

「それに確保しようとした部下が１０人死んでいる。つまりは…こちらに投降する気はないということだ」

「で、ですが……」

クラリッサの困惑をミハイルは優しい笑顔で受け止めた。いつも無表情なミハイルしか知らないクラリッサは見惚れてしまった。このような顔もできるのか、と。しかし、ふと思った。もしかして死ぬつもりでは？と。

「クラリッサ。ラウラを頼む」

「待ってください！　それじゃあまるで死ぬみたいじゃないですか！」

「……諜報機関とはそのような場所だ。全隊員に家族や恋人との別れを済ますように通達しておいた。最悪でも相打ちに持ち込む」

参謀本部より『高性能爆薬スパイナー』と『ライトンＲ３０爆弾』の使用許可ももぎ取った。ラーゼライの戦力がどれほどのものかは分からないが、最悪でもラーゼライ本人は殺せるはず。

「閣下……」

「……ラウラを頼む。それと……お前とラウラと過ごした日々はよかった」

ミハイルはＶＴシステムの事件が終わってからの生活は悪く無いと思っていた。妹は可愛いし、自分と妹をどうにかして仲良くさせようとするクラリッサには感謝していたし、好意もいだいていた。だが、自分は軍人である。武を持って人を守るのが自身の本懐。

「……閣下の……馬鹿……」

ミハイルは後ろで聞こえる泣き声に止まること無く歩き出した。

この日、ミハイルは姿を消しイギリスとの窓口の役割などはいつの間にかクラリッサに引き継がれていた。マクシミリアンもそれに同意しているため大した問題にはならなかったが、ミハイルを知っている者たちには衝撃を与えることになった。

「…臨海学校か」

「つーか要するにあれだろ？　海上での訓練とかするんだろ？」

ＩＳ学園にまだ滞在していたマクシミリアンと王虎はそう言って資料を読んでいた。ミハイルが姿を消したことで、ラウラが泣いたりと色々問題はあったが、マクシミリアンには関係がない。

「さて…私もイギリスに戻るか。チェルシー、織斑一夏の特訓の方はどうなっている？」

「そうですね…エイさんのお話では「度胸と広い視野は得られたでしょう」とのことです」

後ろに立っていたチェルシーはそう言ってエイが書いた報告書をマクシミリアンに差し出す。そこには一夏の特訓の内容などが事細かに書かれていた。

「まぁ、それだけあれば十分だろう。王虎、後はお前に引き継ぐ」

「ああ……マックス。お前……死なねぇよな？」

ミハイルが音信不通になったのは任務のためと本人から説明を受けていたから心配はそこまでしていないが、どうも最近になって事態が変わりすぎている。ＩＳが発表された時のように突然ではない。ちゃんと原因になりそうな人間も分かっているし、どのようなことが起こるだろうということもある程度分かる。だが、だからこそ『気持ち悪い』のだ。

「そうだな…死ぬ気はない」

「……そうか」

王虎もマクシミリアンのやっていることを知っているだけにそれ以上何も言わなかった。

「ままならねぇな」

「それが世界だ」

「……特訓終了」

「あ、ありがとう…ございました」

相変わらず地に倒れ伏している一夏とそれを見下ろす真改。今日が真改たちに教えてもらう最終日ということで全力で戦ったのだが、やはり実力差で勝つことはできなかった。

「…性能が悪くとも……戦法次第で勝てる」

真改は主に刀一振りで一夏と戦っていたが、劣化ＩＳとも言える『ＥＸ―ギア』はＩＳには遠く及ばない性能。しかし、それで一夏を倒したのは戦法と度胸にほかならない。

「まぁ…視野を広くとって常に冷静に、そしてここ一番には一歩踏み込むだけでも変わりますよ」

ミサイルカーニバルで一夏をズタボロにしまくったエイはそう言ってまとめる。一夏はその発言に納得しかねていた。いや、確かにその通りなのだがミサイルを撃ちまくった人に言われたくはないというのが本音。難しいところである。

「コホン。とにかく、アナタはこれから重要な選択を迫られる事になると思います。その時にどうするか…刹那の感情で決めてはいけません。自分の取る行動でどう周りが変化するか…しっかりと考えなければなりません」

それは例えば先のラウラの事件。あの時は尊敬する姉を模した姿に憤ったが、その姉自身から言われたのだ。勝手に動けばどうなるかを。

「落ち着くだけで色々と見えてくるものがあります。それを忘れないようにしてくださいね？」

「はい…」

一夏はいまいち強くなったという実感はないが、エイはそんなモノだという。強くなったという実感は実戦のような状況で初めて分かるという。

「さて、私たちはイギリスに戻らないといけません。織斑一夏。これからが頑張ってくださいね？」

エイはそう言って一夏の頭を撫でると真改とともにその場を離れていった。

「真改。閣下はなんと？」

「……全旅団員に戦闘準備命令」

「つまり…何かが起こるということですね」

エイは真改と会話しつつも現状の把握に努めた。すでに自分たちが向かおうとしている道は険しいもの。だが、マクシミリアンは止まることはない。ならば、自分たちはその露払いをする。それが自分たちの役目。

「……でも……出来れば戦うことは少ないほうがいいですね」

「……闘争は人の歴史なり」

真理ではあるがそれでも願ってしまうエイだった。

第４０話　消える男（後書き）

ようやく投稿できた。忙しすぎる……。まだ師走じゃないのに。

さて…ミハイルが消えましたが、次回で主役はります。多分、ラーゼライの本拠地に乗り込むかと思います。メタルギアとかそこら辺？　まぁ、技量があれば敵地潜入物になるかも。

それと、今回出てきた「高性能爆薬スパイナー」と「ライトンＲ３０」の元ネタ分かる方いますか？　いたら、一緒に御飯食べに行きましょう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5620t/

ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　＜これが私のお兄様＞

2011年11月27日20時56分発行